

# 博多 76

— 博多遺跡群第117次調査の概要 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第667集



2001

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第667集

「博多76」 正誤表

58ページ 写真11右側

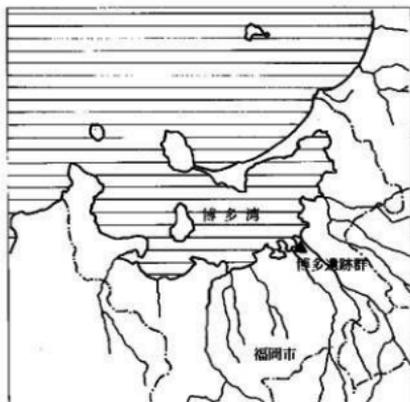
3 SD2204イヌ (部分) 上面  
右胚骨 (誤) → 右脛骨 (正)

3 SD2204イヌ (部分) 側面  
右胚骨 (誤) → 右脛骨 (正)

# 博 多 76

— 博多遺跡群第117次調査の概要 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第667集



遺跡調査番号  
遺跡略号

9919  
HKT-117

2001

福岡市教育委員会



1 SX1201出土素焼人形 (獅子猿)



2 SX1201出土素焼人形  
(三善瓊)



3 博多117次 出土緑釉陶器



4 博多117次 出土ガラス器、ガラス滓・素材

# 序

古くから大陸文化の門戸として栄えてきた「博多」の発掘は、近年の都心部の再開発に伴い、現在まで120次の調査を越え、調査の進展とともに新たな知見が得られています。

本書は、博多区冷泉町地内の共同住宅建設に先だって発掘調査を実施いたしました博多遺跡群第117次調査の概要を報告するものであります。発掘調査では、古墳時代から江戸時代にいたるさまざまな遺構や遺物を検出することができました。特に中世都市「博多」のまちの跡を検出するとともに、大陸との交易でもたらされた多数の輸入陶磁器が出土しました。さらには江戸時代末期の多数の博多人形の破片を検出することができました。これらは「博多」の歴史と文化の足跡を解明する上で貴重な資料となるものです。

今後、本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査費用の負担をはじめとするご協力を賜りました渡邊敏助氏および同都産業株式会社の方々をはじめとする関係各位の皆様に対し、心から謝意を表します。

平成13年3月30日  
福岡市教育委員会  
教育長 生田 征生

# 例 言

- 1、本書は、福岡市教育委員会が、平成11(1999)年6月7日から同年9月27日まで発掘調査を実施した、共同住宅建設に伴う博多遺跡群第97次調査の概要の報告書である。
- 2、調査で検出した遺構は、その性格に関わらず、連番号を与えた。また排土置場の都合上、調査区を反転して調査したが、西側をⅠ区、東側をⅡ区としている。Ⅰ区は3面の調査を、Ⅱ区は2面の調査を行ったが、Ⅰ区第1面の遺構を1001～、Ⅰ区第2面の遺構を2001～、Ⅰ区第3面を3001～、Ⅱ区第1面を1201～、Ⅱ区第2面を2201～の遺構番号を与えている。ただし間に欠番もある。また、井戸などの深い遺構については、完掘を次の遺構面の調査時に持ち越すことが多かったため、同一の遺構で各面ごとに番号を付したことがある。これは報告中で整理している。報告では、遺構の性格を示す記号として、SB(建物遺構)・SC(竈穴住跡)・SD(溝)・SE(井戸)・SK(土坑)を用いた。性格不明遺構についてはSXとした。
- 3、本書には可能な限りの多くの遺物実測図を記載したため、限られたページ内では遺物の細かな説明ができなかった。遺物の種類・時期や出土遺構は実測図の下に小さく表示し、理解を助ける工夫とした。また、土師器の坏・皿については底部調数を図の下に略して表示した。ヘラはヘラ切り(ヘラ起こし)、糸は回転糸切り、板は板目工痕のことである。
- 4、本書に用いる方位は、磁北である。またレベルは冷泉小学校に設置していた国土地理院水準点の標高を移動したものである。なお国土地理院を移設しようとしたが、調査区の周辺においては、以前に埋蔵文化財庫で委託設置した博多遺跡群内の四土座標基準測点の多くが近年の開発や道路工事であわられてしまったため、それを果たすることができなかった。したがって調査区内の座標は任意のものである(隣接する118次調査地点とは座標が同一になっている)。
- 5、本書に使用した遺構実測図の作成は、久住猛雄、坂元雄紀、西堂将夫、佐野和美、能登原孝道、八久保貴が行った。
- 6、本書に使用した遺物実測図の作成は、主に上方高弘と平川敬治があたり、久住猛雄、西堂将夫、鎌ヶ江賢二、廣田容子、山口裕平、池田光太、根岸洋が行った。また拓本は成清直子、廣田容子が行った。また鉄製品と銅製品の鋳造としては富田輝子、成清直子が行った。
- 7、本書に使用した図の製図は、成清直子、廣田容子、上方高弘、鎌ヶ江賢二、常松幹雄、松本善福、久住が行なった。
- 8、本書に使用した写真の撮影は、素焼人形についての多くは山村信榮(太宰府市教育委員会)が、既骨については岡山洋がそれぞれ行い、他の遺物写真と全ての遺構写真については久住が行なった。
- 9、本書の編集は久住が行い、執筆は①の遺物群の資料分析については岡山洋が、②の素焼人形については山村信榮が行い、③の全ての久住が行なった。
- 10、本調査に関わる遺物・記録類(図面・写真)は福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理される予定である。特に、本調査ではきわめて多くの遺構や遺物を検出したが、諸種の制約により報告できなかった遺構・遺物が多く存在する。資料が広く活用されることを望みたい。

## 本文目次

I	はじめに	1
1	発掘調査に至るまで	1
2	調査の組織	2
II	遺跡の立地と地理的歴史的環境	2
1	博多遺跡群の地理的歴史的環境	2
2	調査地点の周辺の埋没地形と調査成果	5
III	調査の記録	7
1	調査の経過	7
2	調査地点の地形と層序	9
3	遺構検出各面の概要	11
4	近世の遺構	14
5	古代末から中世の遺構	15
(1)	井戸 (SE)	16
(2)	溝状遺構 (SD)	21
(3)	土坑 (SK)	21
(4)	建物 (SB)	24
6	古代以前の遺構	24
7	出土遺物	25
(1)	中世の七器・陶磁器	25
(2)	古墳時代後期から古代の土器	52
(3)	弥生時代から古墳時代前期の土器	53
(4)	その他の遺物	57
(5)	銅銭	57
IV	おわりに	57
V	博多遺跡群第117次調査出土の獣骨(動物遺存体)について	58
VI	博多遺跡群第117次SX1201出土の素焼人形について	60

## 図版目次

<p><b>図版 1</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. I区第1面全景(北から)</li> <li>2. I区第1面全景(南から)</li> <li>3. I区第2面全景(南から)</li> <li>4. I区第2面全景(北から)</li> <li>5. I区第3面検出状況(西から)</li> <li>6. I区第3面北半掘削状況(北から)</li> <li>7. I区西壁土層北側(東から)</li> <li>8. I区西壁土層中央(南から)</li> <li>9. I区西壁土層南側(東から)</li> </ol> <p><b>図版 2</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>10. II区第1面中央～南半状況(東から)</li> <li>11. II区第1面全景(南から)</li> <li>12. II区第1面北側状況(西から)</li> <li>13. II区第2面全景(北から)</li> <li>14. II区第2面全景(南から)</li> <li>15. II区第2面中央部状況(東から)</li> </ol> <p><b>図版 3</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>16. SE2002土層(東から)</li> <li>17. SE2002完掘状況(西から)</li> <li>18. SE2006完掘状況(南から)</li> <li>19. SE2006井戸枠出土状況(南から)</li> <li>20. SE2009完掘状況(西から)</li> <li>21. SE2011井戸枠下層小刀出土状況(北西から)</li> <li>22. SE2011完掘状況(西から)</li> </ol> <p><b>図版 4</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>23. SE2011井戸枠出土状況(北から)</li> <li>24. SE2407(左)・SE2406(右)完掘状況(北から)</li> <li>25. SD1050(SD2004上層)土層(東から)</li> <li>26. SD2004土層(西から)</li> <li>27. SD2004完掘状況(東から)</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>28. SD2204中央土層(西から)</li> <li>29. SK1038獣骨出土状況上面(西から)</li> <li>30. SK1038獣骨出土状況(途中)(南から)</li> </ol> <p><b>図版 5</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>31. SK1038下層獣骨出土状況(北から)</li> <li>32. SK1012土層(東から)</li> <li>33. SK1024土層(北から)</li> <li>34. SK1024シルト面出土状況・断り割り土層状況(北から)</li> <li>35. SX1201掘削状況(北から)</li> <li>36. SX1201中央柱状土層(東から)</li> <li>37. SK1352(1219)完掘状況(北西から)</li> <li>38. II区グリッド砂丘面遺構掘削状況(北西から)</li> </ol> <p><b>図版 6</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>39. SK2241土層(西から)</li> <li>40. SK2219土層(東から)</li> <li>41. SK2219完掘状況(北から)</li> <li>42. SK2232(左)・SK2236(右)掘削状況(西から)</li> <li>43. SK2236完掘状況(西から)</li> <li>44. SX2052出土状況(東から)</li> <li>45. SP9010検出状況(西から)</li> <li>46. SC2231検出状況(南から)</li> <li>47. SC2231中央部出土状況(南から)</li> </ol> <p><b>図版 7</b> 近世末SX1201出土素焼人形写真(1) PL001-007</p> <p><b>図版 8</b> 近世末SX1201出土素焼人形写真(2) PL008-014</p> <p style="margin-top: 20px;">表表紙写真 SK1201出土親子猿人形 裏表紙写真 SC2231出土古銅系土器</p>
--	--

# I はじめに

## 1 発掘調査に至るまで

平成10(1998)年9月4日、渡邊敏助氏から、博多区冷泉町83,84,85,90-2番(および99番の一部)における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前審査願が福岡市教育委員会埋蔵文化財課に提出された。申請地は、博多遺跡群として周知されている範囲内であり、周辺の調査からも中世を中心とする濃密な遺構の分布が予想された。埋蔵文化財課では関係者と協議の上、平成11年2月2日に同地の試掘調査を行った。その結果、申請地は地表下約1.7mより下に、中世～近世の遺物包含層を確認し、さらに地表下約2.6mで暗褐色砂質土面を確認し、中世前期の遺構を検出した。この結果を踏まえ、遺跡の取り扱いは関係者と協議を行った。開発申請地は、当時は渡邊敏助氏の所有であったが、土地売買により買主となる岡部産業株式会社が実際の開発者となる予定であったため、埋蔵文化財課と渡邊敏助氏、岡部産業株式会社による三者協議もたれた。この三者協議により、調査費用の負担について渡邊敏助氏、岡部産業株式会社の二者間で2分の1ずつ按分するという都合に達した。これを受けて、共同住宅の建築工事によって破壊される部分を対象に、記録保存のための発掘調査を実施することになった。その後、平成11(1999)年5月24日に渡邊敏助氏、岡部産業株式会社と埋蔵文化財課の三者間で受託調査の契約が交わされ、平成11年6月1日より調査着手の予定となった。

調査予定日の前日の6月31日に、岡部産業株式会社の代理人である株式会社ダイナの恒古保憲氏と現地協議を行った。建設予定地(調査予定地)の範囲確認の予定であったが、設計図面と現地では異なるように思われたので、再度協議となった。この結果、契約でうたわれた6月1日からの調査着工は不可能となった。6月1日に恒古氏と再度協議。現況図面での確認の結果、西側の一段下がった駐車場の一部(神世第1ビル駐車場の一部)まで売買(建設)予定地であり、調査範囲を含むことが判明した(図面上の地境と現況の地境が異なっていた)。駐車契約が一部未解約であり、重機掘削の前提として、駐車場のアスファルトと現地境のブロック塀の除去、および粉塵防止と安全のための工事用フェンスが必要と判明した。調査着工前にこれら工事が必要であり、工事方法・予算について、原因者のもう一人である渡邊敏助氏を含めた別途協議が必要となった。なお、この日に現場事務所のユニットハウスがすでに設置されている。6月2日に、恒古氏および渡邊敏助氏および渡邊由紀氏を交えて再度現地協議を行った。民間開発の調査における条件整備は、開発業者に協力して頂き、開発者が委託している建設業者に依頼してある程度整えてもらうことが多い。ところがこの場合は、調査時までの土地所有者が個人である渡邊敏助氏であったことと、岡部産業株式会社側はまだ土地を買取りしていないことと建設業者にまだ委託していないことを理由にフェンスの設置については難色を示されたが、現実に隣地の駐車場の車等に何らかの損害を被る可能性があったため、三者の協議の結果、渡邊敏助氏側と岡部産業株式会社側が両者の開発者としての責任において費用を按分する形で、工事業者に委託して売買地境の工事用フェンス設置及びアスファルトのカッター入れを行うこととなった。また駐車場の件については早急に契約解除していただくことになった。このような経過で、これら諸工事後次第、調査着工ということになり、結果として調査着工は遅延することになった。また、アスファルト・ブロック等の産業廃棄物の破壊・移動は調査終了まで埋蔵文化財側の重機による場内処理ということになった。調査は、以上のような現地協議と条件整備を行った上で6月7日より開始している。なお、現地において条件整備に奔走していただいた渡邊敏助氏、渡邊由紀氏、株式会社ダイナの恒古保憲氏には重ねて感謝申し上げます。

## 2 調査の組織

調査委託：渡邊敏助

岡部産業株式会社

調査主体：福岡市教育委員会 教育長 西憲一郎（調査年度）、生田征生（整理年度）

調査総括：埋蔵文化財課 課長 山崎純男

埋蔵文化財課調査第二係長 力武卓治（調査年度）

調査第一係長 山口譲治（整理年度）

調査庶務：文化財整備課 宮川英彦

調査担当：埋蔵文化財課調査第一係 久住猛雄

試掘調査：埋蔵文化財課事前審査係 田中寿夫、屋山洋、中村啓太郎

調査作業：西堂将夫、八久保舞、伊藤優介、光田剛（以上、福岡大学学生）、佐野和美、能登原孝道（以上、九州大学学生）、坂元雄紀（早稲田大学学生）、木田ひろ子、朱田常人、草田絹代、高木美千代、田中和祐、田中華、徳永洋二郎、島居原良治、中山竹雄、平山栄一郎、松岡芳枝、脇田栄

整理作業：成清直子、甲斐田嘉子、富田輝子、平井裕子、廣田容子

以上の他、出土遺物の凶化の多くは上方高弘と平川敬治が行っている。その他の遺物実測図作成者については例言に記した。また出土した獣骨の整理と分析は屋山洋（埋蔵文化財課）が行った。また近世末期の素焼人形（博多人形）の整理報告は山村信榮氏（太宰府市教育委員会）をお願いした。記して感謝申し上げたい。

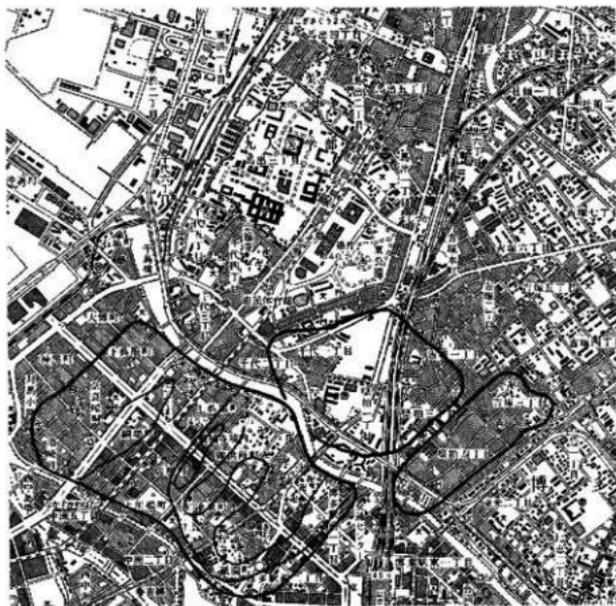
## II 遺跡の立地と地理的歴史的環境

### 1 博多遺跡群の地理的歴史的環境

博多遺跡群をめぐる歴史的な環境については、周辺の報告書で詳細に触れられていることもあり、本報告書では通史的な詳細を述べることをしない。特に中世都市としての「博多」については、博多遺跡群の他の報告書において多くの記述があるので、それらを参照して頂きたい。ここでは、博多遺跡群の地理的環境と、本書の第117次調査において検出された古墳時代初頭前後の集落に関係する他の調査地点と周囲の遺跡、当該期の遺跡の動態について述べておきたい。

博多遺跡群は、福岡平野の中央部を北西に流れる那珂川と、江戸時代に御笠川の河川付け替えにより開鑿された石堂川とはさまれた砂丘上に位置する。中世までは御笠川は博多遺跡群の南で西行し那珂川に合流しており（旧比恵川）、これが遺跡群の南を画していた。遺跡群の西側は低くなるも現在の聖柏付近とは地続きであった可能性が高い（第1図参照）。遺跡群が立地する砂丘は3列からなり、内陸側から砂丘Ⅰ～Ⅲと称される。内陸側の砂丘Ⅰ・Ⅱは「博多浜」、海側の砂丘Ⅲは「息の浜」と呼称される。砂丘は内陸側から順次形成され、海側の「息の浜」に町場が形成されるのは13世紀後半の元寇防塁以降である。一方、「博多浜」砂丘には弥生時代にすでに遺構の展開が見られ、次に述べるように古墳時代初頭に一時ピークを迎える。

古墳時代初頭前後の集落は、砂丘Ⅰの多くの部分と、砂丘Ⅱの南半部に展開する。ここで注意すべきなのは、中世以降の濃密な遺構によって、古墳時代のような古い遺構は多く破壊されており、調査



第11図 博多遺跡群と調査地点(▲)の位置(1/25,000)  
 1. 博多遺跡群 2. 聖物遺跡群 3. 古塚遺跡群  
 ※古塚遺跡は8世紀頃の砂丘

で検出されているものは本来の一部であること、また市街地での調査故の諸般の制約より、最下面の調査が不十分な場合があることである(特に欠板工法を用いず調査区外縁に法面を持たせて調査する場合は最下面の実質調査面積は小さくなる)。今回の博多117次の調査でも、竪穴住居の痕跡と考えられる遺構1とそれに伴う土坑1のみが確実な古墳初頭の遺構であるが(遺物はパンケース1箱)、遺物を全て目を通した結果、後世の遺構や包含層に混ざった状態で、この時期の遺物がパンケース5箱分確認できた。これらも考慮すれば、博多遺跡群の該期の集落が、質量ともに拠点的な内容を示すことが理解される。この時期の遺構が比較的良好に残っていた調査地点では(36次、59次など)、平均300㎡につき5棟以上の竪穴住居が検出されている。一方、この時期の集落の展開しうる面積は20ha前後と推定され(砂丘ⅠとⅡの間の谷部は除く)、上記の状況から、300㎡につき同時存在1~2棟程度と仮定すれば、実に600~1300棟もの竪穴住居があった計算になる。もちろん、墳墓になっている地区や、住居の少ない地区、生活施設の希薄な地区もあろうから、これは机上の空論である。住居が濃密に分布する範囲は集落展開面積の4分の1程度と推定した場合(砂丘Ⅰの中央から西部を上に見て)、5ha前後で300㎡につき1棟の住居があるとした場合、160棟以上の住居があった計算となる。なお300㎡につき同時存在1棟前後という状態は、同時期の集落からみればかなり濃密な分布の部類に入るが、同じく海浜砂丘上の人集落で濃密な分布を示す早良区の西新町遺跡は比較的良好な残存状況で近い密度を示し、それほど突飛な推定ではない。いずれにしてもかなりの大集落となり、この時期の博多遺跡群の重要性の認識はできであろう。

古墳切頭前後の時期のみ、大きな集落が出現し消長する例が博多湾岸の砂丘には多く、西新町・藤崎遺跡群は博多遺跡群に匹敵する大遺跡群である。両者に準ずる遺跡として、堅粕遺跡群、姪浜遺跡群、今宿遺跡群等があり、唐原遺跡もこれらにやや準ずる集落である。箱崎遺跡群や吉塚遺跡群もこの時期の遺構の広がりはまだ不明な部分が多いが、準ずる性格と規模を有する可能性がある。これらの海浜の砂丘上の集落遺跡に特徴的なことは、外来系とりわけ大部分は在地生産だが畿内系・山陰系の土器群（広義の布留様式）が多数を占めることであり、内陸部の中小集落では多く存続している伝統的な在来系の土器群はむしろ少数であることである（ⅡB期には外来系主体となる）。また、国内各地および韓半島からの搬入土器が少なからず存在することが特筆できる（時期区分は、久住猛雄1999「北部九州における庄内式併行期の上器様相」『庄内式土器研究』ⅩⅨ、を参照）。例えば西新町遺跡では、当時の国内の集落としては最多数の韓式系土器（陶質土器、瓦質土器、軟質土器）が出土し、山陰系の搬入土器も特に多い。博多遺跡群においても、17・33・102次より伽耶系の陶質土器が出土し、17次では築浪系の漢式土器と百濟（馬韓）系の短頸壺が出土している。国内各地からの搬入土器では、むしろ弥生終末段階（ⅠA-ⅠB期）が多い。50次で庄内大和型甕の最古相(?)が、50・102次で東海西部系のS字口縁壺A類とB類古相が、17次では山陰系の鼓形器台、97次では山陰東部系の甕や簡描文を有する壺、北陸系壺があり、これらは終末段階である。また、庄内式甕（「筑前型」甕）が他の集落に比べ目立って出土する。筑前型庄内甕は、博多遺跡群の背後に控える巨大な比恵・那珂遺跡群や、雀戸遺跡などの特定地域に偏って集約的に分布している（久住1999前掲）。なお博多97次や箱崎8次では播磨型庄内甕が、比恵50次では大和型庄内甕が出土している。このように、博多遺跡群は比恵・那珂遺跡群などととも、北部九州における畿内系土器受容のセンター的位置を占めることが指摘できよう。なお博多遺跡群では、弥生後期後葉段階ですでに、70・81・97・118次で瀬戸内系の甕や壺、97次で東海系ないし近江系の高坏や鉢があり、臨海性の立地もあり、港町的な性格の先駆けが見られる。しかしこの時期と、弥生終末から古墳前期前半の集落の様相の間には飛躍があり、同様の遺跡群が湾岸に同時に出現することから広い地域の中での遺跡群の動態を見る必要がある。

弥生時代中期後半以降の福岡平野では、春日市の須玖岡本D地点の「玉墓」や青銅器工房群を中心とした須玖・岡本遺跡群と、福岡市博多区の比恵・那珂遺跡群の両者100haを超える巨大集落で「奴国」の正副二大中心をなすが、須玖・岡本遺跡群は弥生終末から古墳切頭を境に急激に縮小し、代わって比恵・那珂遺跡群が隆盛をなし、新しい畿内系七器様式受容のセンターとなる。福岡平野最古の前方後円墳である那珂八幡古墳がその中に築かれる。すなわち、弥生時代における須玖・岡本遺跡群の「政治・祭祀センター」的機能が比恵・那珂遺跡群に、比恵・那珂遺跡群の「交易センター」的機能が博多・堅粕遺跡群および西新町・藤崎遺跡群に分散・移動した結果と考えられる（久住猛雄2000「奴国の遺跡—比恵・那珂遺跡と須玖・岡本遺跡群—」『考古学から見た弁・辰韓と倭』）。博多遺跡群では、<sup>51</sup>時（古墳時代初頭）としてはもっとも整い、かつ技術レベルの高い鍛冶工房群（村上恭通1999「倭人と鉄の考古学」）が検出されていることも遺跡の性格を考える上で特筆されよう（59・65次）。博多遺跡群などの湾岸の港町的な大集落群の出現の一方では、福岡平野や早良平野の南部において、新興の集落群が出現することも注意される（春日市柏田・門田遺跡、那珂川町松本遺跡・仲遺跡・今光遺跡・中原遺跡、福岡市早良区野芥遺跡・東入部遺跡群など）。これらの新興集落群は畿内伝統的V様式系七器群が比較的多いことも特筆される。外来集団に新田開発を行わせるために新たな集落が配された可能性も含め、平野全体の集落の内編成の中で解釈すべき現象であろう。

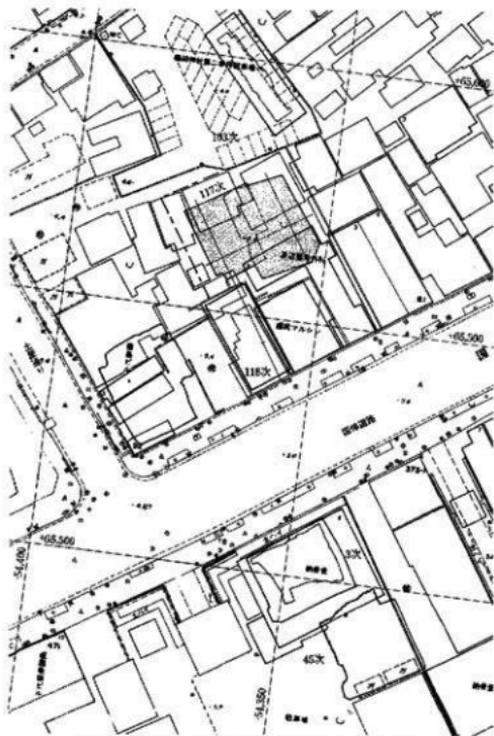
博多遺跡群の古墳前期の墳墓には、方形周溝墓やその主体部としての割竹形木棺が、17・22・24・27・36・62・65・70・97次などで検出されている。また115次では二重口縁壺が溝状の凹みから出土しているのも、これもその可能性がある。砂丘Ⅱ中央で当時の遺構の北限に近い。これらは、規模的にも、副葬品の内容的にも、特別に傑出したものではなく、集落の内容も首長居館等の中心的な施設が不明確なことに対応する可能性がある。これは西新町遺跡に対応する墓地としての藤崎遺跡の群在する方形周溝墓も同様で、似たような集落構造が推定できよう。ただし、当時の集落縁辺の62次(ⅡB期)と17次(ⅢA期)の方形周溝墓は20m前後でやや大きいことが注意される。17次地点では、方形周溝墓の造営に先立って、東西方向に溝間5.5mの並列溝が弥生終末から古墳初頭のある時期に掘削されており、地下鉄工区Q区まで続き、延長60m確認されている。報告では「道路」の可能性が指摘されている。この位置は遺跡群の南縁にあたり、これに沿って続く可能性もある。なお比恵・那珂遺跡群においても、類似の遺構が遺跡群の西縁を南北に貫くように検出されつつあり、その時期も同じである(久住猛雄1999「弥生時代終末期「道路」の検出」『九州考古学』第74号)。同時期の「道路」の整備を評価すれば、平野全体の遺跡群の動態と合わせて、弥生終末から古墳初頭の博多遺跡群の急激な拠点化は、ある意図をもって計画的に建設されたと評価すべきであろう。今後の調査における、この時期の遺構と遺物の展開の確認と、すでに調査・報告されている資料の詳しい分析が期待される。集落の展開は古墳時代前期中頃(ⅢA期)をもって終了し、以後、古墳時代中期にかけて一帯は墳墓としてのみ利用される(青留秀敏1993「弥生時代から古墳時代の博多」『法哈達』第2号)。5世紀前葉には全長56m以上の前方後円墳である博多1号墳(28・31次)が築造されるのがその代表である。博多1号墳の周囲には、同時期前後の小規模な墳墓(木棺墓、小石室、石棺墓)が分布している(28次)。地下鉄工区L区で上墳墓が、37次で木棺墓が検出されている。いずれも5世中頃前後である。また近年の調査では、「B種ヨコハケ」の円筒埴輪を有する5世紀後半ないし末葉の、全長30m前後の前方後円墳が存在したことが判明した(博多2号墳、109次)。また33次では6世紀前半頃と思しき新相の円筒埴輪が検出されており(第526集付編)、さらにもう1基の首長墓が存在する可能性が高い。

なお、西新町遺跡や比恵・那珂遺跡群なども同じ頃(ⅢA期)に集落が廃絶ないし急激に縮小しており、何らかの大きな社会背景が存在したのであろう。これ以後は、現状の調査成果では、6世紀末(須恵器ⅢB期)に至ってはじめて博多遺跡群で集落が内側されるようである。

なおこの項は、博多遺跡群第97次調査の概要報告(福岡市埋蔵文化財調査報告書 第558集)における同様の文章を、その後の検討や調査成果を踏まえて訂正、補筆したものである。

## 2 調査地点の周辺の埋没地形と調査成果

第117次調査地点は、博多浜を形成する砂丘が中間でくびれ、砂丘ⅠとⅡとに分けられる部分の西側、砂丘Ⅰの北側斜面に位置している。周辺の調査地点(第2図)における淡黄褐色砂の基盤砂丘(古墳時代以前)は、南の118次では北側へはきわめて緩やかに下るようであるが(3.4m~3.2m)、本調査地点ではやや傾斜がきつくなる傾向になり、調査区西壁での確認では(第3図)、南側で標高3.2m前後、北側で2.8m前後となる。さらに北に位置する103次は(第627集)、砂丘ⅠとⅡの間の谷部にあたり、基盤の黄白色粗砂(水成層?)面は標高1.6m前後であるが、ここで検出された奈良時代の溝SD18はあまりに浅く実際の掘り込み面はより上位にあると推定されるので、ここで迫っている古墳時代頃の砂丘面はその上層の「灰色砂」上面とすると標高1.9m前後となる。さらに北の80



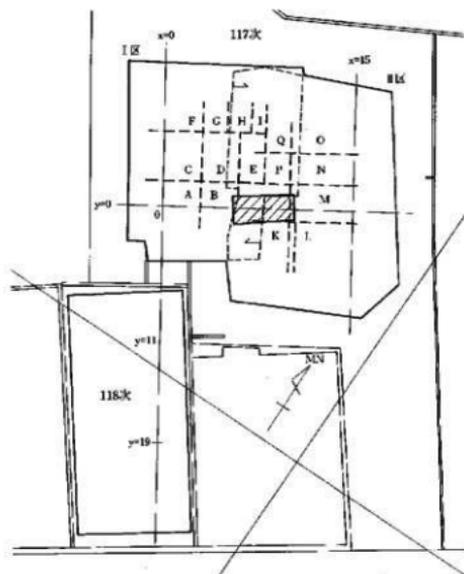
第2図 117次調査地点と周辺調査地点位置図 (1/1,000)

次では北側にゆるく上りはじめ(砂丘Ⅱ)、南側では弥生時代面の細砂層上面が2.2m前後、その上のクロスナ層上面(層中に古墳時代遺物、上面は奈良時代面)が2.4m前後を測る。117次の西の63次では(第286集)、古墳時代の砂丘面は標高2.8~3.2m前後のようであり、若干だが微妙に西隣の118次の同じ面より西へ下るようである。なお63次地点から道路(「土居通り」)をはさんだ西側での試掘では、砂丘が急に落ち込み、中世でも遺跡形成が明白ではない状況であったとのことである。いずれにしてもその付近で博多遺跡群の西縁があるのであろう。ひるがえって南側に目を向けると、117・118次から国道道路をはさんだ南側の3次調査では(第515集)、博多の初期の調査のため層位関係がやや不明確だが、標高3.2m前後の黄褐色細砂面で弥生後期後半の竪穴住居が検出されている。住居が浅く検出されていることと、報告以外に古式土器等も出土しているので、古墳時代面はこれよりやや上であらうが、118次地点とはレベル

差が認められない。3次の南の45次では(第248集)、古墳時代前期遺構の検出面(第4面)は3.3~3.4mだが、遺構の残りに上面の第3面(標高4.0m前後)とこの間のレベルに本来の古墳時代面が想定され、わずかに地形が高くなると考えられる。45次から南東100mの50次地点(第249集)での基盤淡黄色砂面が標高3.7~4.0mであることが参考となる。45次から50次の地点、およびさらに祇園町交差点付近までにおいては古墳時代前期の遺構が特に濃密であり、博多浜の砂丘Ⅰの西半から中央の最高所で安定した地形部分に博多浜における最初の大集落(前項参照)が立地したようである。

以下、周辺の調査成果(古代以降)について記す。中世初期(11~12世紀)には、冷泉津とされる部分(現在の冷泉公園付近)に近く、現在の冷泉町地区の14・56・79・97次地点では白磁の大量一括廃棄が検出されている。そのほか国道道路をはさんだ北側の冷泉町南西側から南側の祇園町西北部(砂丘Ⅰ西部)では、中世前期(~13世紀)までの遺構が濃密で、多種多量の貿易陶磁器が出土する。14世紀以降は、遺構が減少する傾向にあり、特に国道道路の南側に当たる部分では、遺構が激減する。これについて鎌倉幕府の鎮西探題がこの付近にあり、これが滅亡(1333年)することにより市街地から外れ、近世の絵図に見られるように島地になったとする説がある(大庭康時1998「中世都市博多の成立」[福岡平野の古環境と遺跡立地])。鎮西探題館は、櫛田神社の近辺に

あったという。鎌倉時代末の「博多日記」によると、櫛田神社に隣接していた鎮西探題に、1333年（大慶2年）菊地武時が攻め込んだ状況等が記されている。117次の南隣の118次地点では、きわめて大量のカワラケ（土師器坏・皿）を廃棄した14世紀代の東西溝が検出され、当時の武家の生活様式におけるカワラケの大量使用と絡めて、鎮西探題の一角をなすとの見解も新聞報道もなされた（1999年8月9日、西日本新聞）。詳しくは報告を待ちたいが、土師器の型式が14世紀前半に絞れるか微妙であり、ここでは鎮西探題に続く室町幕府の九州探題（14世紀中頃以降）に関連する遺構の可能性も考えておきたい。いずれにしても、鎮西探題（および九州探題）の中心遺構は全く不明であり、今後この地区を調査する際に留意すべき事項である。なお117次地点（本調査）では、14世紀初頭頃までの遺構・遺物は見られるが、次は17世紀頃になるまで空白がありそうである。第1面を下げて設定したとしても、各時代に井戸などの深い遺構があるのが普通であり、少なくとも14～16世紀の遺構分布は顕著ではないのだろう。ただし本地点は上記の島地の推定域からは外れているので別の理由が必要である。また、117次の北端から北の103次、54次〔福岡市埋蔵文化財年報〕vol.4)にかけては各時代の何条もの東西溝が掘られている。この部分は砂丘ⅠとⅡの間の谷部にあたり、中世の期間、埋め立て（整地）が進むと考えられるが、後世まで地形の変換線として街割の地境になっていたことを示すのであろう。



第3図 117次調査グリッド網および118次調査との位置関係図 (1/400)

### Ⅲ 調査の記録

#### 1 調査の経過

平成11年6月7日に調査を開始した。本調査では、「調査に至るまで」の項で経緯を記した状況であったため、建設業者が基礎工事予定範囲としての調査区周側に矢板を打ち込むことがなく、地盤が脆い土質（砂質土・砂）のため、調査区壁は安全性を確保するため法面をつけて掘削することになった。したがって調査面での実質調査範囲は、地表面での調査面積に比べかなり小さくなってしまっている。また、排土置場のスペースから反転調査となっているが、調査区壁の法面の確保と土山の安全性の確保から、排土置場は限定され、西半（Ⅱ区）と東半（Ⅰ区）では実際の（下端）での調査面の範囲が連続しないはめになってしまった。可能ならば場内を三転する必要もあったが、今回は工期的に不可能で、今後は同様の敷地面積や土量の条件での調査の事前協議では、この点での

工期（調査期間）等の検討が望まれよう。このような条件で、6月7～11日にかけて、Ⅰ区の重機による表土除去（鋪取り）作業を行った。6月8日には機材・備品を搬入したが、作業員を入れた実質的な現場作業は6月14日からである。

現場作業は、遺構の検出や掘削以外に、すぐたまる排土の移動や土山と調査区壁法面の保護のためのシート掛けや土嚢作りなどが多く、蒸し暑い季節の中厳しいものがあつた。Ⅰ区の調査は6月15日より第1面の遺構検出を開始するが、近現代の擾乱除去に数日を要した。6月後半は雨天が多く、調査速度もやや鈍っていたが、6月末には第1面の掘削をほぼ終了した。6月26日に大雨が、6月29日には博多駅地下街やコンコースが大きく浸水したほどの記録的大雨があり、砂地の現場も水びたしになり、排水や崩落箇所の復旧に時間を費やす場面が7月初めまで多かった。6月28日は雨が降りつつあったが、翌日の大雨を警戒してあわてて全体を清掃し、Ⅰ区第1面の全景を撮影した。しかし7月上旬以降は雨天も少なく順調に調査が進んだ。7月1日には第2面の調査を一部開始し、7月5日より第2面の調査を完全に移行した。7月8日には、遺構検出終了後、遺構一部掘り下げ状態で第2面の全景を撮影した。7月14日には第2面の調査もほぼ終了し、第3面の調査を開始した。同じ日に、隣地の118次調査の現場作業が開始された。

折しも7月前半は博多の街は山笠祭りで最もにぎやかな季節である。7月13日には、すぐ前の国体道路で追い山ならしが走り、15日早朝の追い山を待つばかりである。現場付近もそうとうの人だかりが予想された。追い山の数日前に、原因者の渡邊敏助氏一家から要望があり、敷地内に侵入者が来ないよう対策を万全にし、泊まり込みで番をしてほしい旨の要望があり、聞くに怪我人を敷地内で出されてはたまらないとのこと。祭りの興奮で高いところに登って見学した者が落下して死傷したと言う事故もすぐ近所で起きているといい、また侵入者が現場に落下する恐れもあることからやむなく泊まって番をすることになった。また、前日は侵入者対策のため入り口に臨時の高い柵を設置した。7月15日早朝の追い山の最中は、周辺はものすごい人だかりで（写真1）、実際に柵に登ったり現場に侵入する者が後をたらず、これらを安全誘導した。山笠の間は、一時的に中世都市「博多」になった感がある。幸い無事に山笠も終わり、この日の作業は入り口の柵を撤去して、通常の調査作業、中世都市遺跡の発掘に戻った。

7月13日には第3面への掘削を開始しているが、7月17日には遺構検出、遺構一部掘り下げ状況での全景写真を撮影する。その後、残りの遺構掘削と図化作業を7月下旬までに行い、7月30～31日には調査区西壁土層を記録し、Ⅰ区の調査は終了した。次に8月2～5日にかけて重機によるⅠ区の埋め戻しおよびⅡ区の表土掘削の反転作業を行った。Ⅱ区（西半調査区）の調査は8月10日から行った。Ⅰ区と同様に、現場養生（法面のシート掛け、土嚢作り、階段設置）やベルトコンベアの設置から行っている。調査では、まず近現代の擾乱の掘削から行った。ただし「擾乱」と思われた掘り込みの中には、近世末期の博多人形の破片が多く出土するものがあり、これに注意して作業を進めた。8月12日には人形に詳しい山村



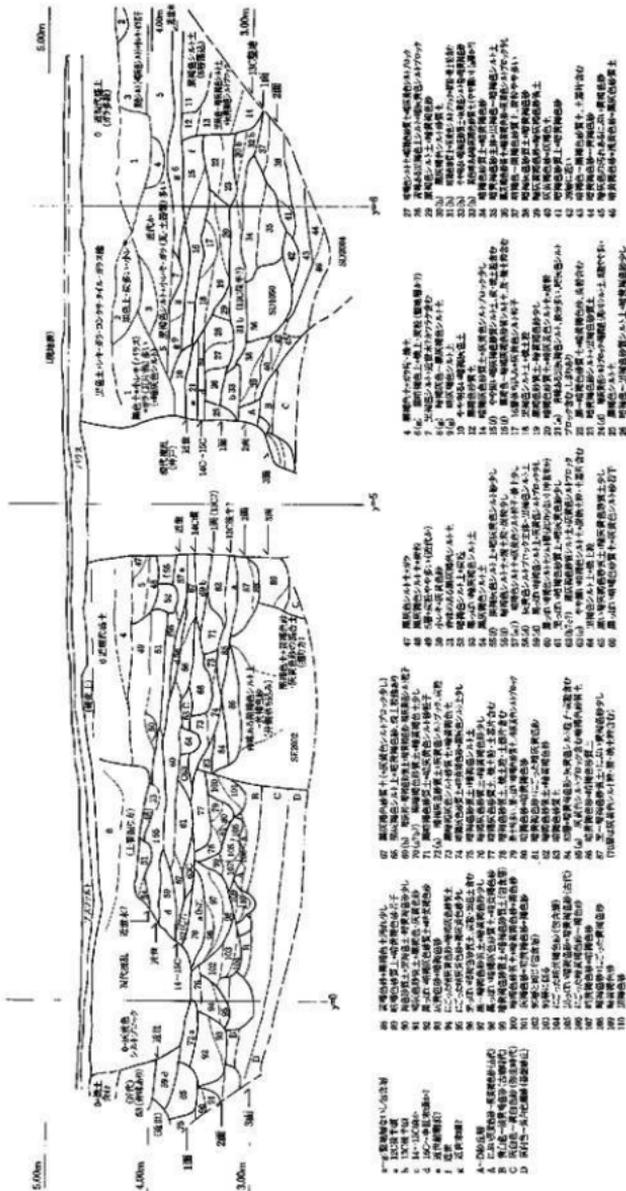
写真1 調査地点前の国体道路を走る追い山

信榮氏が来訪し、近世の博多人形の意義と年代について御教示を頂いた。この人形の多く出土した遺構をSX1201とし、これに重複する近世後期～末期の遺構については調査の対象とした。Ⅱ区第1面の中世遺構は、重複が極めて顕著で、整地層と遺構の区別が分かりづらく、遺構の確認と掘削にはかなり手間を要した。第1面の全景撮影は、多くの遺構の掘削が終了した8月25日に行き、第1面の調査が終了したのは8月末である。9月2日より第2面への掘削を行い、翌日より第2面（砂丘面）での遺構検出を行う。9月4・5日にはかなり激しい雨が降ったが、6月末の大雨の経験から、対策もあり、9月8日の排水や崩落復旧の作業は半日費やしたものの、雨量のわりには比較的早く復旧できた。9月8日には、遺構検出、一部掘り下げ状況での全景撮影を行う。その後、図化作業と重複遺構の掘削や井戸の調査を行うが、砂丘まで下げた面でも遺構の重複が多い部分が多く、作業に時間がかかった。9月23日には実質的な調査作業を終了した。翌日に台風が通過する恐れがあったため、現場のシートや土嚢を1日ばかりで撤収しつつ、台風対策を万全に行った。そのためもあり、台風の影響はあまりなく、現場は無事であった。9月25日には、調査区の重機による埋め戻し作業を開始した。その他現場機材・用品の撤収、整理を行った。9月27日には事務所の片づけと機材撤出を行い、重機による埋め戻しを終了して発掘調査は無事終了した。

諸種の悪条件と、炎天下あるいは大雨の中、現場作業をいただいた作業員のみなさん、および御協力頂いた関係各位の方々には感謝申し上げます。また、全景写真撮影の際に、度々ビルの屋上やバルコニーを使用させて頂いた隣地の株式会社マルシンや神世第1ビルの関係者の方々にもこの場を借りて感謝申し上げます。

## 2 調査地点の地形と層序

前章で述べたように、117次調査地点は博多浜砂丘1の北斜面にあたる。古墳時代砂丘面（第4図一B層）のレベルは前述したところであるが、この下の弥生時代前半まで（2）の形成が考えられる基盤砂丘（D層）のレベルは標高3.1～2.5mを測る。B層の上にはややにぶく汚れた色を早する古代の砂層があるが（A層）、古代末以降の遺構の重複が顕著で面的な確認が困難でその上面が不明確である。調査区においては、A層の上部の自然堆積層（風成砂など）は不明であり（一部は濁った黄褐色～褐色砂層がそれにあたるか）、近現代に至るまで人為的な埋め立て整地が繰り返されたことが観察されるが（a～g層など）、各時期の遺構が多く、より新しい遺構や攪乱に深いものがあり、その面的な広がりを把握することは困難であった。なお調査区西壁の土層観察におけるa～gの整地層（？）の把握は、前後の層よりしまりがあり、単一の土質の層と言うよりは焼土や炭粒や遺物片が混入するなど集めて埋め立てられたような土層で（a～d層については灰黄色シルトブロックを多く混入する層が鍵層となった）、水平に一定の広がりを持つものについて推定した。なおa～g層の年代の推定は、a～c層については包含遺物や遺構との関係から行ったものであるが、すでに掘取りを行ってしまったd～g層については厳密なものではない。また実際の平面的な調査においては遺構が多く、調査区全体で生活面を捉えることができず、調査面の設定は任意のものとなっている。ただし結果的には、調査区西半（Ⅰ区）第1面では南半ではa層中（12世紀後半）で、北半ではb層中（13世紀後半）で遺構を検出した状況であるが、調査区南端では古代後期頃のA層上部の褐色砂層まで面が下がってしまった。また、第2面は古代～古墳時代砂丘上面で、第3面は基盤砂丘層（C層）中で検出を行った結果となる。Ⅱ区については、第1面と第2面ともに遺構の重複がさらに多く、近世遺構の深いものも多く、Ⅰ区以上に面の把握が困難であったので、調査面の設定はⅠ区に合わせた任意のものである。またⅡ区第2面ですでに古墳時代前期住居址を確認できる状況であったので



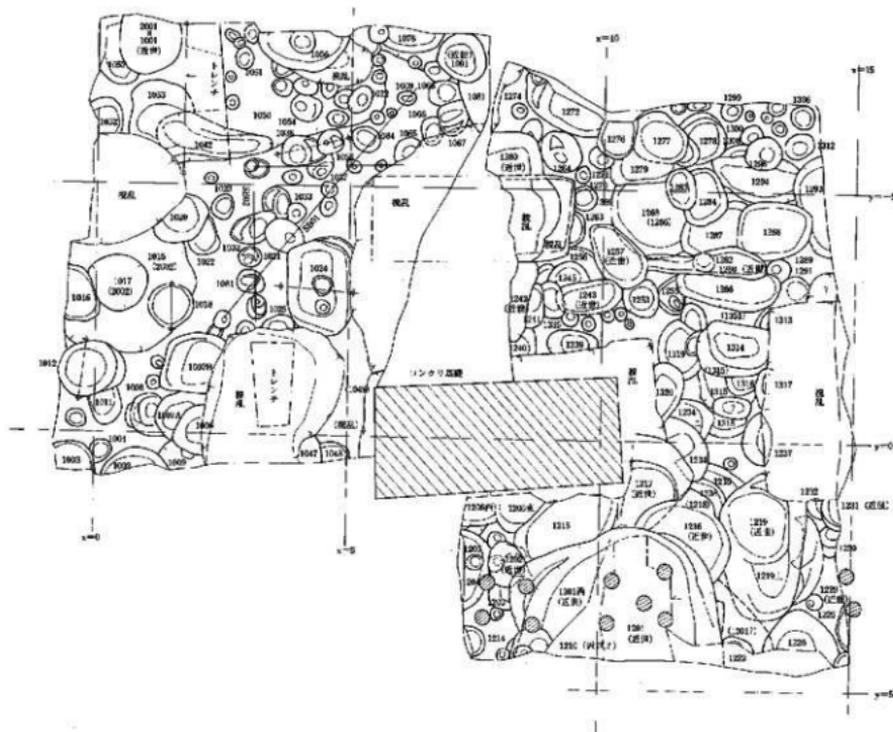
第4区 調査区(Ⅰ区) 西丘上層図(1/50)

(B層下面)、第3面は特に設定せず、遺構の重複の激しい部分のみ部分的に下部の砂丘層中(C層中)でだめ押しの確認を行った。なおⅡ区東壁では時間の制約から詳細な土層観察は行えなかったが、Ⅱ区東壁南端でのC層上面は標高3.2m、B層上面は3.3m、A層上面は3.4mを測り、東端中央では同じく3.1m、3.2m、3.3m、北端では3.0m、3.1m、3.3m前後の標高を測る。また、調査区全体でB層以下の砂丘層中白体からは遺物は確認されていない。

### 3 遺構検出各面の概要

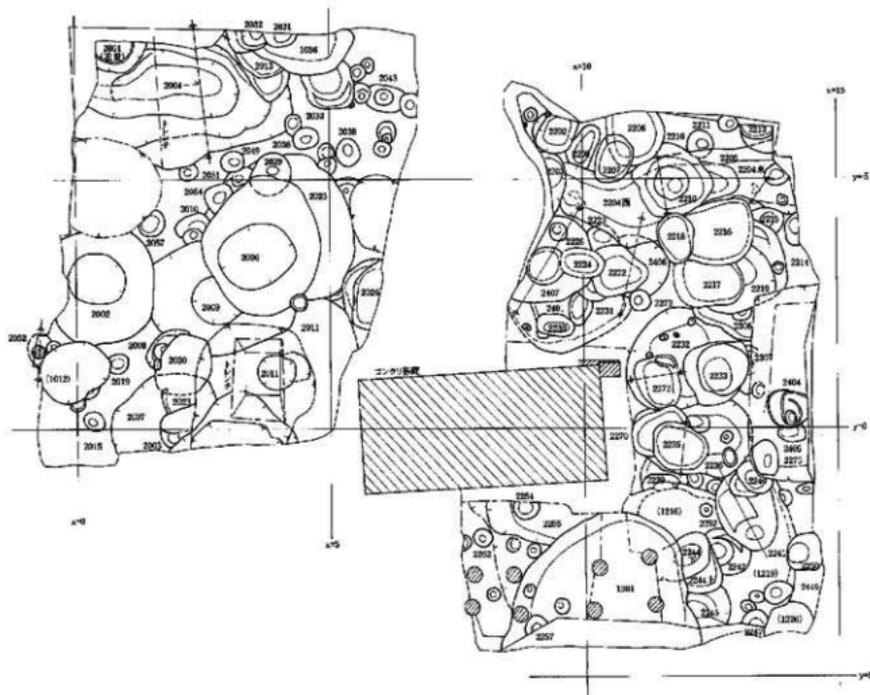
(1) 第1面の概要(第5図)

- 1 調査区中心部
- 2 調査区中心部
- 3 調査区中心部
- 4 調査区中心部
- 5 調査区中心部
- 6 調査区中心部
- 7 調査区中心部
- 8 調査区中心部
- 9 調査区中心部
- 10 調査区中心部
- 11 調査区中心部
- 12 調査区中心部
- 13 調査区中心部
- 14 調査区中心部
- 15 調査区中心部
- 16 調査区中心部
- 17 調査区中心部
- 18 調査区中心部
- 19 調査区中心部
- 20 調査区中心部
- 21 調査区中心部
- 22 調査区中心部
- 23 調査区中心部
- 24 調査区中心部
- 25 調査区中心部
- 26 調査区中心部
- 27 調査区中心部
- 28 調査区中心部
- 29 調査区中心部
- 30 調査区中心部
- 31 調査区中心部
- 32 調査区中心部
- 33 調査区中心部
- 34 調査区中心部
- 35 調査区中心部
- 36 調査区中心部
- 37 調査区中心部
- 38 調査区中心部
- 39 調査区中心部
- 40 調査区中心部
- 41 調査区中心部
- 42 調査区中心部
- 43 調査区中心部
- 44 調査区中心部
- 45 調査区中心部
- 46 調査区中心部
- 47 調査区中心部
- 48 調査区中心部
- 49 調査区中心部
- 50 調査区中心部
- 51 調査区中心部
- 52 調査区中心部
- 53 調査区中心部
- 54 調査区中心部
- 55 調査区中心部
- 56 調査区中心部
- 57 調査区中心部
- 58 調査区中心部
- 59 調査区中心部
- 60 調査区中心部
- 61 調査区中心部
- 62 調査区中心部
- 63 調査区中心部
- 64 調査区中心部
- 65 調査区中心部
- 66 調査区中心部
- 67 調査区中心部
- 68 調査区中心部
- 69 調査区中心部
- 70 調査区中心部
- 71 調査区中心部
- 72 調査区中心部
- 73 調査区中心部
- 74 調査区中心部
- 75 調査区中心部
- 76 調査区中心部
- 77 調査区中心部
- 78 調査区中心部
- 79 調査区中心部
- 80 調査区中心部
- 81 調査区中心部
- 82 調査区中心部
- 83 調査区中心部
- 84 調査区中心部
- 85 調査区中心部
- 86 調査区中心部
- 87 調査区中心部
- 88 調査区中心部
- 89 調査区中心部
- 90 調査区中心部
- 91 調査区中心部
- 92 調査区中心部
- 93 調査区中心部
- 94 調査区中心部
- 95 調査区中心部
- 96 調査区中心部
- 97 調査区中心部
- 98 調査区中心部
- 99 調査区中心部
- 100 調査区中心部



第5図 第1面全体図 (1/100)

地表下-2.2m(南側)から-3.0m(北側)で設定した遺構検出面である。I区では標高3.6~2.9mで、II区では標高3.6~3.3mで遺構を検出している。層序についてはすでに述べたとおりであるが、特にII区では遺構がきわめて濃密で、明確な遺構面が見出せず、結果的にレベル上は古代後期の褐色砂層上面で遺構を検出したようである。また調査区実質面積はI区は56㎡、II区は64㎡を測る。検出した遺構は、中世前期(12~14世紀)の井戸、上坑、柱穴、溝を主体とするが、第1面では近世の遺構や近代以降の擾乱も多く検出された。特に、II区南側では、近世末期の素焼人形片を多く出土したSX1201等の近世後期の廃棄土坑が多く重複し、中世の遺構が結果的に少ない状況である。また全体的に、特にII区で遺構が濃密で、遺構というよりは中世初期(12世紀代)の整地層の一部を掘削してしまった部分がある可能性があり、遺構の重複関係が不明確なところもある。さらに、第2面で明確に検出することになった井戸上部の覆土の凹みを遺構と誤って掘削したのもあった。遺構どうしの切り合いも、覆土が類似するものが多く、掘削後に関係が異なる結果となったものもある。検出遺構のうち柱穴については、I区において列をなすものを整理時に見出し、建物址?としたが、他については調査区が狭いためと他の上坑や井戸との重複で不明である。II区では中小の土坑の重複が著しく、12世紀後半~14世紀前半と言う比較的短い時間内での遺構の集積があるが、土坑の性格は定かではない。第1面における出土遺物は、12世紀後半から13世紀前半の龍泉窯系青



第6図 第2面全体図 (1/100)

磁・白磁などの輸入陶磁器、土師器環・皿が多いが、一部の遺構や検出時上面では口禿げの白磁片を含み、14世紀初め頃までの遺構の連続的な存在が確認できる。なお井戸址については上部のみの掘削にとどめ、以下の掘削は第2面、第3面において行っている。

## (2) 第2面の概要 (第6図)

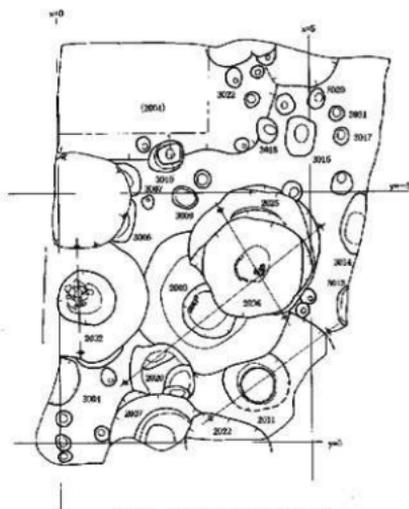
第1面からおおむね40~20cm下げたレベルで任意に設定した検出面である。層序はすでに述べたところであるが、Ⅰ区では古代の遺構が検出できる砂丘面、Ⅱ区では古墳時代の遺構が検出できる砂丘面になる。第2面全体としては、12世紀前後の井戸、土坑、溝、柱穴が濃密に検出されたが、Ⅰ区側では井戸址が多く、Ⅱ区側では中小の土坑を多く検出した。一部、第1面で不明確であった13世紀代の遺構もあり、また古代前期(奈良時代)の遺構も一部検出している。Ⅱ区では古墳時代前期の竪穴住居(SC2231)も検出した。調査区北側では、Ⅰ区でSD2004を、Ⅱ区でSD2204を検出したが、位置・方向や出土遺物から一時共存する時期があったと考えられる。ただし、SD2004は深くまた13世紀頃まで維持されているが(第1面SD1050)、SD2204は短い存続期間で、12世紀後半のうちに多数の土坑により切られる状況となる。出土遺物は、12~13世紀の同安窯系青磁・龍泉窯系青磁・白磁などの輸入陶磁器、土師器環・皿、瓦器碗が多く出土する。また古墳時代後期末(ⅢB期

以降)～奈良時代の須恵器・土師器が包含層褐色砂層中や中世前期遺構に混入して一部出上するが、その時期の明確な遺構は不明である。Ⅰ区SX2052の完形土師器變出土遺構のみ確実な奈良時代の遺構である。また後述するように、11世紀代についてはヘラ切りの土師器・皿の出七が少なく、11世紀後半でもその確実な遺構は不明であることから、本調査地点での街場としての遺構の形成は12世紀代に入ってからと考えられる。なお第2面の実質調査面積は、Ⅰ区で50㎡、Ⅱ区は60㎡を測る。

### (3) 第3面の概要

第3面はⅠ区においてのみ設定した(第7図)。Ⅰ区第2面から30～20cm下げた面で設定している。層序についてはすでに述べた。第3面では、第2面で検出できなかった遺構の確認の意味で設定した調査面の意味合いが強い。この面で新たに検出遺構の多くは古代ないし古墳時代の遺構と考えられるが、柱穴からは遺物が少なく時期限定が難しい。ただし第2面から第3面に下げる途中で古墳時代前期の土器が若干出土している。検出遺構の多くは柱穴だが、図示していないが上面確認で柱痕跡状の暗褐色砂のしみを掘方中央に有するものがみられた(3009, 3010, 3016, 3017, 3018, 3020, 3022)。ただし上面からの井戸掘方の占める面積が大きく、建物として復元できない。第3面では上面の調査で掘り残した井戸址の完掘・精査を行っている。なおⅡ区では、第3面としては設定していないが、第2面までの遺構の重複が大きい部分や近世の廃棄土坑が深く及ぶN・M・Lグリッドにおいて(グリッドは第3図参照)、第3面相当の黄白色砂層中でだめ押しの遺構確認を行っている(Ⅱ区第2面下とする)。遺物が少なく不明だが、古代ないし古墳時代の可能性のある柱穴を若干確認している。なおⅠ区第3面の実質調査面積は40㎡を測る。

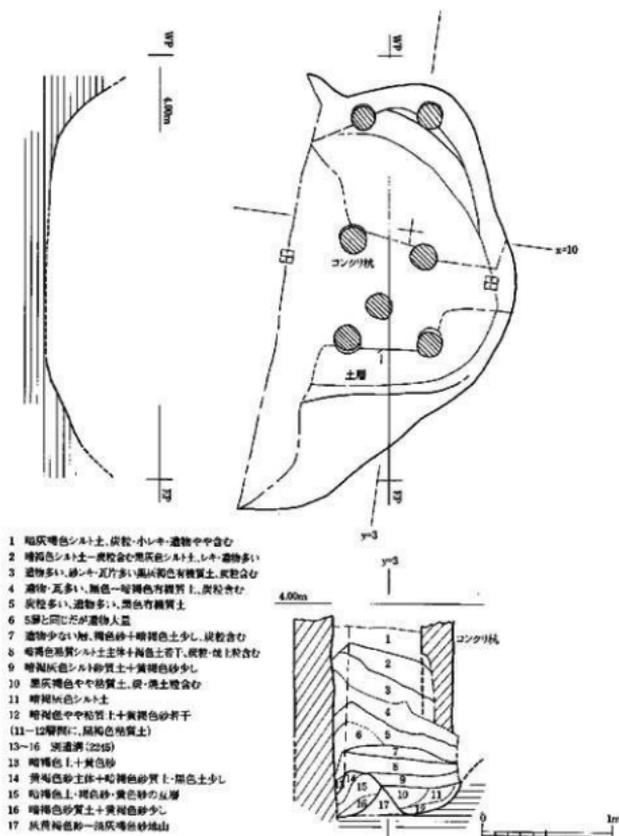
なお調査全体の概要をここで述べておく。検出遺構の数は(近世を含む)、井戸10、土坑113、溝4、柱穴225、竪穴住居1である。出土遺物は小パンケース80箱前後の量となっている。なおこの遺物量は、近世遺物については現場にて選択して持ち帰った結果である。出土遺物の種類は、弥生土器、古墳時代前期の古式土師器、古墳時代後期から古代前期の須恵器・土師器、11～14世紀(中世前半期)の輸入陶磁器・土師器・瓦器・瓦質土器・国産陶器・瓦・石製品・鉄製品・ガラス(製品・素材)・ガラス増埴・銅製品・銅銭・動物遺存体(獣骨)など、近世後期の陶磁器・瓦質土器・土師器(土師質土器)・素焼人形・瓦などがある。以下、検出・調査した遺構について記述するが、紙幅などの都合で主要な遺構についてのみの報告となり、「調査の概要」となっている。その他の遺構の詳細については、資料・記録類が埋蔵文化財センターに収蔵される予定であるので利用願いたい。



第7図 Ⅰ区第3面全体図(1/100)

#### 4 近世の遺構

第1面において、I・II区ともに少なくとも近世遺構を確認した。福岡市では、近世遺構については選択して調査の対象としていることもあり（たとえば福岡城については全て調査の対象）、中世遺跡の厚い博多遺跡群では諸般の制約から調査の対象にはできない場合が多く（一部の調査では近世前半期までは調査対象としている場合もある）、その場合近世以降の「遺構」は実質的に近現代の「掘削」と同じ扱いとなっている。

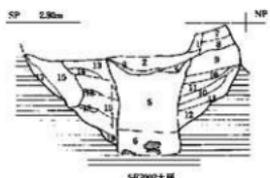


第8図 SX1201実測図 (1/60)・土層図 (1/40)

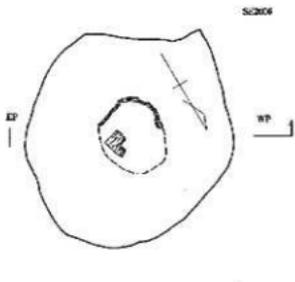
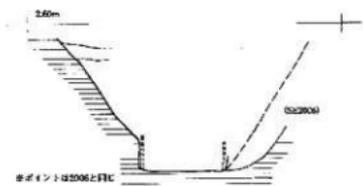
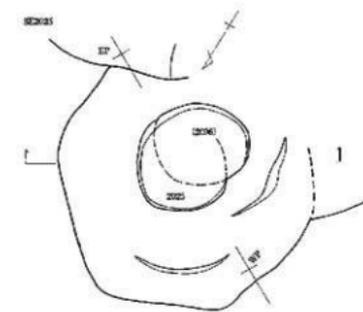
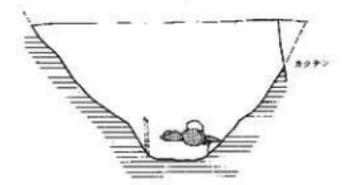
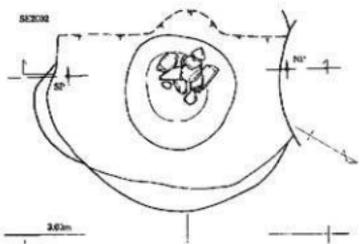
いる。本調査も、「はじめに」で述べたような諸般の制約や以上のような一般的な調査状況から、当初は近世については調査の対象とせず中世までをその対象としていた。ところが今回調査の地点は、近世（江戸時代）に人形師や素焼師（隣地の118次調査地点では近世の素焼の一括廃棄土坑や窯体と思われるレンガ片を検出）がいたことが文献やその子孫の方の伝いで判明しており、それを示す遺物、特に近世末期の素焼人形の破片が多く出土したことから、手工業史上また博多の沿革上重要と考え、近世も一部調査対象とした。近世遺構は、I区ではSX1201（素焼人形片出土遺構）、SE1001（瓦組井戸）、SK1091、II区ではSK1216・1217・1219・1229・1242・1243・1257・1280、SD1260がある。ここでは、素焼人形片を多く出土したSX1201についてのみ詳しく報告する。なお近世遺構の出土遺物については、一部を除いて今回の報告では割愛させて頂いた。御寛恕を請う。

SX1201 (第8図)

Ⅱ区Lグリッドで検出した土坑。検出上面径5m前後の不整形形の半分の調査。確認できた深さは1m強だが、近世末期の生活面からの深さは2m強と考えられる。上層から、主に南側から北側への堆積の流れが確認でき、上層～中層にかけては全体的に炭や焼土粒を多く含み、陶磁器や土師質土器の破片などの遺物がかんり含まれ、その中に現在の博多人形につながる素焼人形の破片が多く混入していた。遺構の



- 1-2層 遺物多し
- 1 黒褐色シルト砂質土に焼成色の砂子
- 2 黒褐色シルト砂質土に炭屑の砂子
- 3 黄褐色シルト質砂質土
- 4 黄褐色砂や多い土質砂質土
- 5 土に黄褐色の砂質土、黄褐色の砂土の互層、焼成土、焼成物の多し
- 6 土に黄褐色の砂質土の上に黄褐色の砂質土
- 7 黄褐色シルト土に炭屑の砂子、黄褐色砂子
- 8 土に黄褐色の砂質土に炭屑の砂子
- 9 土に黄褐色の砂質土に炭屑の砂子
- 10 土に黄褐色の砂質土に炭屑の砂子



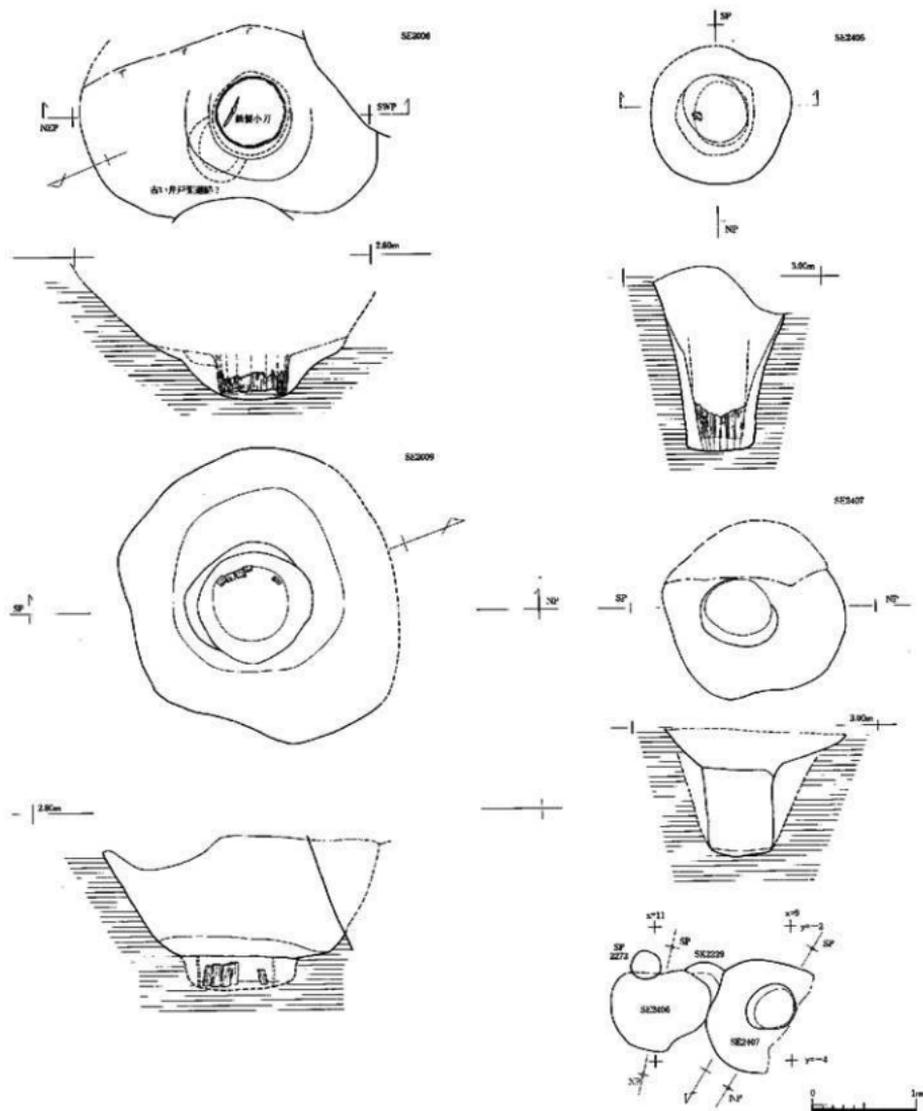
- 11 黄褐色の土に黄褐色の砂質土
- 12 土に黄褐色の砂質土
- 13 やや土に黄褐色の砂質土に炭屑の砂子
- 14 土に黄褐色の砂質土に炭屑の砂子
- 15 黄褐色砂質土(シルト)に炭屑、遺物多し
- 16 土に黄褐色の砂質土に炭屑の砂子
- 17 黄褐色砂質土に炭屑の砂子
- 18 黄褐色砂質土
- 19 土に黄褐色の砂質土に炭屑の砂子

第9図 井戸址実測図(1)(1/50)

性格としては、典型的なゴミ穴(廃棄土坑)であり、遺物の時期や傾向は層位による顕著な変化は認められない。素焼人形をはじめとする出土遺物については、V章において別に詳述しているの参照されたい。なお、遺構の時期は出土遺物から18世紀中頃(幕末)と考えられる。

5 古代末から中世の遺構

以下、古代末(11世紀～)から中世の主要遺構について報告するが、その出土遺物については後章でまとめて報告している。また時期の記述は、大宰府条坊跡における山本信夫氏らの土師器・輸入陶磁器の年代観に依拠している。



第10区 井戸実測図 (2) (1/50)

(1) 井戸 (SE)

SE2002(第9図上)

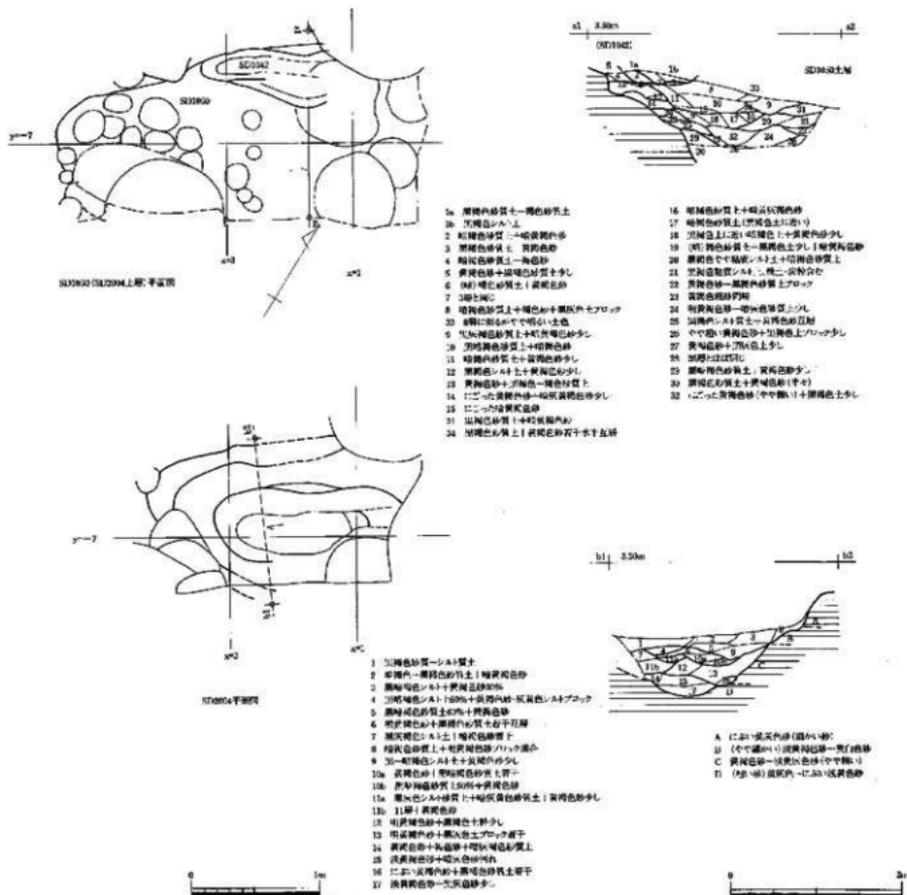
I区Cグリッドで検出。第1面で井戸側落ち込みを1017遺構、掘方を1015遺構として検出している。第2面での径2.6mの略円形の平面プラン、第1面からの深さ2.5m。なお最終的な掘削と図化は第3面

に行っている。井戸側は残っていないが、土層状況から円形に組まれる桶組であった可能性が高い。井戸側部の最下層に礫の投げ込みがあり、礫は被熱したのか表面が赤い石ばかりであったことが特筆される。層位と出土遺物から、13世紀初め頃の掘削で13世紀後半頃までには埋没したものと考えられる。

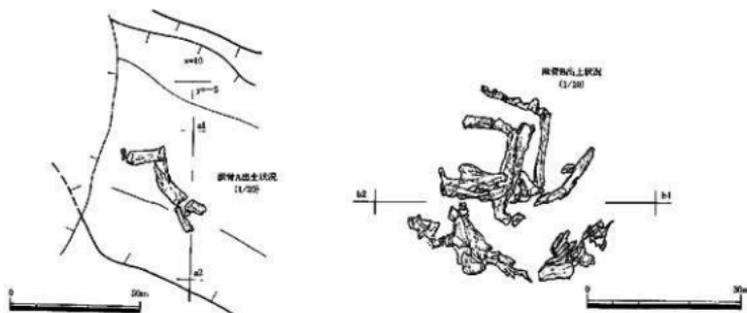
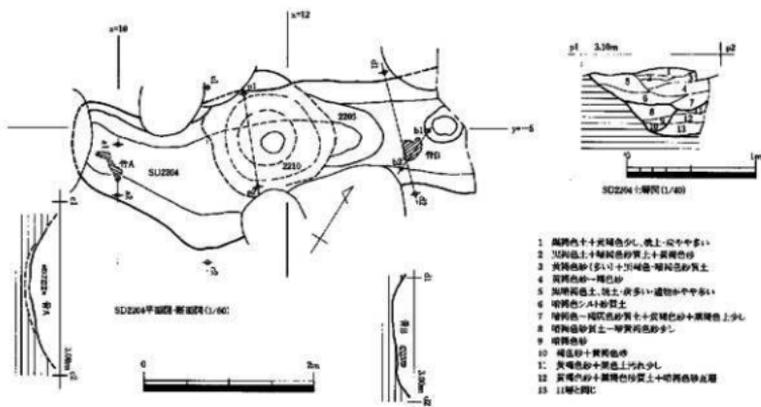
### SE2006 (第9図右下)

I区Dグリッド第2面で検出。第2面で2.5×2.7mの不整形円形、深さ2.1mを測る。最下層に桶組の井戸側が残存。I区第1面中央の整地層(この面での遺構のSK1024は12世紀末頃)では検出できていないことから、埋没は12世紀後半までの時期であり、出土遺物から12世紀中頃の掘削であろう。

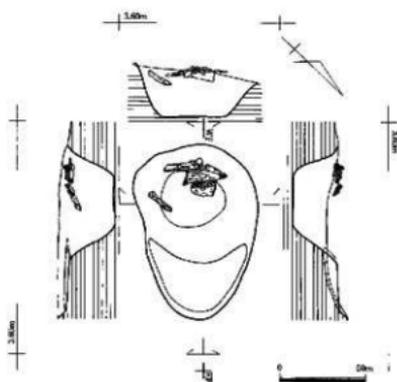
### SE2025 (第9図左下)



第11図 SD1050～2004実測図(1/80)・土層図(1/60)



第12図 SD2204実測図 (1/60)・獣骨出土状況図 (右1/20, 左1/10)



第13図 SK1038土層図 (1/30)

SE2006と大きく重複する井戸。井戸側位置も大きく重複し、近い時期の作り替えであろう。第2面で一部検出。平面規模はSE2006よりわずかに大きい、深さは同じ。井戸側は残らないが、最下層の状況から円形の桶組であった可能性が高い。12世紀前半～中頃か。

#### SE2011 (第10図左上)

I区Bグリッド第2面で検出。南側掘方が調査区外となる。なお当初は、井戸側落ち込みを2021遺構としていた。径2.9mの偏円形、第2面からは深さ2.2m。井戸側下層の円形桶組が残存する。井戸内最下層に鉄製小刀の投棄が見られた。掘方下層に別の井戸とも思えるプランがあったが、性格は不明である。時期は、出土遺物から12世紀前半～中頃である。

SE2007 (第6図参照)

Ⅱ区Aグリッド第2面で検出。第3面の調査時に井戸側落ち込みを確認するが、半分に調査区外となるため、安全上全掘を断念した。径2mの円形プランで時期は12世紀前半頃。

SE2009 (第10図左下)

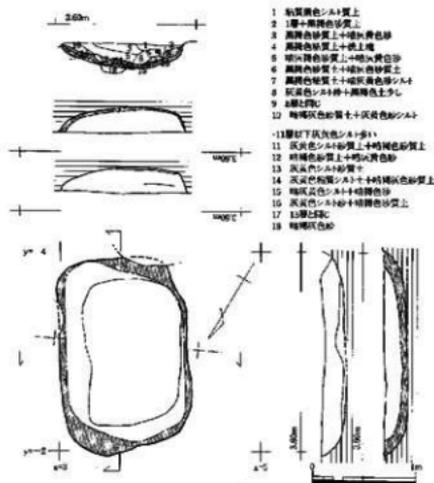
Ⅰ区中央第2面で検出。2.5×3.0mの偏円形で、深さは第2面から2.1m。井戸側は最下層に桶組の板材がわずかに残存している。井側落ち込み中～下層に礫の落ち込みが見られた。切り合いからSE2006 (12世紀後半) 以前であるが、出土遺物相は近い時期であり、12世紀中頃が考えられる。

SE2406 (第10図右上)

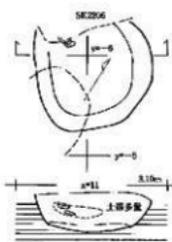
Ⅱ区Nグリッド西半第2面で検出。上部の遺構の重複が多く初めプランが不明確であった(2221遺構としていた)。上部のSK2222としたものは、実際は井戸落ち込み埋土の一部の可能性もある。SE2407との重複関係は微妙。径1.4mの略円形、深さは2.0mを測る。下層に桶組井戸側の痕跡が残る。時期は12世紀前半であろう。

SE2407 (第10図右下)

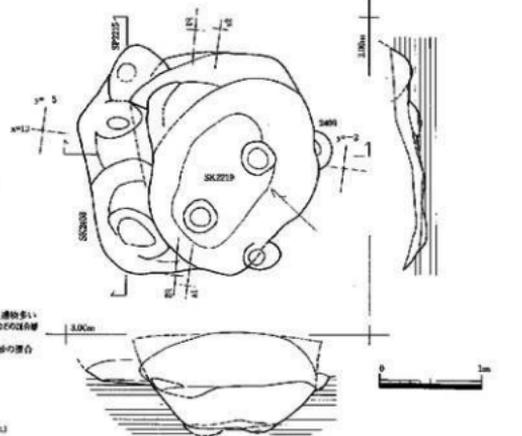
Ⅱ区Pグリッド第2面で検出。上部の遺構の重複が多くはじめプランが不明確で、掘方上層を2227遺構、井戸側落ち込み上層を



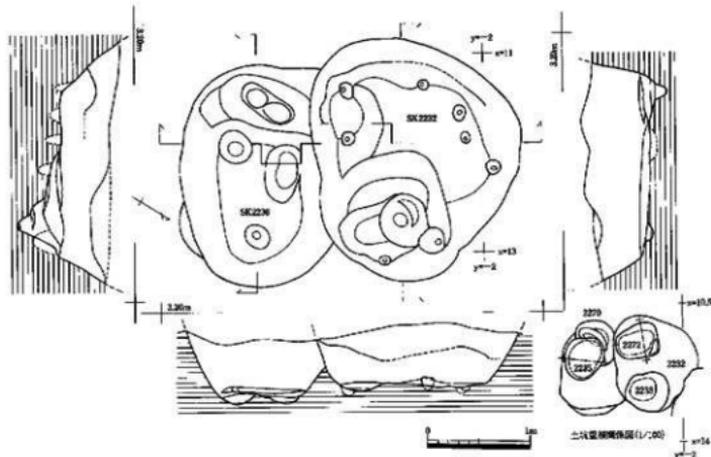
第14図 SK1024実測図 (1/50)



- 11-12 下層
- 1 黒灰色粘土層
- 2 黒灰色粘土層
- 3-5 黒灰色粘土層
- 6 黒灰色粘土層
- 7-9 黒灰色粘土層
- 10-12 黒灰色粘土層
- 13-15 黒灰色粘土層
- 16-17 黒灰色粘土層
- 18 黒灰色粘土層
- 19 黒灰色粘土層

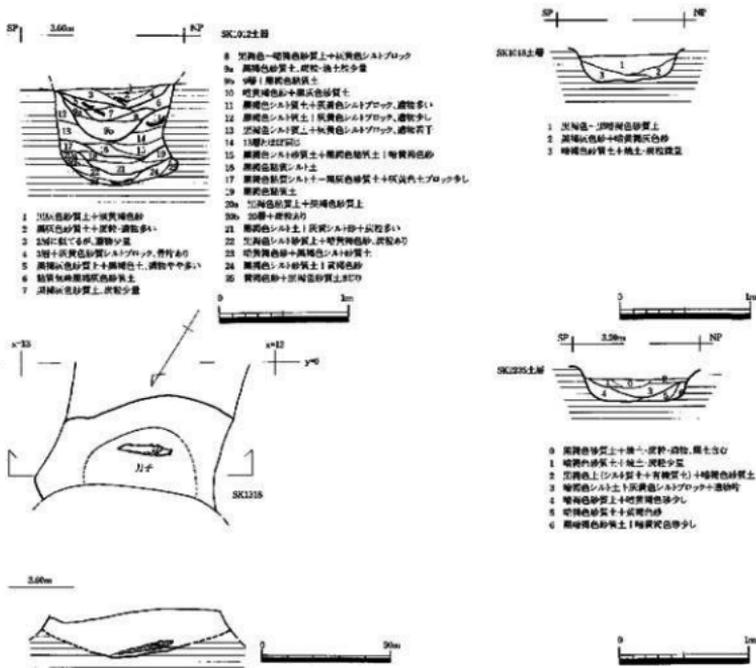


第15図 SK2206・SK2219実測図 (1/50)



第16図 SK2232・2236実測図 (1/50)

2225遺構としていた。一部調査区外に及ぶ。径1.8m、深さ1.4mを測る。井戸側は残存しない。時期は、ヘラ切り上師器が多く12世紀初頭であろう。



## (2) 溝状遺構 (SD)

### SD2004 (第11図)

I区Fグリッドで検出。上層はSD1050として第1面で検出。第1面では埋没後に重複する遺構が多く、溝全体の掘削は第2面調査で行う。延長6m確認し、西側は調査区外へ続き、東側は立ち上がって終わる。溝の方位はN-60°-E、第1面からの深さは1.6m、断面V字形に近い逆台形、幅は北側の端が不明だが3.5m程度か。出土遺物と層位から、掘削は12世紀中頃、埋没は13世紀中頃か。1052、1053、1057遺構としたものは埋没途中の上坑か。埋没後、南側上端に沿ってSD1042が掘削される。幅は数10cm~1m、深さ20cm程度で時期は13世紀後半と考えられる。

### SD2204 (第12図)

II区Fグリッド第2面で検出。延長6.2m確認し、東側は調査区外に続き、西側は別の遺構に切られるが立ち上がって途切れる

ようである。溝は一部屈曲するが、方位はN-52°-E、溝の幅は1.1~1.9m、深さは30~50cmである。SX2205は溝中央の下部の凹みで、SK2210との関係が不明確だったが、SD2204が新しいようである。溝の時期は出土遺物と層位的関係から12世紀前半から中頃である(13世紀前半の青磁が1点あるが、上部の第1面遺構の掘り残しと考える)。溝東側でイヌの骨ほぼ一体系を出し埋葬の可能性があるほか、西側ではウシの骨を検出した(獣骨については後章参照)。

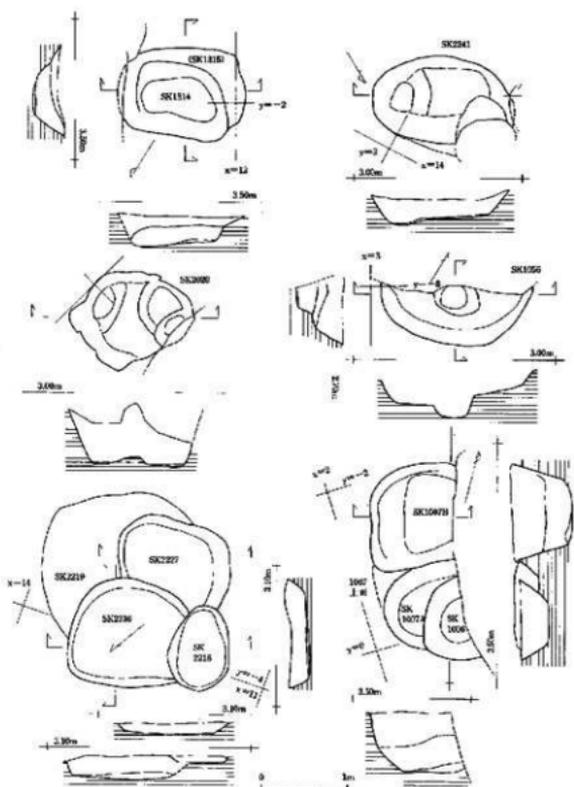
## (3) 土坑 (SK)

### SK1038 (第13図)

I区Gグリッド第1面で検出。105×70cmの楕円形(落込み部分は60×70cm)、深さ30cm。上層にウシの骨を一括出土。覆土は暗褐色砂。出土遺物では時期は不詳だが、層位的に13世紀代の可能性が高い。

### SK1024 (第14図)

I区第1面Dグリッドで検出。125×195cmの隅円長方形で深さ30cm。床から壁に厚さ10cm前後の灰黄色シルト土が貼られている。このシルト土は、遺構検出時に周囲の検出面の整地層とは暖味な境界を示し、検出上面は遺構を掘り込んだ生活面であったと判断した。遺物と層位から12世紀後半の遺



第18図 その他上坑実測図 (1/60)

構である。

**SK2206 (第15図左上)**

Ⅱ区第2面Oグリッドで検出。径120cmの略円形、深さ45cm。黒褐色土の覆土。遺物がやや多量に出土。12世紀前半の遺構。

**SK2219 (第15図)**

Ⅱ区第2面Nグリッドで検出。径200×220cm不整形、深さ1.0m。上層は黒褐色土、下層は黄褐色砂。遺物がやや多量に出土。東西ベルトの裏表で全く異なる土層が確認でき、複数の土坑の重複の可能性もある。12世紀前半から中頃の遺構。SX2403を切る。SX2403は状況複数ピットの重複か。

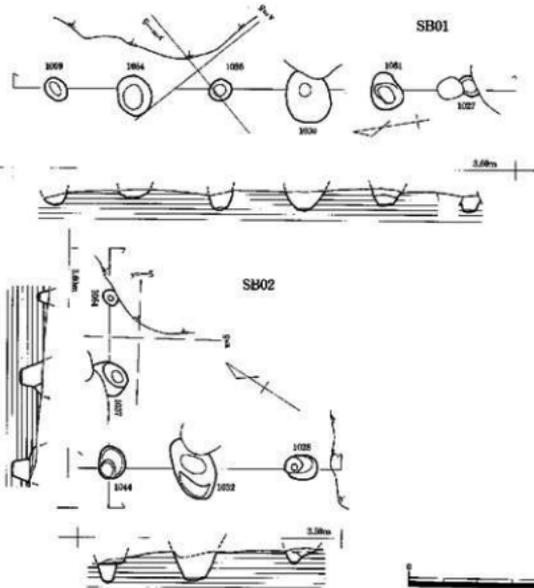
**SK2232 (第16図)**

Ⅱ区第2面Mグリッドで検出。径210×250cmの不整形、深さ60～100cm。上層は黒褐色土+暗灰黄色砂、下層は汚れた黄褐色砂。底面南西側に凹みがあり、上部のSK2233が掘り足らなかったもの可能性があるが判別できなかった。12世紀前半～中頃の遺構。上部のSK2233は、径80cmの略円形、黒褐色土+ぶい黄褐色砂の覆土。龍泉窯系青磁を含む13世紀初頭～前半の遺構。

**SK2236 (第16図)**

Ⅱ区第2面Oグリッドで検出。SK2232に切られる。径225×170cmの略円形、深さ70～80cm。西側に凹み。黒暗褐色土の覆土(下層は暗灰黄褐色砂)。12世紀初頭～前半の遺構。

**SK1012 (第17図左上、第5図)**



第19図 I区1面SB01・02実測図 (1/75)

I区第1面Aグリッドで検出。径1.1mの略円形、深さ80cm。黒褐色土の覆土。遺物が多量に出土。12世紀前半～中頃の遺構。

**SK1018 (第17図右上、第5図)**

I区第1面Cグリッドで検出。径90cmの略円形、深さ25cm。SE2002の上部にあり、13世紀代の遺構。

**SK2235 (第17図右下)**

Ⅱ区第2面Mグリッドで検出。115×90cmの楕円形、深さ30cm。12世紀中頃の遺構。

**SK1318 (第17図左下)**

Ⅱ区第1面Mグリッドで検出。推定60×90cmの楕円形、深さ20cm。重複の前後関係から12世紀後半～末頃の遺構。

**SK1314 (第18図左上)**

Ⅱ区第1面M-Nグリッドで検出。南側のテラス状の広がり（SK1315）も含めると南北1.8m×東西1.5m前後の不整隅円長方形をなすが（第5図）、同一遺構か不明。深くなる範囲は南北1.0m×東西1.5mの範囲。黒褐色シルト質土ないし有機質土、炭粒多く、遺物が土師器を主体に多量に出土した。13世紀中頃～後半の遺構。

**SK2020**（第18図左中）

I区第2面Aグリッドで検出。140×120cmの不整楕円形、第2面から深さ100cm。底面の東西端に凹みがあり、二つの遺構の重複の疑いがある。覆土は黒褐色土で炭粒多く、遺物もやや多量に含む。12世紀中頃～後半の遺構。

**SK2241**（第18図右左）

Ⅱ区第2面Lグリッドで検出。165×110cmの楕円形、深さ35cm。黒褐色土＋暗灰黄褐色砂（土層は図版6-37を参照）。遺物は少ない。12世紀初頭の遺構。

**SK1056**（第17図右中）

I区第1面Gグリッドで検出。推定径180cmの略円形、深さ60cm。底面中央ビット状。SD1050（2004）より新しく、13世紀後半以降。最上層に明の染付片出土し、埋没の下限は15世紀か。

**SK1007A**（第18図右下）

I区第1面Aグリッドで検出。上面検出でSK1007Bと同一にしてしまった。SK1006と1007Bに切られる。径110cm前後の略円形、深さ30cm。暗褐色土＋褐色砂の覆土。遺物はやや少ないが12世紀後半の遺構か。

**SK1007B**（第18図右下）

SK1007Aを切るが覆土はほぼ同じ。東側を掘削し切られるが、一辺120cmの隅円方形、深さ75cm。遺物は1007Aより多い。遺物から13世紀中頃～後半だが、この遺構の下部の第2面で検出したSK2020（前述）は同一遺構の層位の違いの疑いがある。

**SK1006**（第18図右下）

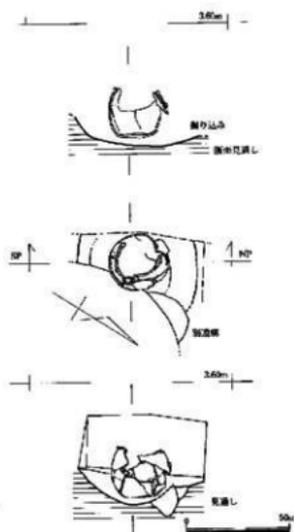
径100cm前後、深さ40cmの略円形土坑。覆土は暗褐色砂質土に灰黄色シルトブロックを含む。遺物はやや多い。12世紀後半から13世紀初頭頃の遺構。

**SK2218**（第18図左下）

Ⅱ区第2面Nグリッドで検出。100×70cmの楕円形、深さ15cm。暗褐色土に炭・焼土粒が混入。時期は12世紀中頃～後半。

**SK2216**（第18図左下）

SK2218に切られ、SK2217を切る。またSD2204を一部切る。145×130cmの不整形、深さ40cm。覆土は暗褐色土、下層は暗黄褐色砂が混合。12世紀中頃の遺構。Ⅱ区第1面Mグリッドで検出。推定60×90cmの楕円形、深さ20cm。12世紀中頃（～後半）の遺構。なお上層で取り上げた遺物の中に口先が白磁碗が混入しているが、層位と型式が矛盾するので、上部の第1面遺構（1266、1287、1288遺構など）の掘り残しに伴う可能性が高いものとする。



第20図 SK2020出土状況図

#### SK2217 (第18図左下)

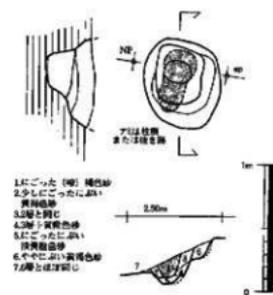
SK2216に切れられ、SK2219を切る。140×110cmの不整円形、深さ25cm。覆土は暗灰褐色シルト質土で炭・焼土粒を多く含む。12世紀前半の遺構。

#### (4) 建物 (SB)

本調査では、掘立柱建物を構成するであろう多数の柱穴を検出したが、遺構が濃密すぎるために建物の復元に至らなかった。以下報告するSB01とSB02は、整理作業段階で建物の可能性を考えたものであり、断定はできない。しかし中世都市博多の街場を復元するには情報の提示が不可欠と考え、敢えて報告する。

#### SB01 (第19図上)

I区第1面で検出。桁行5間分、6.2m長を検出。梁間方向は不明。方位はN-10°-E。層位的に12世紀後半以降でおそ



第211図 SP3010実測図 (1/40)

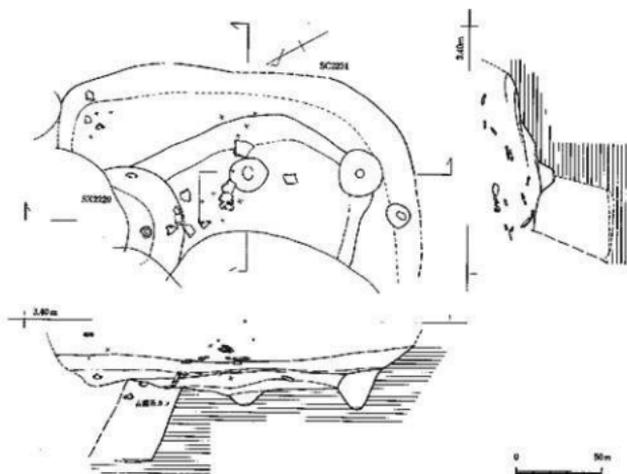
く13世紀代か。

#### SB02 (第19図下)

I区第1面で検出。2×2間以上、3.0×2.6m以上を検出。方位はN-33°-E。層位的に12世紀後半以前にはならないが、SD2004等と方位が近似し、SB01より古い可能性がある。

## 6 古代以前の遺構

本調査では、I区の第2面と第3面、II区の第2面において古代前期(奈良時代)、古墳時代前期の遺構を検出している。遺物としては弥生時代中～後期、古墳時代後期、飛鳥時代(7世紀)のものもあるが、遺構に伴わず、それらの時期の確実な遺構は不明である(「遺構検出各面の概要」参照)。以下、ほぼ確実にこれらの時期の遺構と考えられるものについて報告する。



第222図 SC2231実測図 (1/30)

#### SX2052 (第20図)

I区第2面Aグリッド調査区西際で検出したほぼ完形の土師器甕。断面観察では、径60cmの浅い土坑状の遺構中に下半分を埋めた状態で土師器甕が正置されていた。上部の周囲土は濁った暗褐色砂であったので、レベル的におそらくプラン不明の竪穴住居中に置かれた

ものではなかったかと推定する。8世紀中頃～後半の遺構。

#### SP3010 (第21図)

I区第3面C-Fグリッドで検出。SD2004に切られる。60×70cmの不整長方形。掘方は薄い褐色砂だが、中央は暗褐色砂で柱を抜いたものと見られる。出土遺物はないが、検出層位から古墳時代前期の可能性が高いと考える。掘立柱建物を構成する柱穴であろう。

#### SC2231 (第22図)

II区Pグリッド第2面で検出した古墳時代前期の竪穴住居。南北2.2m×東西1.0m以上。深さ30cm。中央が段状にやや低くなる。覆土は暗褐色砂ないし濁った褐色砂。床面にいくつかのピットがあり、床面中央やや北側にSK2229が検出された。SK2229は、径70cm、床面から45cm前後の土坑。土器片が床面から浮いて出土し、主に住居上層からSK2229の落ち込みに向かうような出土状況である。土器片の分布レベルから当時の生活面は標高3.3～3.4m前後か。SK2229上層より吉備系土器の甕の口縁部片が出土（裏表紙写真）。なおSK2229のように、砂丘上の古墳前期住居床面下にやや深い土坑が伴う例としては、箱崎遺跡8次SC36などがある（福岡市埋蔵文化財調査報告書第315集）。遺構の時期は、出土土器の様式からIIB期（久住猛雄1999、P.4前掲）と考えられ、覆土中にはII C期の土器もある。

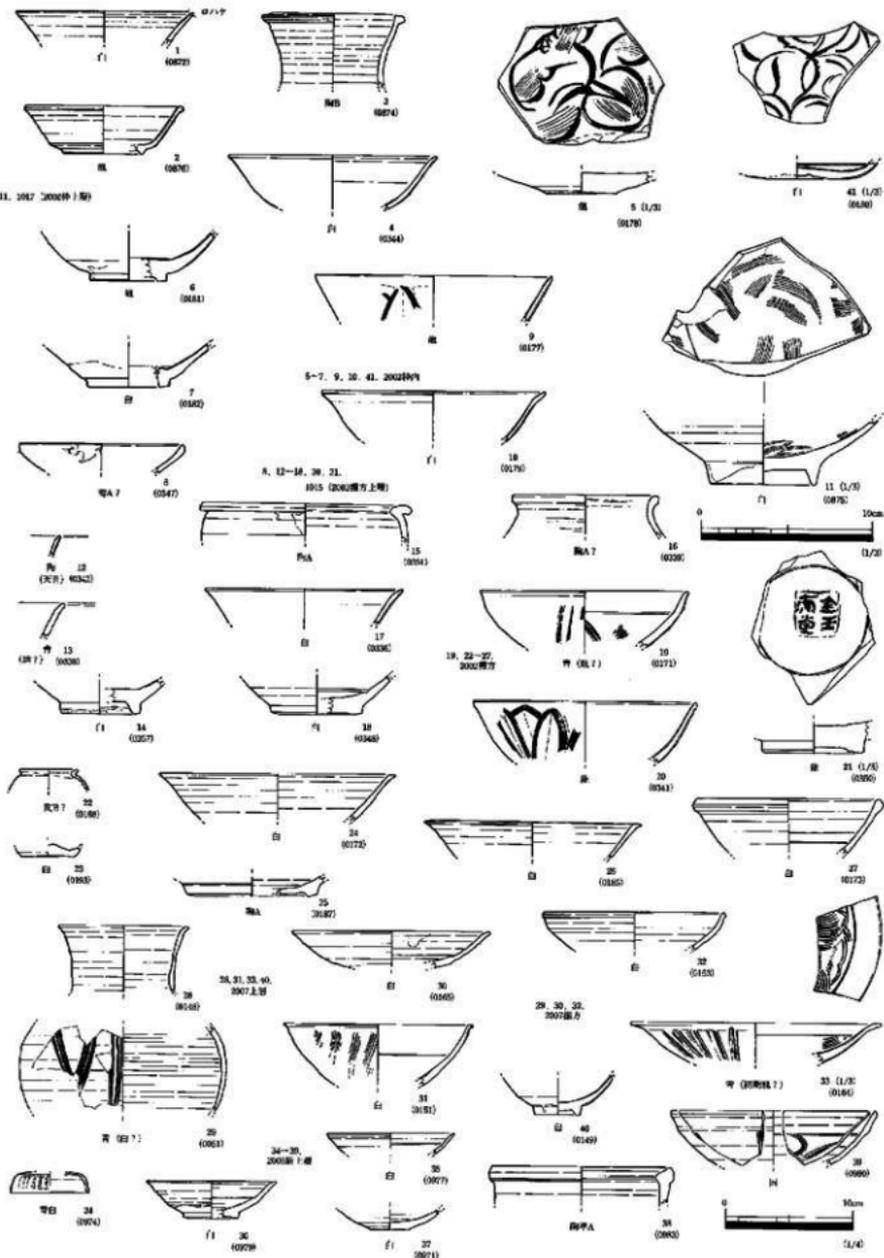
## 7 出上遺物

### (1) 中世の土器・陶磁器

以下、中世（古代末11世紀を含む）の土器・陶磁器（一部近世を含む）について報告するが、輸入陶磁器の分類と時期比定については、最新の大宰府史跡分類を用い（山本信夫ほか「大宰府条坊跡」XV—陶磁器分類編一、大宰府市教育委員会2000）、適宜博多分類を参照する（森本朝子1984「博多出上貿易陶磁器分類表」『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書』第105集、大宰府分類と博多分類の対照は佐藤一郎1996「輸入陶磁器の分類」『博多遺跡群出土土器資料集成』博多研究会、を参照）。また土師器や瓦器などの型式分類と時期比定については、大宰府史跡出土土器による山本信夫氏らの研究成果を一応用いるが（山本信夫1990「統計上の土器—歴史時代土師器の編年研究によせて—」『乙姫重隆先生古稀記念論文集』、山本信夫・山村信榮1997「中世食器の地域性10—九州・南西諸島」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集）、特に土師器・皿類については博多遺跡群においてはやや違った特徴や推移をする部分があるので（輸入陶磁器編年での同一時期における法量や形態の微妙な違いや糸切り底土師器の普及時期の相違）、それらについては適宜指摘したい。なお挿図には各個体の図の下や脇に分類名称や調整について略して記したほか、挿図ごとの個体番号の他に（ ）内に4桁の数字を付したのには遺物収蔵（予定）番号の下4桁である。土師器・皿・甕では、「糸」は糸切り底、「へら」はへら切り底、「板」は板目正痕跡を示し、「白」は白磁、「青」は青磁、「龍」は龍泉窯系青磁、「同」は同安窯系青磁、「越」は越州窯系青磁、「青白」は青白磁、「陶」は陶器類を示す。

### 陶磁器 (第23～32図)

図示したのは主要遺構出土の遺物を中心とし、また出土遺物の一部である。遺構の時期を示すと考えられるもの、遺存率の高いもの、特殊なものを抽出して図示している。後二者については遺構の時期と関係ない以前の遺物が含まれている場合があることに注意されたい。また紙幅の都合上、図示した個々の遺物について記述できないので、遺物の図の下に種類の略称を記した。なお陶器類

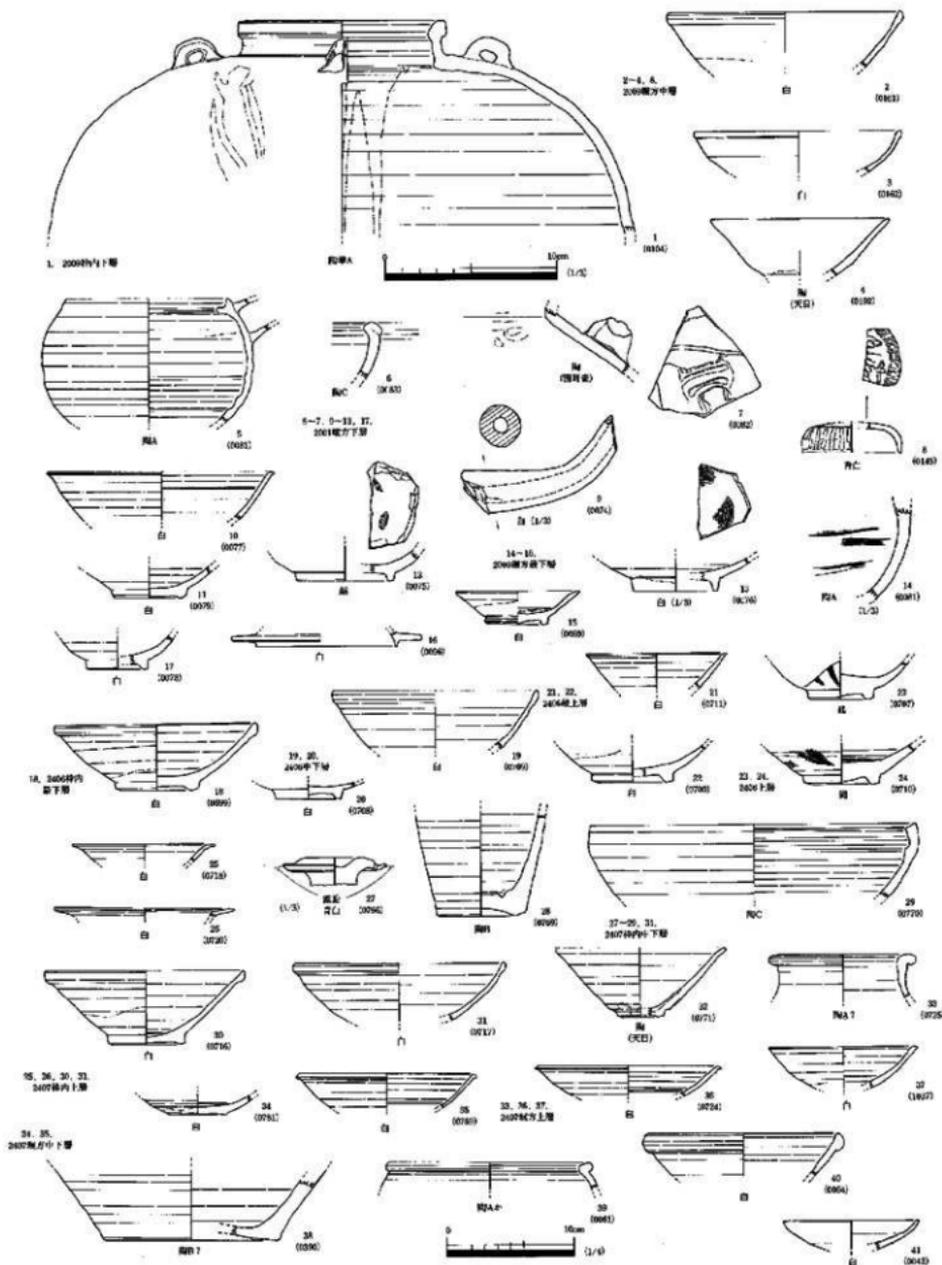


第23図 井戸址出陶磁器 (1) (1/4, 1/3) ※特に記さないものは1/4



についてはA・準A・B・C群の大別(博多分類)を図の下に記した。個々の遺物についての詳しい記述をする余裕がなかった。御寛恕されたい。

第23～25図は井戸址出土の陶磁器である。SE2002では(第23図1～27,41)、龍泉窯系青磁を中心としたセットが出土し、井戸枠落込み上層には白磁Ⅸ類(第23図1)、龍泉系青磁坏Ⅲ-1類(同図2)を含み廃絶が13世紀中頃以降(大宰府編年XⅤ・XⅥ期)である。第23図41は白磁ⅢⅤ-1類。その他では白磁碗Ⅴ類が目立つ(同図4, 10, 11, 24, 28)。24, 26は白磁碗Ⅴ類の可能性もある。14は白磁碗Ⅴ類の底部。27は白磁碗Ⅳ類。掘り方出土陶磁器の下限は龍泉窯系青磁Ⅱ-b類(第23図9, 20)や龍泉系碗Ⅱ類の「金玉満堂」印刻を含み、XⅥ期(13世紀前葉)となる。13の青磁は越州窯か。19は同安窯系Ⅰ-1b類とするか。陶器類では、第23図3はB群の水注で暗オリブ灰色釉。8はA群に類似する赤灰色の胎土で表面黄灰白色の化粧土。16はA群に近い胎土でオリブ黄色とオリブ褐色の釉。15は薄緑色釉。25はベージュ色胎土、淡赤灰色釉。12は砂っぽい暗灰色胎土で口唇部赤茶色・体部黒色釉の天目碗。22は灰色胎土、灰白色化粧土。SE2007では(第23図28～33, 40)、白磁を主としたセットで、碗はⅡ-1類(32)Ⅴ-3b類(Ⅴ-4?か、31)、ⅢはⅢ類(36)、Ⅴ-1類(35)などがみられる(30は碗Ⅵ類かⅢか不明)。XⅢ～XⅣ期であろう。33は「初期龍泉・同安窯系」とされる碗0類であろうか。28, 29は同一個体で青磁の壺(写真2-3)。淡いオリブ緑色で白磁とすべきか。39は同安窯系Ⅰ-1b類。38は準A群陶器で、灰色胎上に赤紫淡褐色釉。SE2006では白磁を主体とし、一部同安窯系青磁や少数の青白磁が共存するセットをなす(第23図34～39、第24図1～12)。白磁はⅢⅥ-2a類(4, 5)、ⅢⅢ-1類(7, 8)がある。3は同安窯系ⅢⅠ-b類。10は同安窯系Ⅰ-1b類。龍泉窯系青磁は最上層でわずかに出土する(第24図2、ⅢⅠ-1b類)。XⅣ～XⅤ期であろう。9の陶器B群だが青磁に近い釉色(暗緑灰色)。12は陶器A群-Ⅳ類の緑釉壺(博多分類)。浅いベージュ色胎土に明緑色釉。6も緑釉陶器で灰色～灰褐色胎土に薄緑色釉。胎土はむしろB群に近い。1は陶器C群の大甕で暗灰色胎土に暗褐色釉。SE2025は出土遺物が全体に少ないが、白磁Ⅳ類があり(第24図13)、XⅡ～XⅢ期であろう。SE2009は(第24図14～33、第25図1～17)、白磁を主体とし、青白磁が少し伴う(第24図15, 32、第25図8)、XⅡ～XⅢ期のものが主体。ただし、白磁碗Ⅴ-b類(第24図29)、龍泉窯系Ⅰ-2類(同図27)、白磁碗Ⅴ-4類(第24図23, 25、第25図10)があり、井戸の廃絶はXⅣ期(12世紀後半)となる。井戸の掘削はXⅣ期に近いXⅢ期の時期幅内か。白磁は、碗ではⅣ類(第24図20, 26、第25図2, 11、第24図28)は形態から壺などの可能性あり)、Ⅱ類(第24図14, 21, 24, 31、第25図3)、Ⅴ類(第24図16、第25図13)があり、第25図17は碗Ⅱ類に似た小碗。白磁ⅢはⅡ-2類(第24図19)、Ⅵ-1類(第24図22)、Ⅵ-2類?(第24図30、やや大きい)、Ⅲ-1類(第25図15)、また蓋(第25図16)や水注の注口(同図9)などがある。陶器では、第24図17は陶器B群に似た胎土のⅢでオリブ黄緑色釉、第25図1は博多分類陶器準A群の茶釉四耳大壺で暗茶褐色釉。同図5は把手の付く鉢形の陶器で紫灰色の胎上、外面薄赤茶色、内面茶褐色。大宰府分類(2000)の表3では類品が中世Ⅲ期(XⅠ～XⅢ期)におかれ、博多分類の陶器A群-Ⅲ一行平。第25図6は博多分類陶器C群胎上に似る鉢で、内面暗褐色釉、外面暗赤褐色釉、赤灰色胎土。同図14はA群-Ⅰの黄釉鉄絵盤。同図7はA群-Ⅴの黄褐色(オリブ黄色～褐色)釉四耳壺。同図4は赤灰色の縞磁胎上で赤茶釉の上に黒色釉がのる天目碗。SE2406は白磁主体だが(第25図18～24)、上層2222遺構出土に龍泉窯系Ⅱ-a類(第25図23)を含み、廃絶は13世紀初頃(XⅥ期)の可能性(別遺構か覆土上層か不詳)。他はXⅢ期(12世紀前半)で良い。白磁碗Ⅳ-1類(18)、Ⅳ-2類(22)、Ⅱ類(19, 22)、同安窯系



第25图 井戸址出陶磁器 (3) (1/4, 1/3)



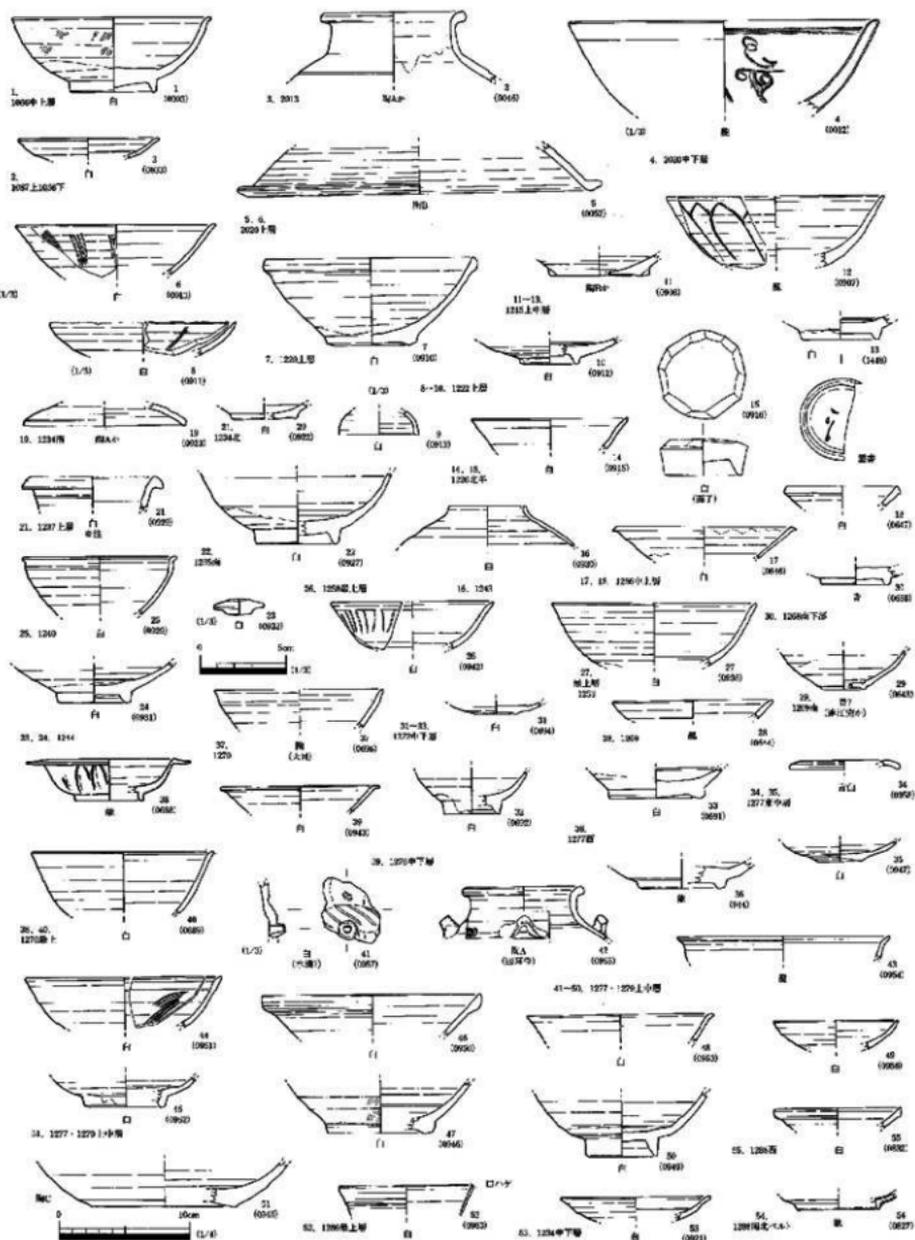


I-1b類 (24) がある。第25図21は碗V-4類に似るが小碗。SE2407は白磁主体のXⅡ～XⅢ期のセット (第25図25～37)。白磁碗はⅣ類 (30)、Ⅱ類 (31)、V-3類またはⅥ-2類 (35)、Ⅵ-2類 (36)、白磁皿はⅣ-1類、Ⅴ類 (34)、小碗 (37) がある。同図32は細かな砂っぽい暗灰色胎土で茶灰褐色釉の天目碗。33は陶器A群に似た胎土で淡灰色胎土、淡黄オリブ色と黄白色の釉。SE2011は白磁主体 (第25図38～41)。白磁は碗Ⅳ類 (40)、皿Ⅵ-1a類 (41) がある。同図38は陶器B群に似た胎土で外面淡赤灰褐色釉、内面褐色とオリブ白色の釉。39は明灰色胎土でオリブ色釉、口縁上部淡赤灰褐色の鉢で陶器A群?。

第26図1～19はSD1050、SD2004出土。第1面検出で同一溝上層のSD1050出土は13～14世紀の遺物を含む (第26図1～8, 17～19)。第2面以下のSD2004は白磁主体で (第26図9～15)、当初の溝は12世紀前半の掘削か。同図1, 2は博多分類陶器A群-I類の黄釉鉄絵盤。3は白磁碗Ⅱ類あるいはXⅠ類か。4は龍泉窯系碗Ⅲ類の、5は龍泉窯系碗Ⅳ類の可能性がある。6は白磁碗Ⅰ-1類であろう。7は白磁碗Ⅱ-1類。同図17は明の染付だが16世紀代のものでしょうか。19は白磁皿Ⅵ-1b類。18は白磁の色釉だが青白磁と同形態。9は白磁碗Ⅱ-1類、10はⅤ類の、11はⅡ類の、14はⅥ類の白磁碗の底部。14よりSD2004上層は12世紀末頃 (XⅤ期) か。12は白磁皿Ⅴ類またはⅥ類、13は白磁皿Ⅵ-2類。16 (SK1056) は砂っぽい黒灰色胎土に赤茶色の上の黒色釉の天目碗。第26図20～25はSD2204, SK2205の出土。多くは白磁碗で、20はⅤ類、21, 24, 25はⅤ-1a類、22はⅤ-3類。以上はXⅡ期B～XⅢ期。23は龍泉窯系碗Ⅱ-b類でXⅥ期となり時期が離れ、層位的にもSD2204は12世紀代と考えられるので、混入か覆土中の別遺構を見落としたものか。

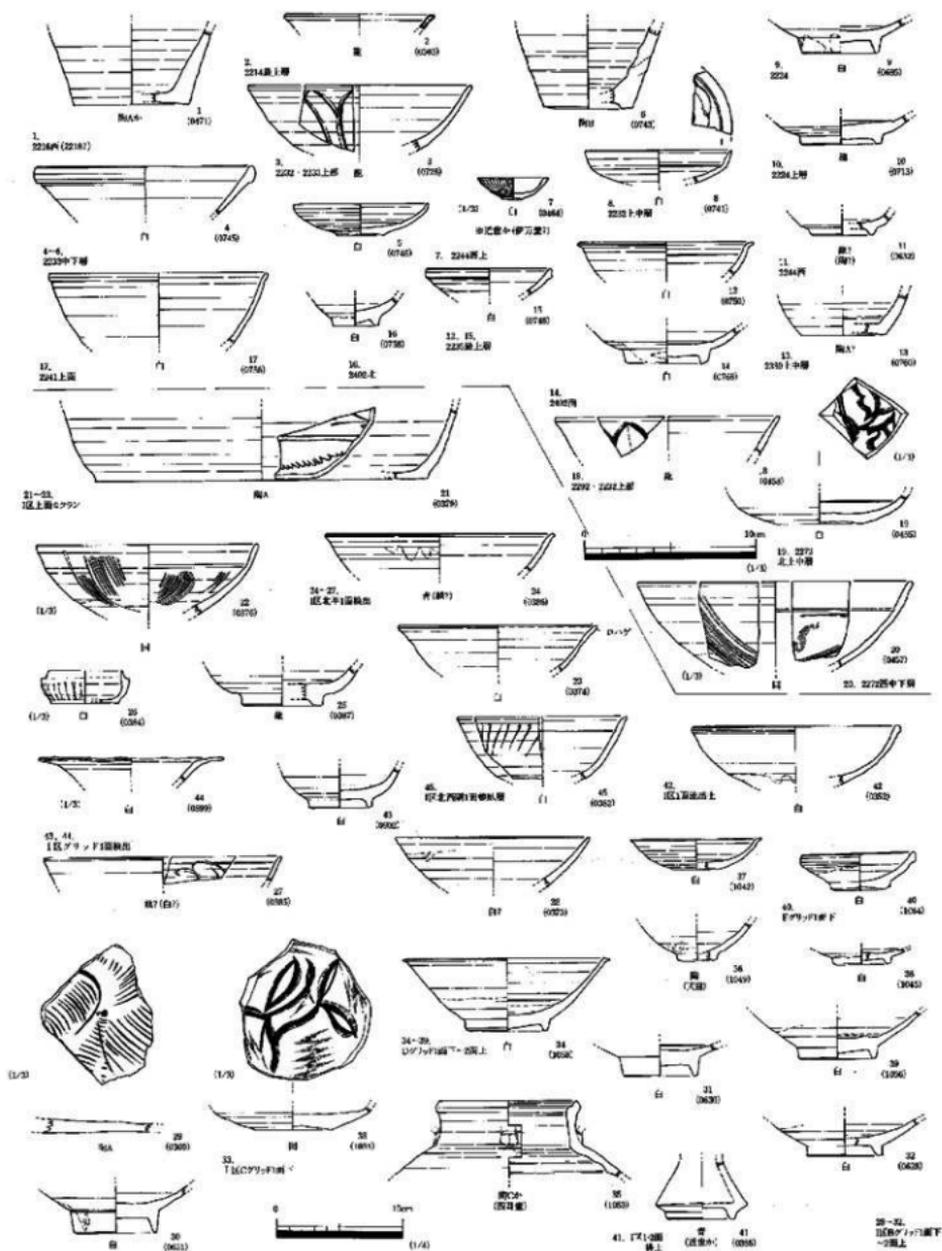
第26図26～31, 36, 37はSK1024の出土。29は龍泉窯系碗Ⅰ-1類かⅢ類の口縁部。きれいな薄緑色でⅢ類とすれば遺構の時期はXⅥ期の13世紀前半～中頃。ただし他は12世紀後半～13世紀初頭のXⅣ～XⅤ期。龍泉窯系青磁では、31が碗Ⅰ-2類、30が皿Ⅰ-2類、28がⅠ-1b類。白磁は、碗Ⅴ-2類に近い小碗 (36)、碗Ⅵ類 (37) があり、同安窯系では皿Ⅰ-1a類がある (26)。第26図35, 38, 33はSK1006・1007上部の出土。35は白磁碗Ⅴ-4c類、38は白磁碗Ⅴ-2b類、33は陶器B群に似たベージュ明茶色胎土で表面は白色と淡茶色釉の壺の底部。SK1007Aの第26図32は白磁皿Ⅵ-2類。SK1007Bの同図34は陶器A群か準A群に似た赤紫灰色胎土で暗褐色釉の盞 (皿の可能性もある)。同図39, 40は白磁碗Ⅱ-1類。

第27図はⅠ区第1面土坑の出土資料。1は白磁碗でⅤ-2ないしⅤ-4類の輪花を有するタイプだが体部の丸みが強い。2～4はSK1007Bの出土。2は白磁碗Ⅴ-1類。3は龍泉窯系青磁の壺で青色釉。4は白磁皿Ⅱ類ないしⅤ類。5～7はSK1003の出土。いずれも白磁碗で、5はⅤ-2類、6はⅤ-4類、7はⅡ-3類。XⅢ～XⅣ期。8～18はSK1012の出土。13が陶器C群の鉢である他は白磁。9は白磁の壺。8は白磁皿Ⅳ-1b類、12は同皿Ⅴ類ないしⅥ-1b類。以下は白磁碗で、10はⅤ-4類、11, 14, 15はⅣ類、18はⅤ類の底部、16はⅥ-1b類、17も16と同じか。XⅢ～XⅣ期。19～22はSK1018の出土。21は博多分類陶器A群-Ⅲの鉢。19は白磁の壺。20は同安窯系碗Ⅲ-1bc類。22は白磁碗Ⅳ類。23は龍泉窯系碗Ⅰ-2類。24は同安窯系皿Ⅰ-1b類。25は龍泉窯系碗Ⅰ-2類。26は白磁皿Ⅵ類か。27は陶器Aないし準A群の壺底部で赤色胎土に暗褐色釉。28は同安窯系皿Ⅰ-1b類。29は白磁碗Ⅴ-3 (or4) 類。30は器種不明だが白磁の小型脚台。31は龍泉窯系皿Ⅰ-1c類。32は越州窯系青磁碗の碗Ⅲ類か。33は白磁碗で内底の釉を輪状に掻き取るⅥ類の底部。34は白磁碗Ⅱ類またはXⅠ類。35は同安窯系碗Ⅰ-1b類。36は白磁碗Ⅴ-2b類。37は龍泉窯系碗Ⅱ-a類。38は紺青色の紋様をもつ明代の染付 (青花) であろう。15～16世紀。39, 41は白磁碗Ⅳ類。40は白磁碗Ⅴ類



第28图 I区1-2面土坑·II区1面土坑出土陶器 (1/4, 1/3)





第30图 Ⅱ区2面土坑, I区包含層ほか出土陶磁器 (1/4, 1/3)

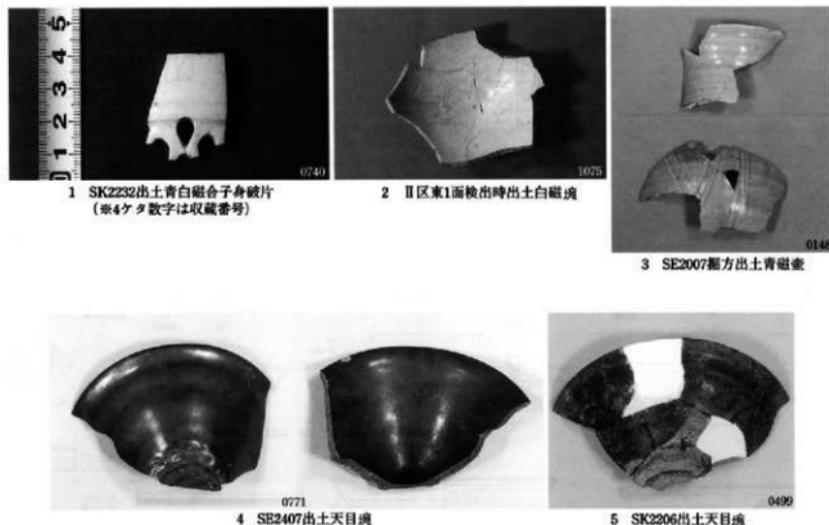
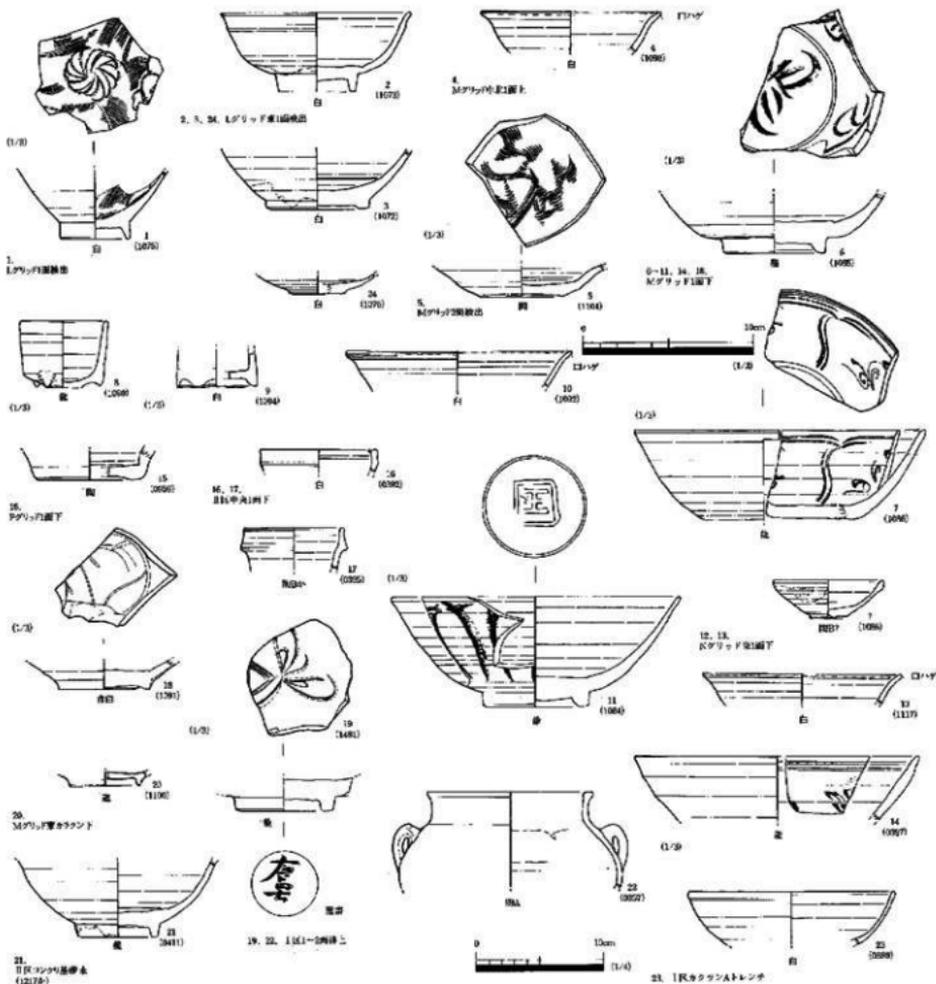


写真2 博多117次 出土陶磁器写真

か。

第28図1～6はⅠ区土坑の出土。1は白磁碗Ⅴ-2類。2は白磁皿Ⅵ-1a類。3は博多分類陶器A群Ⅰ-Vの(四耳?)壺。灰色胎土に緑褐色釉。4～6はSK2020の出土。4は龍泉窯系碗Ⅰ-2a類。5は陶器B群で明茶ベージュ色胎土、外面明黄茶色釉。6は白磁碗Ⅴ-1b類。

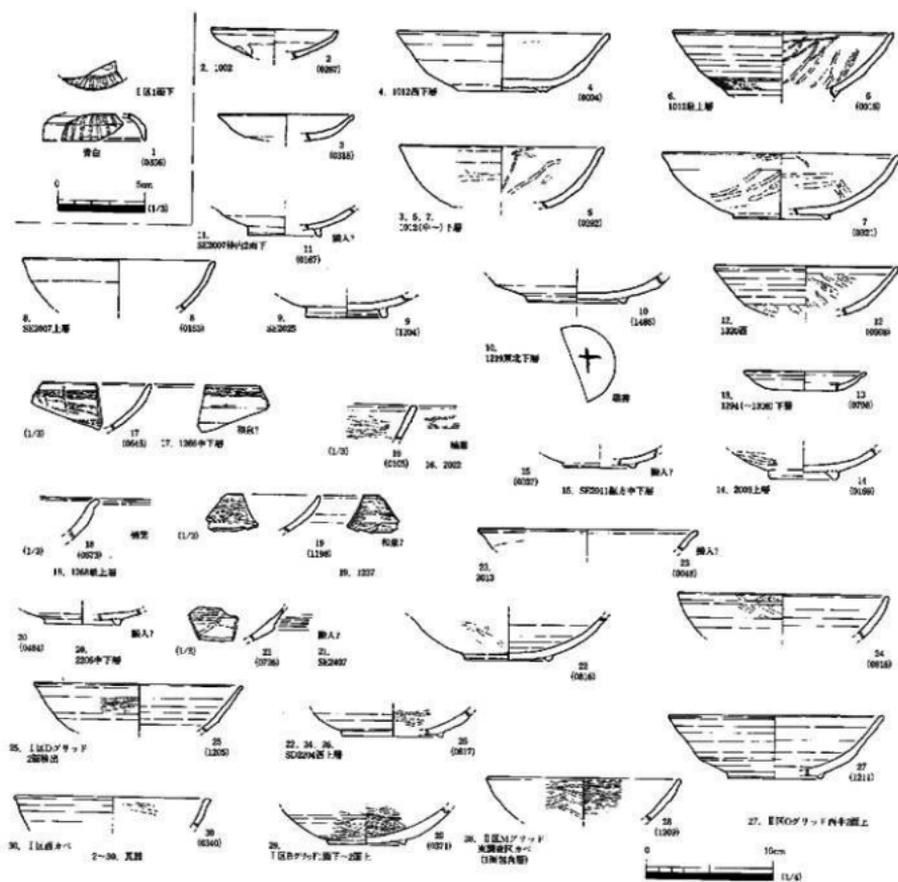
第28図7～54はⅡ区第1面土坑の出土。7は白磁Ⅳ-1類。8～10はSK2222。8は白磁皿Ⅵ-2類。9は白磁の合子の蓋か。10は白磁碗Ⅱ-4類ないし皿Ⅵ類。11～13はSK1215。12は龍泉窯系碗Ⅱ-a類。11は陶器B群に似た緻密な黄茶白(ベージュ)色胎土で底部外面は露胎だが黒く焼ける。13は白磁碗Ⅱ類か。14は白磁碗Ⅵ類に似た小碗。15は白磁Ⅴ類底部による面子(瓦玉)。16は白磁の短頸壺。非常に薄く、内面白化粧土あり。やや珍しいか。SK1243出土。17は白磁碗Ⅵ類ないしⅥ類。18は白磁皿Ⅱ-1類。19は陶器A群に似た胎土で赤色胎土、表面赤紫褐色の皿または蓋。20は白磁皿Ⅱ-1a類か。21は白磁の水注ないし壺。22は白磁碗Ⅴ類。23は白磁だが蓋のつまみか?下面が露胎。24は白磁碗Ⅱ類ないしⅥ類。25は白磁碗ⅩⅡ類。広東系か。26は白磁碗Ⅴ-2b類。27は白磁碗Ⅴ-1類。28は龍泉窯系皿Ⅲ類。29は白磁の釉色(オリーブ白色)だが底部を含め薄い器壁で「連江窯」の青磁碗か。SK1269出土。30は龍泉窯系碗Ⅰ類の底部。31は白磁皿Ⅵ類か。32は白磁碗Ⅴ類に似た小碗。34は青白磁の瓶?の口縁部で外面に蓮弁文がありその間に透明青白釉。35は白磁皿Ⅵ類。38は龍泉窯系杯Ⅲ-4類。39は白磁碗Ⅵ類。40は白磁碗Ⅹ類。38～40の1276遺構上層のセットはⅩⅥ期前後(13世紀中頃)の組成か。41は白磁の水滴の破片か。41～51は1277遺構から1279遺構までの検出上部出土。42は陶器A群Ⅰ-Vの四耳壺。灰色胎土にやや暗い褐色とオリーブ黄色の釉。43は龍泉窯系碗Ⅰ類の口縁部。44～48, 50は白磁碗で、44はⅤ-1類、45はおそらくⅡ類の底部、46, 47はⅣ類、48はⅤ-4類、50はⅤ類、49は白磁皿Ⅵ-1b類。51は陶器C群の壺(甕)底部。52は白磁



第31図 Ⅱ区包含層ほか出土陶磁器 (1/4, 1/3)

皿Ⅸ-1c類またはむしろ環か。口先がである。53は白磁皿Ⅱ-2類。54は龍泉窯系青磁のⅢ類の底部だろう。

第29図1-23はⅡ区第1面十坑の出上。1は白磁皿Ⅶ-1a類。2は白磁碗Ⅱ類の底部か。3は同安窯系皿Ⅰ-1b類。4は陶器準A群か。灰色胎上に黒色微粒含み、外面赤灰褐色ないし淡赤紫色、内面は灰ベージュ色。5は同安窯系皿Ⅰ-2b類。6は陶器A群の鉢か。にぶい赤色系の胎上に外面は緑



第32図 瓦器実測図 (1/4, 1/3) ※1は白磁

茶褐色の、内面は褐色の釉。7は口禿げの白磁碗Ⅰ-1類。XⅤ期(13世紀後半)前後。8~13はSK1314。8は陶器B群に似た黒色粒子含む灰色緻密胎土の蓋ない皿。内面は暗褐色の、外面はムラがあり一部露胎だが赤茶褐色から黒褐色の釉がかかる。9は白磁Ⅰ類。10は白磁碗Ⅴ類。11は白磁ⅢⅠ-1c類。12は龍泉窯系碗Ⅱ-b類。13は白磁ⅢⅠ類か。SK1314は口禿げ白磁を含み(9, 11)、XⅤ~XⅤ期か。14は白磁Ⅳ類。16は陶器B群に似た灰色緻密胎土(底部露胎は薄茶色化)、内外オリブ淡緑色釉。17は白磁碗Ⅴ類の底部だが内面見込みに粗い胎上目のようなものが付着。20は白磁の合子の蓋。内面と下面は露胎。あるいは青白磁の範疇かもしれない。21は白磁ⅢⅠ類か。23は白磁碗Ⅴ-4類ないしⅤ類。

第29図24~49はⅡ区第2面上坑の出土。24~33はSK2206出土。24, 27, 30は白磁碗Ⅳ類; 26, 31

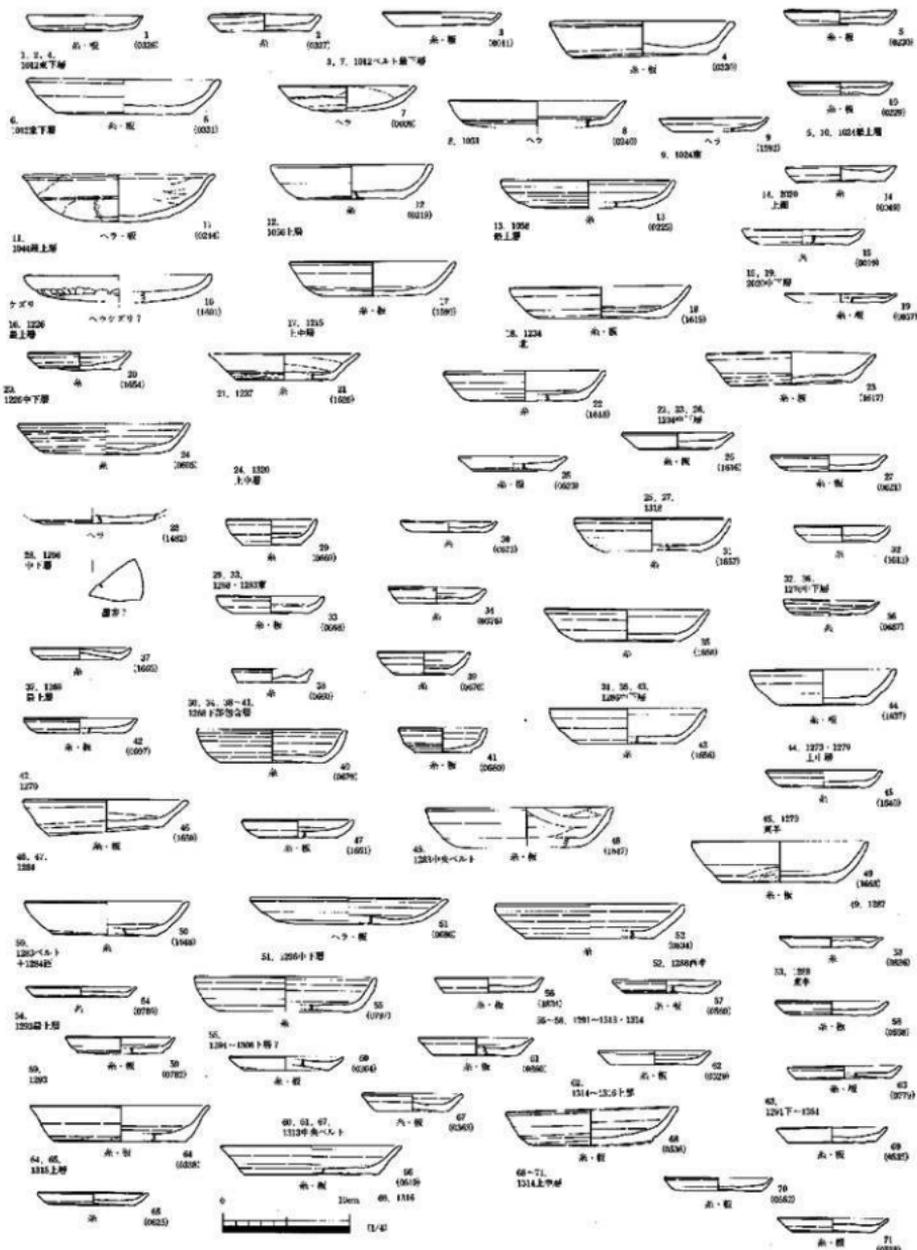


は白磁碗V-1類。29, 33は白磁皿VI-1b類。32は白磁皿V類か。25は白磁皿VI-2a類。28は暗青灰色胎土に黒色釉の天目碗。以上の白磁主体のセットはXⅡ～XⅢ期。34～40はSK2219出土。34は内底見込みに輪状の目跡があり、明灰色の緻密な胎土、薄い緑白色不透明釉で高麗青磁の粗製品と考える。35は白磁碗V類。36は白磁皿V類ないしⅧ類。37は白磁碗Ⅱ-1類で、38も同様にⅡ類の範疇。39は博多分類陶器C群の大甕の口縁部で、砂礫目立つ明赤褐色胎土、灰オリーブ白色と暗褐色の不透明釉が横溝状になる。40は口先げの白磁皿Ⅷ類だが、時期が合わず上部遺構からの混入と考えたい（SK2218上部は第1面から遺構重複が激しく不明な部分が多かった）。40以外はXⅡ～XⅢ期。41～43はSK2216の出土。41は口先げの白磁皿Ⅷ類だが混入の可能性がある。層的關係と切合い関係からはSK2218に伴った可能性はある。43は龍泉窯系碗Ⅱ-a類とみられる。連弁ははっきりしないが器形などは同じ。オリーブ淡緑色釉。42は龍泉窯系碗Ⅱ類の底部。44～47はSK2218の出土。44は白磁碗Ⅱ-1類。45は龍泉窯系碗Ⅱ-b類。連弁が不明瞭だが縁は明瞭。オリーブ緑色。47は青白磁の合子の身。46は陶器B群とみられ、灰色胎土に外面赤褐色釉。48は陶器A群の盤。口縁部から内面にオリーブ色釉、外面露胎だが淡赤褐色を呈する。49は龍泉窯系碗Ⅱ-b類。

第30図1～20はⅡ区第2面上坑の出土。1は陶器A群に近い暗灰～暗紫灰色胎土（砂礫を少し含む）の壺（瓶）の底部で、内外光沢ある黒褐色釉で外底にも釉がかかる。2は龍泉窯系碗Ⅱ-1類の口縁部か。3～6, 8はSK2232。3は龍泉窯系碗Ⅱa類。4, 5, 8は白磁で、4は碗Ⅳ類、5は皿Ⅵ-1b類、8は皿Ⅵ-1b類。6は陶器B群の長瓶などの底部。暗灰色胎土（黒粒子含む）に内外オリーブ薄緑色。7は近世（18世紀か）の伊万里焼の紅皿とみられる。9は白磁碗V類の底部。10は龍泉窯系碗Ⅱ類の底部だろう。11は器形的には龍泉窯系碗だが、明ベージュ色胎土に白化粧土（釉？）がかかるもの。青磁のできそこないか。12は白磁碗V-3類。13は陶器A群に似る暗灰色（底部は明ベージュ色）胎土で内外光沢ある赤茶色釉。光沢が強くなるいは新しいものの混入かもしれない。14は白磁碗Ⅱ類またはⅧ類。15は白磁皿Ⅱ-1類。16は白磁碗Ⅷ類などの底部に似た小碗。17は白磁碗V-2（or3）類。18～20はSK2272。18は龍泉窯系碗Ⅱ-b類。19は内面寛描き草花文を施し、皿Ⅷ-1類とみられるが器形的には皿Ⅷ-2類に近い。20は同安窯系碗Ⅰ-1b類。そのほか写真2-1は、図示していないが青白磁で、香炉状（？）の演形の小さな透かしが多い合子の破片（SK2232）。

第30図21以下はⅠ区包含層ないし遺構検出時出土。21は博多分類陶器A群の盤。内面オリーブ色釉にオリーブ黄褐色の鉄絵文様。外面は露胎で淡赤褐色気味。22は同安窯系碗Ⅰ-1bc類。23は白磁碗Ⅷ類。24は暗灰色胎土に暗オリーブ緑色釉で、雰囲気から越州窯系青磁かもしれない。口縁部外面釉ダレ。26は白磁の合子の身。45は白磁碗V-1b類だがやや小型のもの。27は龍泉窯系碗Ⅱ-2類と見るが、白磁に近いオリーブ白釉で白磁とすれば碗Ⅱ-b類か。25は龍泉窯系碗Ⅱ類の底部。44は白磁で小碗というより坏か。口縁部に輪花。43は白磁の小碗。28は白磁碗Ⅱ-3類だが外面は体部に釉がかからず（口縁部のみ釉）、粗製品か。33は同安窯系皿Ⅱ-2b類。29は陶器A群の盤。内面はオリーブ色釉に暗褐色の鉄絵紋様。外面は露胎。30は白磁碗V類。42は白磁碗Ⅱ-1類。37は白磁皿V-2類。40は白磁皿Ⅱ-1b類。36は暗灰色胎土に黒色釉の天目碗。38は内面見込み輪状釉ハギがあり白磁碗Ⅷ類の底部か。皿の可能性もある。34は白磁碗Ⅷ-3類。39も白磁碗Ⅷ類。32は白磁碗Ⅱ類ないしⅧ類。35は陶器C群とみられ、暗赤灰色胎土（砂礫含む）に暗褐色釉。41は薄青緑の釉色だが、どうも近世前期（17世紀）の伊万里焼（肥前磁器）の青磁小瓶のようである。

第31図1～18はⅡ区包含層ないし遺構検出時出土。1は白磁碗だが類例が不詳である（写真2-2）。器壁が薄く、器形は青白磁に見られるもの。内底に旋回状の花文を施し、上の体部は團日文



第34回 中世十層器実測図 (2) (1/4)

や柳刀による草花文がある。2-4, 10, 13は白磁碗で、2はV-1 (or2) 類、3はIV-1類、4, 10, 13はⅤ類。5は同安窯系ⅢⅠ-1b類か。6は龍泉窯系碗Ⅰ-2a類。7は龍泉窯系碗Ⅰ-4a類。24は白磁ⅢⅠ-1a類か。8は龍泉窯系青磁の合子の身で、外底のみ露胎。半透明な薄青緑色釉。三足ある。9も合子で白磁だが、あるいは近世肥前磁器などの混入かもしれない。外底は露胎で赤みを帯びている。知識不足で判断しがたい。11は龍泉窯系碗Ⅱ-1a類で内底に文字印刻。12は陶器B群に似た胎土の皿(蓋?)。灰赤色緻密胎土で、内面は茶褐色釉、外面はムラや釉ダレがあるが暗茶褐色から淡褐色釉。第29図8と色が少し違うが雰囲気か酷似。14は龍泉窯系碗Ⅰ-2a'類。15は陶器A群に似た胎土の長瓶?で明灰色胎土、外面オリーブ白色ないしベージュ白色釉。外底にもオリーブ色釉。内面露胎だが、同一個体片から上部は釉ダレがある。16は白磁の合子の身。17は陶器B群に似た胎土の盤口壺か水注。黒褐色釉。18は青白磁の碗。内底に篋描き文様。外底のみ露胎。第31図19以下は攪乱や廢土の出土。19, 20は龍泉窯系青磁で、20は坏Ⅲ類の底部、19は碗Ⅰ-2類。21, 23は白磁碗で、21はⅤ類、23はⅡ類。22は陶器A群の(四耳?)壺。明灰色胎土、内面明ベージュ灰色の露胎(頸部は一部釉)、外面明オリーブ緑褐色釉。第32図1は青白磁の合子の蓋。外面2段の蓮弁文できれいな明青白色釉がかかる。口唇部は釉ハギ。

#### 瓦器 (第32図2-30、第33図33, 36, 63)

瓦器の出土量は遺構により偏りがあるが、12世紀代の主な遺構には多少は出土している。第32図2, 3, 13は瓦器皿だが、それ以外は全て碗。また第32図11, 15-20は調整や器壁の薄さ、口縁部形態からおそらく畿内系の搬入品とみられる。17, 19はおそらく和泉系、16は楠葉系、18は楠葉ないし大和系か。21は体部器壁が途中から急に薄くなる。系統不詳だがおそらく在地品ではあるまい。11, 20の底部は薄く「草」で、畿内系の搬入品であろうが細かな系統は筆者には判断できない。9もその可能性があるが、筑前(筑紫)型の範疇でもよい。これら以外は全て在地(北部九州、筑紫型)のものである。3-7、第33図63はSK1012出土の瓦器のセット。碗は森田勉氏分類のⅡb式の範疇とみられ、大宰府編年ではⅢⅢ-ⅣⅣ期のものであろう(森田勉1973「九州地方の瓦器碗について」『考古学雑誌』59巻2号、大宰府編年は山本・山村1997 P.25前掲)。第32図22, 24, 26はSD2204の出土。SK1012より新しい傾向があり、森田氏のⅢ式の範疇でⅣⅣ-ⅣⅤ期であろう。SD2204は陶磁器ではⅣⅢ期であったが、瓦器碗は全て上層出土のため必ずしも矛盾しない。第33図33, 36は森田氏のⅣⅣ式に近く、浅い体部の中位で屈曲する形態や、雑なミガキなど新しいものである。大宰府編年ではⅣⅤ-ⅣⅥ期前後か。SD2004上層は陶磁器は12世紀後半代であったが、瓦器碗はやや新しい感もある。

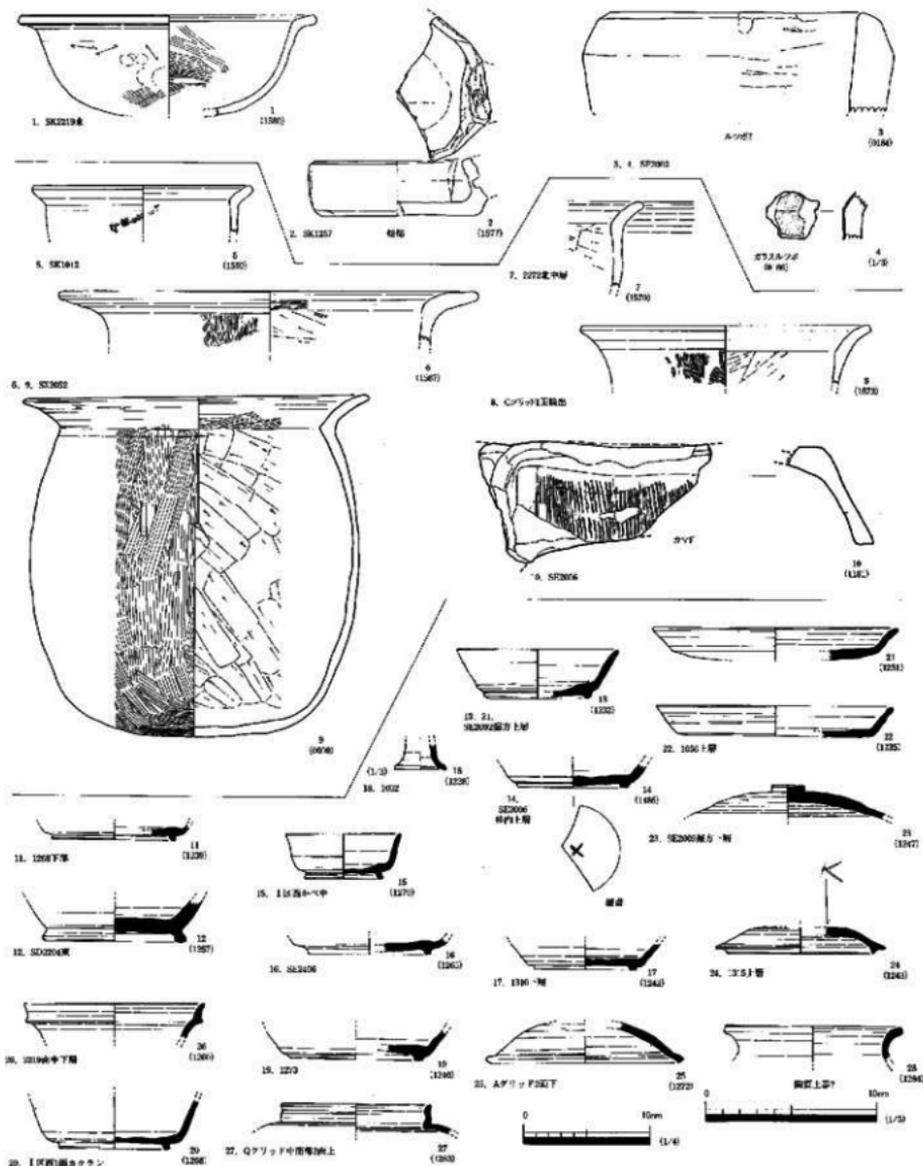
#### 土師器・皿 (第33-36図)

中世の土師器・皿類については、あまりにも多い出土量があるため図示できたのは一部に過ぎず、図示したものについても個々の法量や形態の特徴、底部切り離し技法などの詳しい記述をする余裕がない。したがって以下では遺構ごとの概要を記述するに留まる。

(第33図) 1-3はSE2002出土。全て底部糸切り。大宰府編年(山本信夫1990, P.25)ではⅣⅥ-ⅣⅦ期の型式に似る。4, 6はSE2006。図示したのは底部ヘラ切りだが、実際は糸切りの方が多い。7, 8はSE2025。SE2006に切られるが、糸切りを含む。図示した以外にヘラ切りもあるが、糸切りが多い。ⅣⅢ期の時点で糸切りが半数前後になっているのは大宰府とは異なる傾向で、博多遺跡群の報告では以前から指摘されていることである。逆にⅣⅣ期前後(SE2006)まではヘラ切りも一部残るようである。陶磁器からⅣⅤ-ⅣⅥ期としたSE2407(17-19)は、ヘラ切りが多いが糸切り





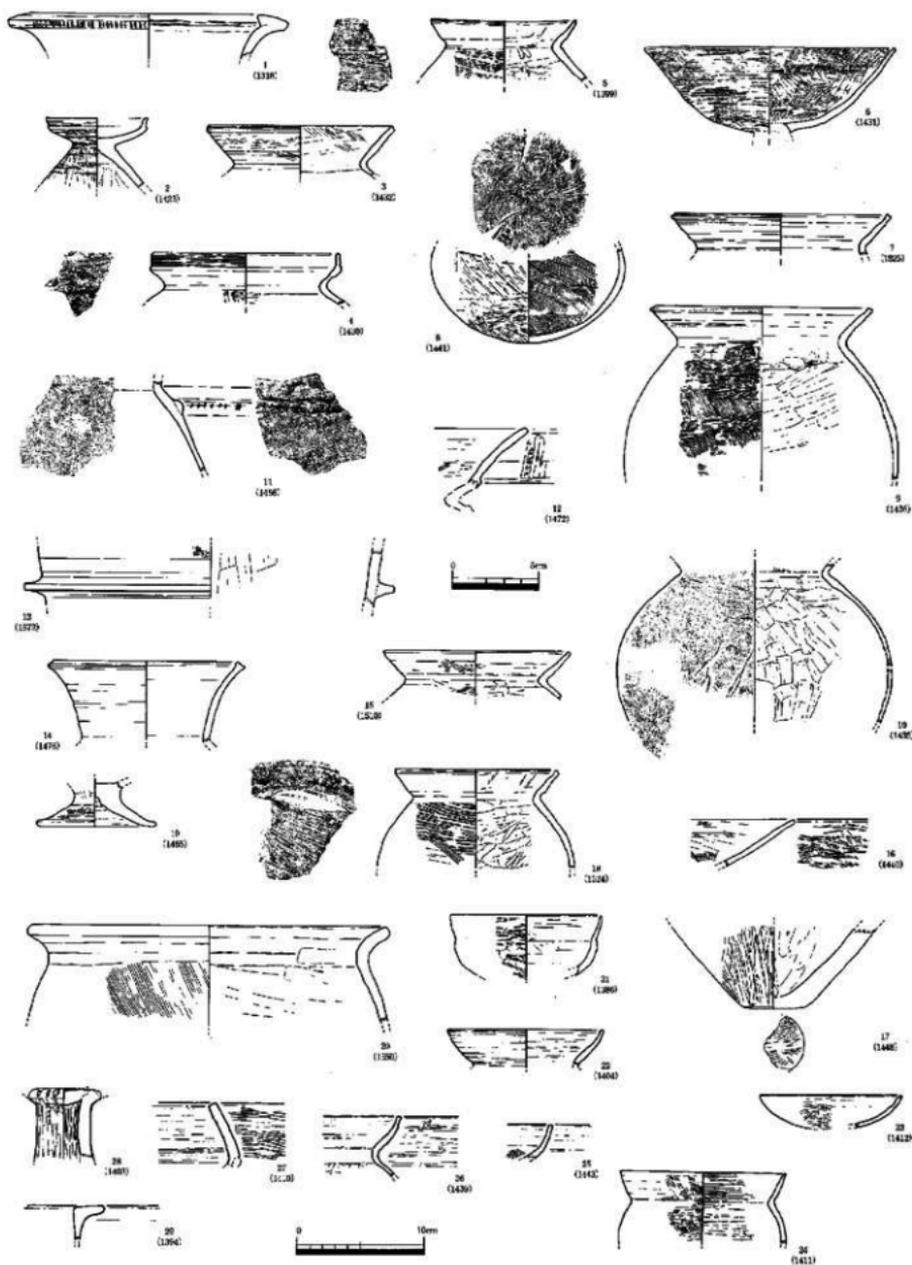


第37図 中世上御質土器, 古代土師器・須恵器 (1/4, 18, 28は1/3

も一部含む(糸切り出現期か)。X II期後半の可能性がある。SE2406は陶磁器はX III期としたが、ヘラ切り(9)もあるが糸切りも含む。SD1050は13~14世紀代初頭の陶磁器(X VI~X VII期)を

出土しているが、土師器(20~26)も新しい傾向。20は丸みを持つ立ち上がりで深い体部で13世紀後半頃であろう。ヘラ切りが少数だが(25)、混入の可能性があり、基本的には全て糸切り。土師器でも大宰府でのXVI~XIX期の諸型式に類似する。SD2004の上層~中層では(27~32, 34, 35)、底部糸切りですでに占められる時期である。大宰府のXIV~XV期の型式に類似する。35はヘラ切りの丸底坯の破片だが、小さい焼成前の穿孔がある。12世紀前半のものであろう。37~39はSD2204。ヘラ切りの丸底坯が存続するが、糸切りが一定量ある段階である。SD2204は陶磁器の型式も幅があり、掘り直しや別遺構の重複を一部見落としている可能性があるから評価は難しい。41~45はSK1007B上半層。全て糸切りで、土師器からみると口径12~13cmで13世紀代となり(大宰府XVII~XVIII期に似る)、陶磁器ではXIII期が出土しているのは混入品の可能性がある。SK1003は全て糸切りで(47, 48)、大宰府のXIV期に類似するがヘラ切りは無い。49~62はSK1012(上に上層)。ほぼ糸切りで占められる。法量や形態から大宰府のXIV期に似るが、坯の体部が深い感がある。ほぼ全て糸切りになるのはやはり大宰府より早いのか。なおSK1012は陶磁器と瓦器ではXIII~XIV期である。

(第34図)1~4, 6, 7はSK1012下層。法量など大宰府のXIV期に類似。1点ヘラ切り(7)がある以外は上層とほぼ同じ。なお、4のように底径がやや大きいものが含まれるのが注目される。5, 9, 10はSK1024。ヘラ切りを一部含み(9)、多くは糸切り。XIV期に似る。12の坯は口径13.0cmで、内湾気味に立ち上がる体部のもの(SK1056)。13世紀後半~14世紀前半頃で大宰府XVIII~XIX期(一部XX期までか)に併行するタイプ(ないし系統)と考えるが形態が異なる。博多ではこの時期こうしたタイプが多いようである。時期的な型式変遷はまだ不明。13は口径14.0cmでやはり体部が内湾するタイプのもの。法量的には大宰府XVI期頃と似るが、形態が異なり、また底部板目瓦痕も無く、13世紀末から14世紀代と考える(大宰府XIX~XX期併行か)。出土遺構のSK1058はSD1050埋没後のもので14世紀代。なお博多遺跡群では、13世紀末から14世紀代にかけて、口径12~13cm前後の通常の坯の他に、口径14cm代的大型坯があることが報告・指摘されている(例えば博多62次報告、福岡市報告第397集)。筆者も同様の報告を行ったことがある(博多97次報告、第558集)。14, 15, 19はSK2020。全て糸切り。大宰府のXV~XVI期に類似する。同遺構出土の陶磁器の時期と一部合うがやや新しい感もあり、遺構の時期を示すか。16, 20はSK1226。20は口径8.1cmで15~16世紀の小皿。16は椀皿状の形態で、底部はヘラ切りないし回転ヘラケズリ、体部中位に静止ヘラケズリあり。堅い焼成で中世末16世紀代のものか。この時期の上師器編年は未確立であり細かい時期比定ができない。17はSK1215。口径13.3cmで大宰府XVIII期に類似。陶磁器の時期と合致する。ここまで土師器の坯・皿を概観してみると、12世紀前半から中頃の糸切り導入期では、博多と大宰府では若干のズレや形態・法量の微妙な相違があるが、12世紀後半から13世紀前半(XV~XVIII期)では比較的差が少なく、型式変遷が類似するようである。その後XVIII期以降、博多での上記の体部内湾タイプが比較的目立つなど大宰府と型式の齟齬が生じるようである(大宰府に近い型式変遷をする系統も少なくないが)。また底径が比較的大きいものや、坯の体部がやや深いものがあるなど、法量分化も考えられる。14世紀代的大型坯の存在もそのような脈絡で考えられる。18, 22, 23, 26はSK1234。大宰府XVI~XVIII期に類似。24はSK1320で、口径13.5cmでXVIII期に類似するが、体部内湾傾向があり、底径がやや広い。21はSK1237で、口径12.1cm、体部が直線的で、これは大宰府XIX期に類似する。29は小皿bとされるもので、XIX期頃か。30, 34, 38~41のSK1268下部とするものは、SK1286(31, 35, 43)と同じ可能性が高い(初め別遺構としたが最終的に同じ



第38图 彝生土器·古式土師器类测图 (1) (1/4)

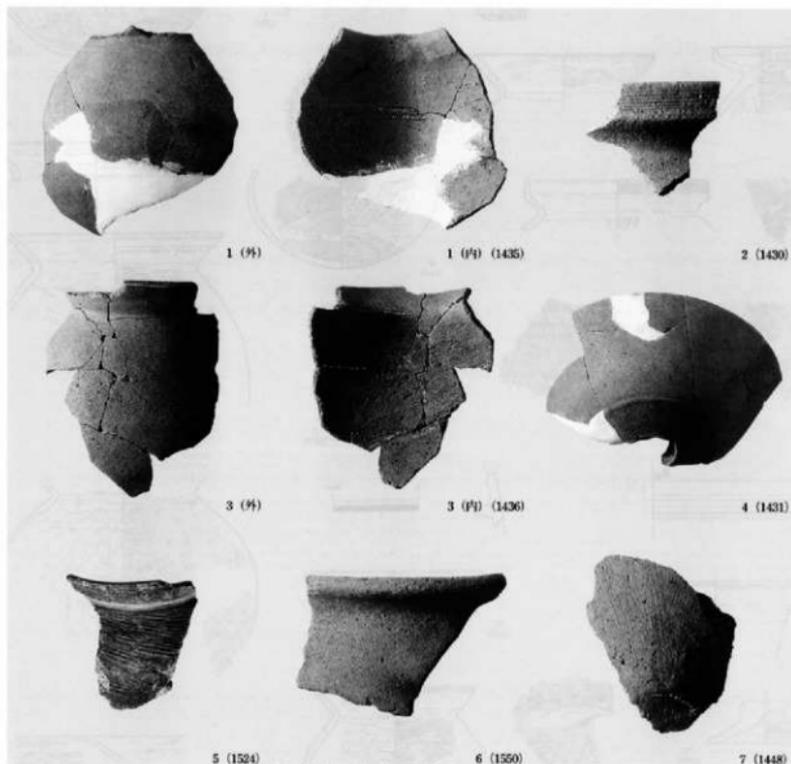
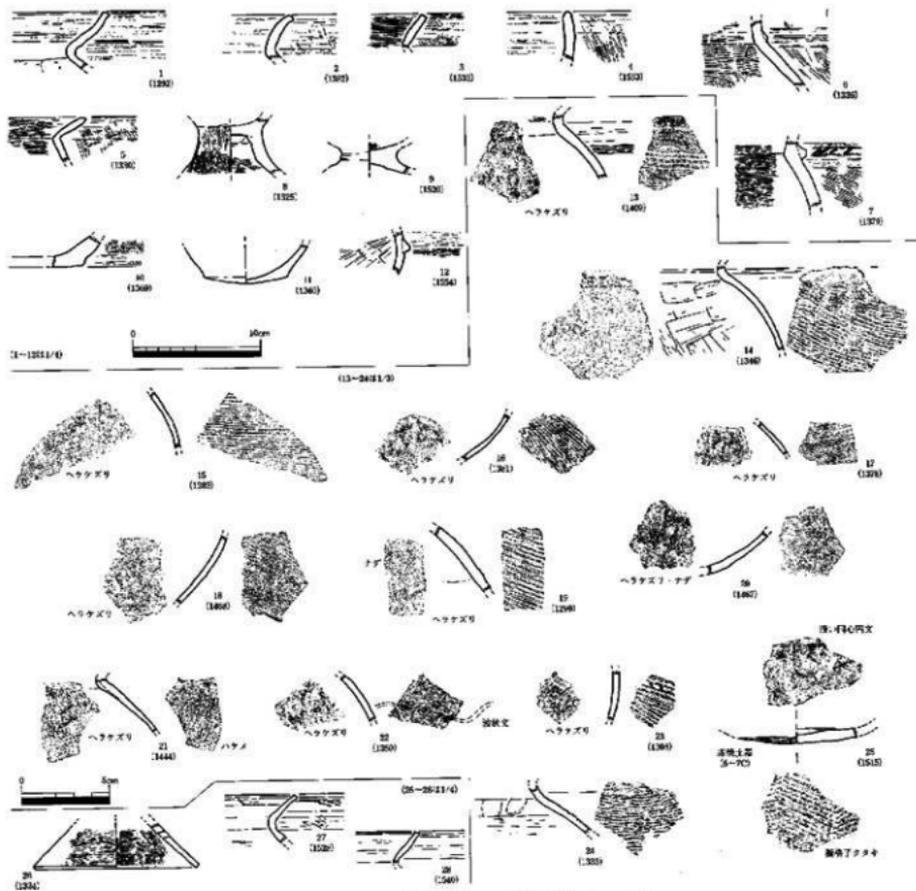


写真3 博多117次 出土古式土師器・弥生土器  
 (1・3 SC2231出土, 2・4 SK2229出土, 5 II区Nグリット1面下, 6 SK2225上部, 7 SK2244掘上層)

遺構と判断した)。いずれも大宰府XⅣ～XⅤ期の型式に口径などは類似し、一応併行時期と考え  
 ておくが、坏の多くは体部内湾気味で底径が大きい傾向がある。39, 41は小皿bである。48, 50は  
 SK1283。48は口径14.9cmの坏だが、内湾傾向の体部。50は口径は通有だが体部内湾気味。これら  
 はXⅤ期頃併行と見る。51はヘラ切りで、XⅢ期に類似 (SK1296)。49は体部の深いタイプで13世  
 紀後半 (XⅣ期併行) か (SK1287)。52, 53はSK1288。XⅤ～XⅥ期に類似する。ただし遺構は  
 切合いからSK1287より新しい。55は口径14.4cmで体部内湾気味、底径も10.5cmと比率的に大きい  
 もので、14世紀代のものであろう (XⅤ～XⅥ期)。60, 61, 67はSK1313。いずれも糸切りの小皿  
 だがXⅥ～XⅦ期に類似。64, 65はSK1315。64は口径14.0cmで、小皿の65からもXⅥ期前後と考  
 えるが、体部が深い (器高2.9cm)。68～71、第35図1～11はSK1314上半層。大宰府XⅣ期前後の型  
 式に類似。陶磁器の時期とここではおむね合致する。

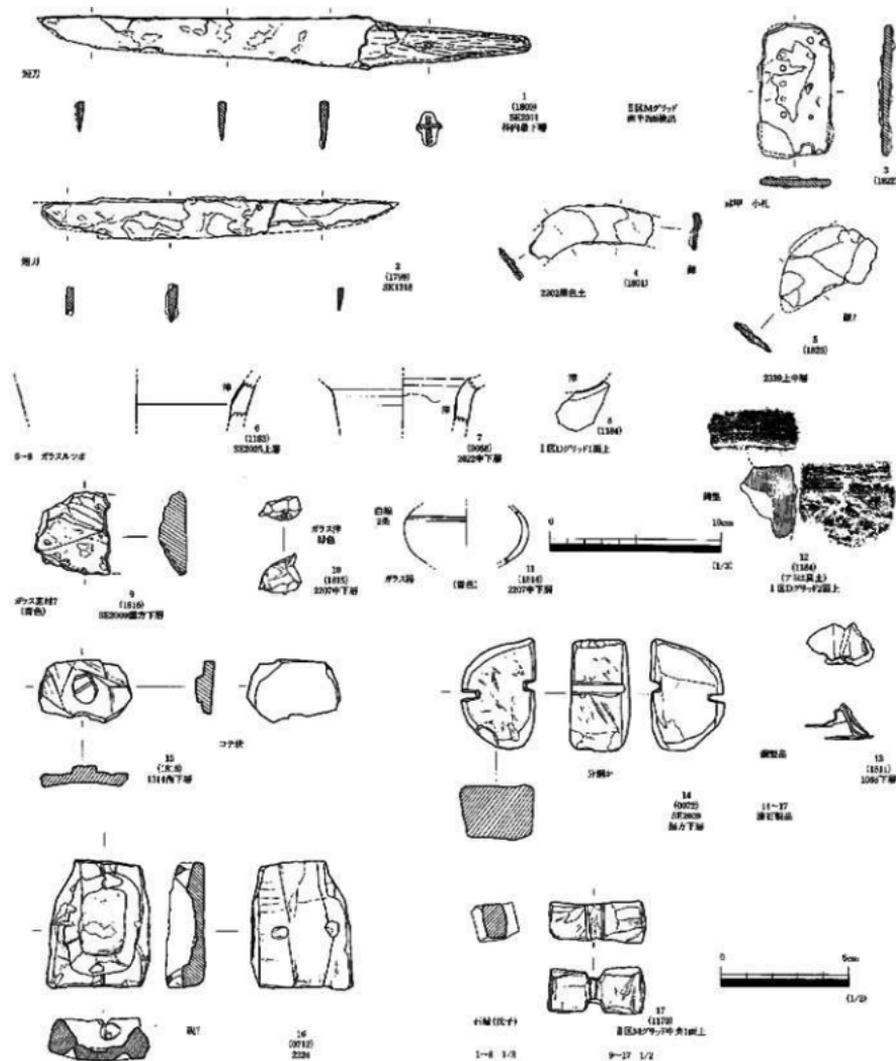
(第35図) 12～23はSK1314下層。18や小皿の型式は大宰府XⅤ～XⅥ型式に類似。陶磁器でX



第39回 弥生土器・古式土師器ほか実測図 (2) (1/4, 1/3)

Ⅵ～ⅩⅦ期とした白磁碗区類などの存在は上層出土であり、層位的には矛盾しない。

なお12, 16, 24は口径12.6～13.0cmでⅩⅦ期前後に似るが体部が深く(器高3.0cm)、博多で13世紀中頃に以降特徴的な体部内湾傾向もないのでこの時期の異型式と考える。25～31はSK2216。法量にややばらつきあるも大宰府ⅩⅥ～ⅩⅦ期に類似し、陶磁器の時期とほぼ合致か。ⅩⅦ期ならば混入とした口禿げ白磁も伴う可能性もある。32～35はSK2217。ⅩⅥ～ⅩⅦ期に類似。36～60はSK2219。層位により土師器の型式(時期)が異なるようである。上層では(36～51)、42のヘラ切りの丸底坏が占い他はⅩⅥ～ⅩⅦ期の法量・型式。陶磁器の報告のところで口禿げの白磁を混入としたが、上層には伴う可能性もある。また遺構自体、土層から上・中・下層で全く異なる覆土であり、またベルトの両側の土層が対応しがたい部分があるので、SK2219は複数遺構を一括に掘ってしまった可能性が高い。中層から下層は(52～55, 57～60)、幅があるがⅩⅣ～ⅩⅦ期の型式に対応する。上に書いたように複数遺構のものかもしれない。最下層は(56)ⅩⅢ期としても良い法量・



第40図 鉄製器・ガラスルツボ・銑型・ガラス製品・石製品・銅製品実測図 (1/3, 1/2)

形態の糸切りの坏であるが、これはSK2219出土の陶磁器の主体の時期と一致している（ただし陶磁器はより上層出土も含む）。64～66はSK2232・2233検出時上層。XVI期であろう。おそらくこれはSK2232の時期。67, 69, 71はSK2233で、67の坏などからXVII期であろう。造構の重複関係は

迷ったが、やはりSK2233が上から切るのであろう。68, 70はSK2235。X V～X VI期か。61はへら切りの小皿(SK2245)。X II期後半前後か。本調査では、へら切り単純期の遺構はほとんどみられず、糸切り出現期以降が多いようである。ここまで見たようにX III期併行には糸切りがすでに半数は占めていること、その出現はX II期後半の可能性はあるのはこれまでの博多遺跡群の成果と同傾向である。72～81、第36図1、5は遺構の集中していたII区M～Nグリッド南半の第1面検出時の土師器。X VI～X VII期の型式で、第1面の年代を示す。

(第36図) 2はII区N～Oグリッド1面検出時だが、口径16.3cmのこの坯は14世紀でも中頃～後半の可能性はある。4～24、58はII区1面下から2面上の包含層中出土だが、一部を除きX VI～X VII期が多く、第1面とあまり変わらない。ここで「包含層」とし



1 SE2011出土鉄刀小柄 (写真9と同じ)



2 SK1318出土鉄製刀子

写真4 博多117次出土鉄製小刀写真



写真5 SK1314出土こて状石製品

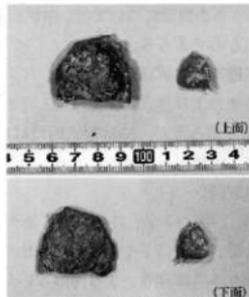


写真6 SK1068出土不明銅製品 (銚金具?)



1 博多117次出土ガラスツボ片 (内面)

写真7 ガラス生産関係遺物写真



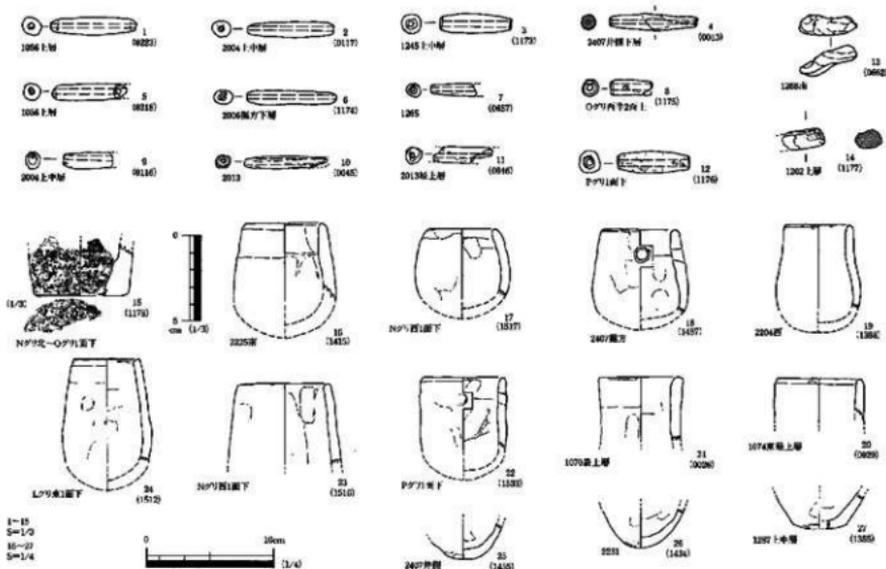
2 博多117次出土ガラス素材・滓



写真8  
II区・Mグリッド南2面  
検出時出土埴甲小札  
(約1/2)



写真9 SE2011井戸枠下層出土鉄刀小柄 (約1/2)



第41図 各種土製品実測図 (1~12土皿, 13~14不明, 15焼壇, 16~27イダコ壺) (S-1/3, 1/4)

たものが、実際には第1面の遺構の掘り残しを多く含んでいるものと考えられる。遺構の重複が激しく、切合い関係や遺構床面の認定に誤りが多かったであろうというのが正直なところである。

その他、第36図26~48は近世の土師器である。近世はあまりとりあげていないが、コップ状の内皿を坏に付した灯明皿専用の形式 (26~30) が多く出土したことから資料を提示しておく。近世の土師器の坏皿類の編年が未確立のため詳細な時期は不明だが、おそらく18~19世紀前半までの範囲であろうか。なお提示資料のうち小皿類については、中世後期のものが混じっていたとしても判別できない。また34は16~17世紀のものであろう。

#### 瓦質土器・中世須恵器ほか (第36図49~57)

49, 50は瓦質土器の釜および鉢。14世紀ないしそれ以降のもの。51~56は東播系須恵器か。おおむね12~13世紀代の所産であろうが、53は型式的には14世紀に下るか。ただし出上面から疑問もある。57は格子目タタキを施し、稜線が特徴的に入るロクロヨコナデを施す高麗陶器 (陶質土器) である。

#### 中世土師質土器 (第37図1~3)

1は上師質土器の鍋。内面ハケメ、外面ハケメ後ナデないしミガキ。外面に煤がびっしり附着する。2は焙烙状の土師質土器。焼成は1や坏・皿類に比べ硬質。14世紀代ないしそれ以降か。3, 4は上師器質の増埴。4は内面ガラス滓附着。3は滓はないが、類例・形態から推定。3, 4は、いずれも粗い胎土を用いている。

#### (2) 古墳時代後期から古代の土器 (第37図5~27)

5~10は上師器。5~8は奈良時代の甕の口縁部。5, 7は7世紀代の可能性もある。いずれもこの種の甕としては丁寧な口縁部ヨコナデを施す。9はSX2052の完形の甕形土器。外面煤付着。口縁部はヨコナデ、内面ヘラケズリ、外面タテハケ。底部は円板状成形。8世紀後半か。

10は土師器の移動式甕の部材。図の左が焚口部 (窓部) の正面右上部分。奈良時代であろう。以上

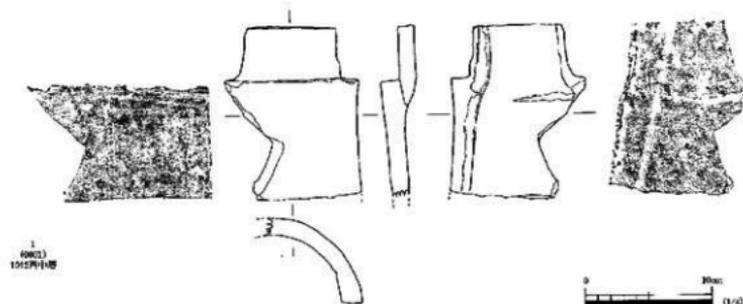
は、9以外は後世の遺構などの出土。なお第39図25は6～7世紀代の似非須恵土師器（赤焼土器）。

11～27は須恵器。いずれも後世の遺構や包含層からの出土。11, 13～17, 19, 20は奈良時代の高台付環。8世紀を二つに大きく分けると、11, 15, 16, 20は8世紀前半、13, 14, 17, 19は後半となる。14の外底には墨書。12は壺の底部の可能性が高い。21, 22は奈良時代の皿（皿状環）。23は奈良時代後期（8世紀後半）の蓋。24は小田高土雄編年ではⅥ期の坏蓋で7世紀第4前半期。へう記号あり。25は壺などの蓋であろうか。26は盤口壺の口縁部で、肥後系の可能性がある。8世紀後半ないし9世紀代か。27は口縁部異形の壺だが、台付短頸壺か。18はミニチュア品で小型の器台状のもの、あるいは逆につまみ状のものかもしれない。類例不詳。奈良時代の須恵器や土師器は他にも一定量出土している。また古墳時代後期（6世紀）から飛鳥時代（7世紀）の遺物は存在するがわずかである。28は口縁部形態やヨコナデの特徴、色調などから須恵器というよりも陶質土器の甕の可能性が高い。その場合は次の古墳時代前期の遺物と共存する可能性が高いが、整理ミスで出土地点不明になってしまった。

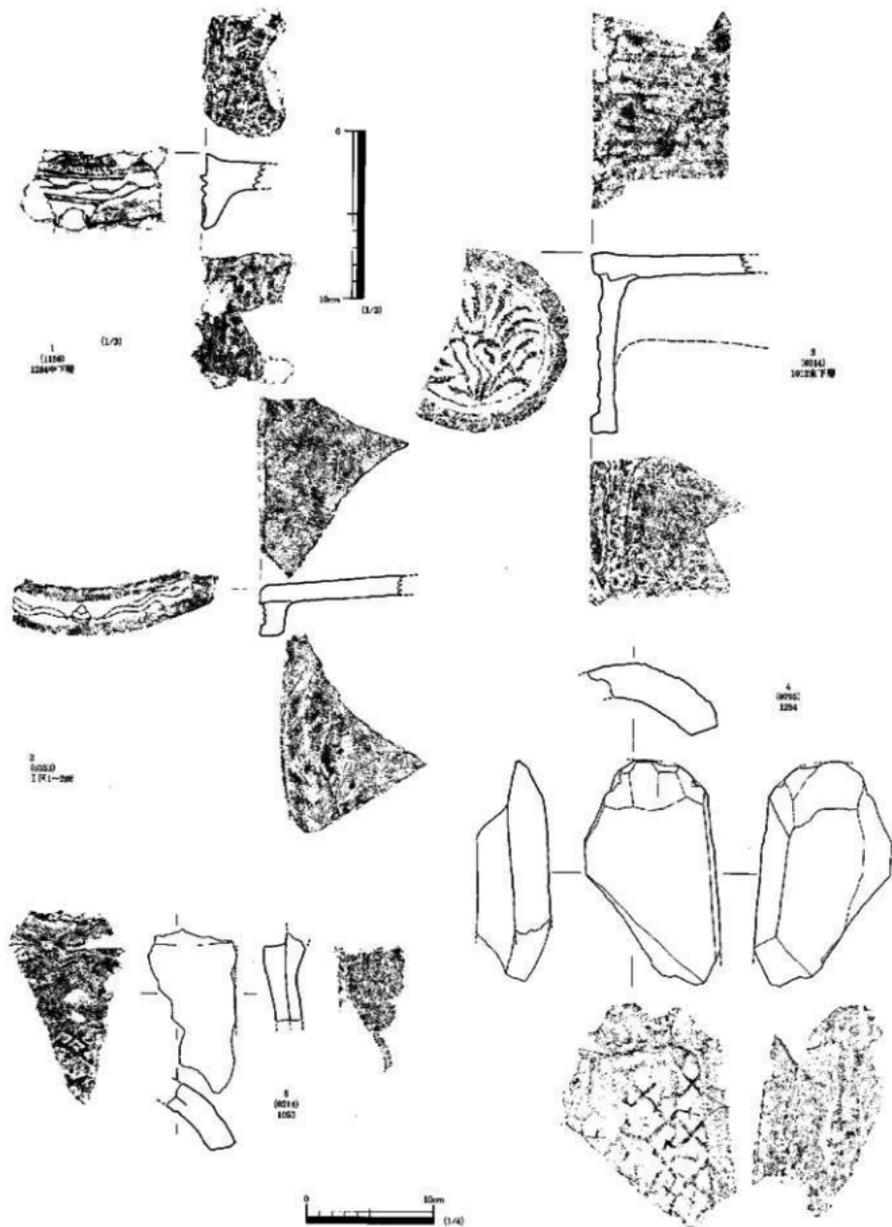
### （3）弥生時代から古墳時代前期の土器（第38～39図）

これらは総量小パンケース5箱程度があるが、SC2231およびSK2229出土以外は、ほとんどが後世の遺構や包含層から出土した。しかし本来は各時期の遺構があった可能性があり（Ⅱ章1、Ⅲ章3）、小片でも積極的に図化紹介した。なお弥生終末から古墳前期の編年と分類は久住猛雄1999による。

（第38図）1は須玖Ⅰ式の広口壺。口縁部外方に刻目。橙褐色。2は古墳時代初頭の精製器種B群（次山淳1993「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』40巻2号）の小型器台。形態は久住1999のⅡb式だが、福岡平野の精製器種B群は細かい条痕のハケメを細密ミガキ前に施すものが多いが（内面は細密なハケメが多い）、これが見られず、畿内からの搬入の可能性が高い。明赤褐色。SK1204。3は筑前型庄内甕。播磨型の一部の口縁部形態に類似しその可能性もあるが、筑前型にも一部存在するもの。頸部ケズリB類でⅡ式古相（ⅡA期）。胎土は後述のC類で、5に似た色調からいふに黄灰色。SP2230出土で本来はSC2231か。5は筑前型庄内甕のⅣ式でⅡB～ⅡC期。胴部器壁が厚くやや粗雑。にぶい淡黄橙色。SK2221（SE2406上層）。以下、SK2221出土の個体は（22, 24, 27, 28, 第39図13）、遺構の位置から本来はSC2231に伴う可能性がある。6はSC2231の高坏D1類（精製器種B群）。坏部立ち上がりからⅡB期。SK2229。他にSK2229出土では、4、第39図21がある。7は北部九州型布留甕（甕D）の口縁部。にぶい淡黄橙色。SC2231。他にSC2231出土では、8～10, 16, 26, 第39図27がある。8は精製器種B群の長頸壺の体部下半か。内面は規則的な細密ハケメ、外面はケズリ後細密ミガキ。赤褐色。9は甕Dで口縁部形態や頸部ケズリなどからⅡB期。に



第42図 瓦美瀬園・拓木 (1) (S-1/4)



第43图 瓦実測図・拓本 (2) (S=1/3, 1/4)

ぶい黄橙色。肩部ヨコハケは断続気味だが口縁部回転ヨコナデ。10は筑前型庄内甕の典型。頸部ヨコナデからⅣ式（ⅡB期）。タタキ目が細かい。灰白色から浅黄灰色。4は吉備系甕で吉備の亀川上層式か。短い複合口縁部の外側は密な擬凹線文。外面ハケメでミガキが認められず、頸部屈曲がやや甘く、胎土・色調が10、18などと同じで在地品と考えるが、精巧模倣品か工人移動臨池品か不明。典型的吉備産の暗褐色で角閃石や閃緑岩を含むものではない。12は鼓形器台の受部。小型品でⅡC期か。浅黄色。Hグリッド1面下。11は在来系複合口縁文の一部か。頸部が太いとみられ、突帯も偏平気味で古墳初頭ⅡA期前後。赤橙褐色。

SE2407。13は確証はないが山陰系大型甕の下部突帯の可能性はある。内面ケズリ。古墳後期の甕などの可能性もあるが断定不能。橙褐色。Dグリッド2面検出時。14は布留式系（D系統）の回転ヨコナデを有する直口壺。淡黄灰色。15は庄内甕だが、口縁部や頸部形態などから大和型の搬入品とみたい。口縁部端部はつまみ上げわずかで大和型なら嚮向2



1 1062上層  
開元通宝



2 1201上坑  
寛永通宝



3 1287西辺上層  
淳化元宝



4 1268中層  
景□□宝



5 1018東半  
開□□宝



6 2216最下層 (2204?)  
祥□□宝



崇寧重宝  
Qグリッド1面下  
包含層

第44図 博多117次出土銅銭線影 (4/5)

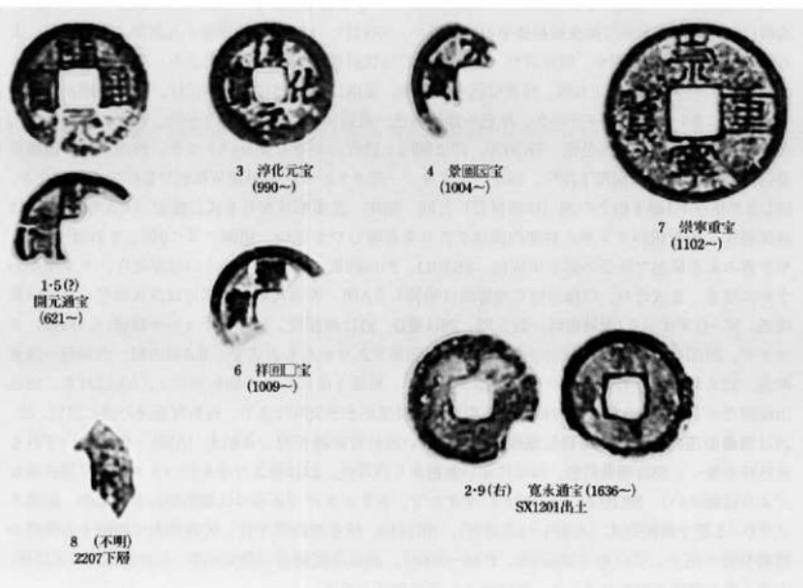


写真10 博多117次出土銅銭X線写真 (ほぼ実大)

式後半か。外面黄褐色、内面黄灰色。後述のD類に似た胎土。残念ながらI区第3面の廃土より採集。16は高環D5類の坏部（精製器種B群）。赤橙色。17は弥生後期後半の甕。内面粗いケズリ、外面原土不明のカキナデ擦痕。明赤褐色。SK2244。18は筑前型庄内甕Ⅳ式。5と同一工人と考えたいほど特徴が一致する。にぶい黄褐色。Nグリッド1面下。19は脚付椀の脚台部。精製器種B群。赤橙色～橙色（23、24も同色）。Eグリッド1面下。20は弥生後期初頭～前半の甕であろう。浅黄褐色。SK2225。21は小型丸底壺Ⅱa類（精製器種B群）。ⅡA～ⅡB期。橙色。SD2204。22は甕Dの口縁部。浅黄褐色～浅黄色。23は精製器種B群の小型鉢。SK2222出土で、位置的にSC2231に本来は帰属か。24は精製器種B群の丸底壺（埴）。25は甕Dの口縁部だが著しく内湾する。西新町遺跡に稀に見られるタイプか。黄白色ないし浅黄色。26も甕Dの口縁部。形態はⅡC期に下り、鈍い橙色～浅い橙色で早良平野の甕に似る。27は在来系複合口縁部壺の口縁部。橙褐色。頸部との接合は擬口縁状痕跡。SC2231のⅡB期でもよい型式・技法と考える。28は在来系高環の脚部上部。坏部とは刻目を入れ接合補強するが、こうした発想は精製器種B群の影響の可能性があり、SK2221出土でSC2231に伴ってよい。粗い胎土で茶褐色。福岡平野縁辺部か。29は中期初頭から須玖Ⅰ式前半の甕の口縁部。摩滅顕著。SK2218。

（第39図）1は甕D。ⅡC期。黄灰色～浅黄色。遺構1292。2は在来系甕（甕A）。弥生終末か。遺構1382。3は在来系甕。弥生後期後半ないし終末。Oグリッド2面上。4は在来系鉢。弥生終末ないしⅡA期までか。灰黄色。Ⅱ区コンクリ基礎東SK1217。5は伝統的V様式宴客甕の甕B5型式。ⅡA～ⅡB期。SK1204。6は在来系複合口縁部壺の頸部から肩部。ⅡB～ⅡA期。SK1220。7は在来系大型甕か。突帯形態から弥生終末（ⅠA～ⅠB期）か。SE2025。8は在来系合付鉢であろう。SK2218。9は在来系小型合付鉢。Nグリッド1面下。10は弥生後期中頃の壺の底部。SD2004。11は弥生後期後半の甕の底部。レンズ底だが、底部からの立ち上がりが少し凹む（外反する）ので終末には下らない。遺構1355。12は在来系で弥生後期後半の小型壺か。SK1217。13は甕Dの頸部から肩部。櫛状工具による平行文。ⅡB～ⅡC期か。暗灰黄色。14～20、27は筑前型庄内甕。14はⅢ式か。細かいタタキ。外面一部タテハケ。ⅡA～ⅡB期。浅黄褐色～浅黄色。遺構1264。15は胴部中位片。かなり細かいタタキ（Ⅲ式に多い）で一部タテハケ。灰色～淡灰褐色。遺構1010。16は胴部下位片。細かいタタキ。内面橙色、外面煤付着し黒色化。SK2020。17は胴部上位片。かなり細かいタタキ。外面灰色、内面黄褐色。SK2023。18は胴部下位片。細かいタタキで一部タテハケ。内外黒灰褐色で意図的な黒色化か。同じEグリッド1面下出上の20（底部付近）と同一体。底部形状からⅡ式と推定（ⅡA期か）。19は肩部破片。やや粗いたタキ。肩部内面はケズリを省略しやや厚い。頸部ケズリ0類とすればⅠ式か。やや青みある灰色で断面の芯が黒灰色。SK1011。27は回転ヨコナデを伴う口縁部破片。タタキがわずかに残る。Ⅲ式だが、口縁部短く端面は傾斜しⅡA期。表面褐色、素地は淡灰褐色～にぶい黄褐色。N～Oグリッド1面検出時。21、22、28は甕D。21は肩部片。外面ナメメハケ後径い（回転）ヨコナデ。肩部ヨコハケ未定期型の布留傾向型。頸部ケズリからも古式で、ⅡA期古相。浅黄色～浅黄褐色。22も肩部片。外面タテハケ後上部ヨコナデ、肩部下位に一条の回転波状文。SK1277東。28は口縁部だが、明黄色を呈し口縁部短く古相ながら端面が水平気味であり、西新町遺跡の甕に類似。23、24は播磨型庄内甕で、花崗岩起源砂粒を含まない琉紋岩砂礫が混じる胎土（A類）。色調はいずれも黄色味が強く、23は明黄褐色、24はにぶい黄色から浅黄色。23は他よりやや粗いたタキ（V様式系などよりは細かい）。SK1006。24は細かいタタキで、水平タタキであるのは播磨型に多いもの。頸部ケズリD～E類で新相型式（布留0～1式併行）。SK1240。博多遺跡群では、97次調査で類似する段階の播磨型甕が出土している（第558集、P.46～3003）。26は小型器台（精製B群）の脚部b類。SK1215。内面丁寧な細密条痕のヨコハケ、外面タテハケ後細密ミガキ。

以上の土器のうち、弥生後期後半から古墳前期の土器で（以前の土器は細かく見ていない）、砂礫

微量の精製器種B群を除く胎土類型を以下に記す。砂礫の粒径や量はここでは捨象している。A類：琉紋岩系砂礫包含＝第39図23, 24 (播磨型産)。B類：比較的精良胎土で砂礫微量だが琉紋岩系砂礫主体のもの＝第38図26、第39図13, 22 (22はC類の可能性も)。「加賀南部産」とされることもあるが(奥田尚氏による。福岡市報告第328集・第375集参照)、形態が加賀南部とは異なり、型式・系統は北部九州型(久住1999前掲)。C類：琉紋岩起源と花崗岩起源の砂礫が混合しているもの。雲母微粒を微量含む。砂礫少量～微量のことが多い＝第38図3, 5, 13, 14 (D類か), 18 (D類か), 27, 第39図5, 14, 15, 17, 18, 20, 28。D類：花崗岩系の砂礫主体のもの。砂礫の粒径や量は大小がある＝第38図4 (C類か), 7, 9～12, 17, 22, 25, 28, 第39図1～4, 7～9, 11, 12, 16, 21, 27。なお第39図6はD類に似るが片岩を含むようであり、また第38図28はD類とするが違和感がある。C・D類は間違いなく福岡平野とその周辺の製作、B類は今後再検討の必要がある。

SC2231とSK2229出土土器(第38図4, 6, 7, 9, 10, 16, 25, 26, 第39図21, 28)は、おおむねⅡB期の範疇で、一部ⅡC期である。本来それに帰属すると推定される土器(第38図3, 5, 11?, 14, 21?, 22～24, 26～28, 第39図13)も、おおむねⅡB期前後で矛盾はない。

#### (4) その他の遺物(第40～42図)

第40図には鉄製品、ガラス生産関係遺物、ガラス製品、銅製品、石製品を図示した(写真4～9も参照)。1の小刀は柄の木質が残存。3はX線写真で鍍甲の小札と判明。6～8のガラス増埴と(第37図3, 4も)、9, 10のガラス素材ないし滓の出土、11のガラス小壺片の出土が目される(9～11は巻頭写真参照)。13は青銅製の飾金具だが、薄板で押され変形しているか。第41図は土鍾、焼壺壺、飯鍋壺などを図示した。1～12の土鍾は古墳時代から中世まで機能に規定されているのか形態変化がよく分からない。13, 14は不明土製品。15は中世の焼壺壺で、内面薄く布日痕。16～27の飯鍋壺のうち、16～18は丸みを有し器高が低い奈良時代(ないしそれ以降も?)の形態。23～27は古墳時代前期に見られるやや長筒気味の形態である。19～22はその中間形態であり、埴埴時期が判断できない。25, 26がSC2231出土である以外は、全て後世の、中世遺構出土である。第42・43図には瓦を図示した。第42図は丸瓦、外面縄目文(縄網文)タタキ、内面布日痕。遺構は12世紀後半。第43図1は平安時代(11～12世紀?)の押印文の軒平瓦。遺構は第1面で13世紀以降。2は唐草紋または芝草紋の軒平瓦。芝草紋は簡略化されている。上面タタキ後丁寧なナデ、下面も丁寧なナデ。3は花卉紋の軒丸瓦。上面縄目タタキ後ヘラナデ、下面は布日痕にナデ。第42図と同遺構出土。4, 5は丸瓦の破片。いずれも外面斜格子タタキ、内面布日痕。いずれも瓦質焼成で堅緻。

#### (5) 銅銭(第44図、写真10)

銅銭は計9枚出土している(写真10)。うち2枚は近世の寛永通宝で、他は唐銭(1, 5)・北宋銭(3, 4, 6, 7)である。南宋銭や明銭は出土していない。中世前期の遺構が濃密であったわりには出土量は少ない感がある。いずれも鑄造年代より後の遺構の出土であり、年代的な矛盾はない。

## IV おわりに

すでに紙幅は尽きた。限られた範囲で可能な限りの調査成果を提示しようとした結果であり、御寛恕を頂きたい。V章には動物遺存体の、VI章にはSX1201の素焼人形についての報告と考察を付した。なお素焼人形(博多人形の祖型)については、人形師の中ノ子勝美氏ら中ノ子家の方々の御教示があった。記して感謝申し上げたい。これについてのみ若干触れておきたい。第45・46図から、SX1201は中ノ子家工房とは道を隔てた東側の当時(近世末)は中ノ子家所有地であつたらしい土地の道端に生活雑器と共に埋め捨てたということのようである。「古式博多人形」(→裏表紙裏へ続く)

## V 博多遺跡群117次調査出土の獣骨(動物遺存体)について

屋山 洋 (福岡市埋蔵文化財課)

資料の抽出にあたって、細かい篩や水洗選別は行っていない。資料の詳細は表1に譲ることとし、以下、特筆すべき資料のいくつかについて記述する。

### 1 魚類

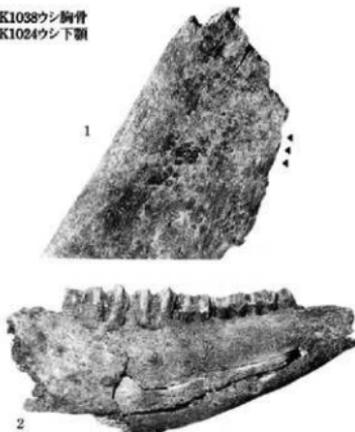
5mm角以上の破片は110点ほど出土しており、被熱し白色化している。ほとんどが固定不可能な細片であるがマダイの前上顎骨と第一血管間棘が出土している。

### 2 哺乳類

哺乳類ではウシの出土が多く、とくにSK1024 (写真11-2)とSK1038 (写真11-1)でまとまって出土している。SK1038出土の胸椎に解体痕が見られること、また、どちらも頭蓋骨と椎骨・指骨など肉が少なく解体時に切り落とされる部分が多いことから、この場所で解体され、肉や肉が付いた四肢骨はよそに持ち去られたと考えられる。200m離れた39次や115次調査でも12-13世紀の解体痕があるウシの骨が出土しており、古代末から中世にウシが多く利用されていたことがわかる資料である。

SD2204からイヌの骨が1匹分まとまった状態で出土している (写真11-3)。発掘調査後風化が進み細片化している。骨は埋葬後に少し動いたものと思われる。出土状況の図と写真では判別しにくいものの、背中をかなり丸く曲げ後足の間に前足を挟み込んでいる。前足は両肘をそろえて右前足を90°、左前足はかなり鋭角に曲げている。左前足は桡骨と中手骨の間が90°曲がっている。右前足の中手骨から遠位の骨は遺存していない。左前足の中手骨の1本は骨折した痕跡があり、その後骨折部分が増殖しやが曲がりながらも癒着している。首を後方に曲げ右足脛骨の上に下顎を置いている。頭蓋骨と頸椎、寛骨と大腿骨がやや離れた位置にあるのは腐敗が進んだ状態で椎骨・肩甲骨・寛骨が後ろにずれたものと思われる。頭蓋骨は残りが悪く、頭頂部や後頭骨は遺存していない。歯は下顎のP1-M2まで遺存している。M1はかなり磨耗している。高齢まで生きていたものと思われる。また、後頭部と腰の下には径が5-6cmほどの円溝がそれぞれ敷かれていた。埋葬姿勢が不自然なこと、骨折しながらも治癒した痕跡がありその後高齢まで生存していたことなどから、飼い犬で死んだのち丁寧に埋葬されたものと思われる。骨は完全に残っているのが尺骨と橈骨・一部の指骨のみであるがまだ復元中のため現在計測できるのは橈骨・尺骨のみである。橈骨全長14.3cm。尺骨全長17.9cm、体前後径2.4cm。他にM1歯冠前後最大径14.3cmを測る。(計測点は斎藤弘吉氏「犬科動物骨格計測法」に準拠する。)

1 SK1038ウシ胸椎  
2 SK1024ウシ下顎



3 SD2204イヌ(部分)

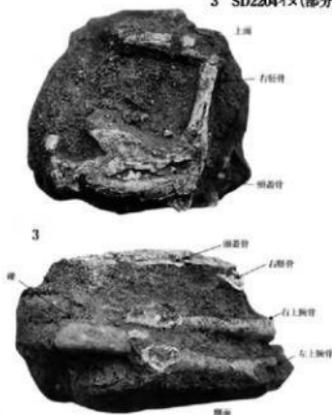


写真11 博多117次出土獣骨



## VI 博多遺跡群117次SX1201出土の素焼人形について

(太宰府市教育委員会 山村信榮)

### 1 出土環境と時期

ここで報告する遺物群は117次Ⅱ区南側中央で検出された廃棄土坑から出土した素焼きの人形を中心としたものである。土坑は焼け土と炭化物が何度も供給されて埋没し、多量の遺物を伴っていた(編者注;遺構については前掲参照)。遺物は一部層位的に取り上げられているが、年代的な位置付けとして肥前系染付では19世紀前半以降の蓋茶碗、端反碗を持ち、広東碗がなく明治前半期に出回った銅版刷模様の染付も見られず、明治期に量が増える三彩山水七瓶がないところなどから、幕末から明治10年代頃に位置付けられるものである。この時期の他の遺物には瓦、土師質の焙烙、火鉢、七輪、大甕、中央の黒い土師皿、瓦質火鉢、肥前系陶器の灯火具、鉄絵鉢、高取系鉢、華瓶などが見られる(表2参照)。土師皿には二次的に同心円状に被熱したものがあり、火を使う作業がおこなわれたことを示している。

### 2 素焼人形類(図版7~8)

コンテナケース約1箱分の素焼人形の破片が出土しており、裏側に指押しの痕跡が顕著な型を用いたものが大半を占めている。破片のうち部位特定可能なもの110点について観察をおこなった(表3参照)。

ジャンルとしては童児、武者、恵比寿、大黒、布袋、波、魚、衣、猿、三番鬼、犬、小人形、型、粘土塊を挙げている。破片であるための得た区分とはいえない。うち、童児は短く太い手足、坊主頭を範としているが、頭部は布袋と区分がつかないものがあるよう。「金太郎」が大半と思われ、魚と波はセットで鯉取り金太郎となるものがあるようだ。遺の表現を持つものを武者としたが中国風の意匠と和風のものがあり前者(031~033)は「関羽」、後者には「子ども義経」(034~037)、「加藤清正」(038)などが想定される。これらは各部位の大きさから復元すると優に30センチを超える大きさになる。大黒は大型の面でこれも30センチを超える大型のものである(043~045)。ジャンルを総括すれば「節句もの」として位置付けられる童児、武者と「縁起物」としての恵比寿、大黒、布袋、三番鬼、「玩具」としての犬、小人形、「生産用具」としての型、粘土塊(窯道具)に区分できる。

使用された土は肌色に近い薄い褐色を呈すが、一部には白色に近いものも見られる。大半の断面の芯付近が黒色のままであった。粘土にはほとんど砂粒を含んでいない。

童児の目や犬の前掛けなどの意匠には京都伏見に共通する要素が認められる(観察表では伏見系と表記、『伏見人形の原型』奥村寛純 昭和51年)。小型人形の中には型を用いない「猿」のように中世以来意匠が変わっていないものが見られる(山村信榮「中世の素焼人形考」1977『博多研究会誌』第5号)。猿の人形は玩具以上に抱きかかると呪術的意味を持ったものであった。今回の製品群そのものが縁起ものや節句もので占められ、単なる鑑賞品や玩具という側面だけではなく全般的に民間信仰的な側面でもくられるものであるといえる。この点で現在の「博多人形」とは性格が異なる。

### 3 遺物の位置付け

製品としては一部下塗りである胡粉(白色顔料)が残存しているが、上絵付けの痕跡が見られず未製品の可能性が考えられ、また、これだけの量が出土しながらほとんど破片同士は接合できず、また、

同じ型の同一部位の破片が複数確認される状況があることや（表備考中の同記記事4例を参照）、生産品としての型や窯詰め時の補助具である「メゲ」と呼ばれる粘土塊が出土していることから、人形生産工房からの2次的廃棄（いわゆる「片付け」）によるものと判断される。

#### 4 遺跡の位置

本調査区は江戸末期から明治期には「祇園町下」、「下祇園町」に属し、慶応元年から明治3年の納税記録書である「博多店運上帳」によれば19軒の窯業生産者が集住していた町内であった。しかも本調査区東隣地（現冷泉町2-8朝日プラザ祇園ビル）は昭和40年代前半まで博多人形の本流をつくった「中ノ子家」があったところである（中ノ子勝美、恵美子、富貴子さんご教示）。同家口伝によれば同家は長男家が「長右衛門」の名で代々陶師（土師質土器制作）を専らとしていたが（梶；宗秋寺過去帳）、文政5（1822）年に安兵衛、吉兵衛親子が「伏見人形に擬して土人形を製造」するようになった（梶；『九州日報』明治34年3月14日記事）。のち、嘉永3（1850）年に節句用の素焼着色大型人形を頒布したという。この「節句もの」広く市場に受け入れられた結果、同家は弟子を養成し、同業者が増え後の博多人形業界の下地が出来ていった（『博多人形沿革史』平成13年博多人形商工業組合刊行予定）。現在、この時期の人形の型は春日市在住の中ノ子勝美氏が継承され「古型博多人形」として制作を続けられている。この型の内銘を持つ31点が昭和63年12月17日に福岡県有形民俗文化財に指定されている。

本遺跡で出土した大型の「節句もの」、「縁起もの」の人形群はまさに中ノ子家工房の西隣地で出土したものであり、破片資料とはいえ博多生産の素焼人形研究の基準の一つとなる貴重な資料である。

表2 博多117次SX1201遺物台帳

1201中央土層1層 陶器 掃箒蓋、広口壺 土師質土器 始結、棧（円形穿孔）	1201西「佛状基礎構体方入」 9/3 肥前系染付 瓶 土師器 小皿（糸、中世）
1201中央土層2層 9/23 瓦 平瓦（被焼）	1201西平上～下層一括 肥前系染付 丸瓶、横蓋、鉢、洗平 陶器 得輪灯火具 瓦質土器 大鉢（スタンプあり） 土師質土器 火鉢、燈籠、灯火具、棧（円形穿孔） 土師器 小皿a（中世） 金襴製品 鉄釘 瓦器 壺（古代末） 青磁 阿波系茶桶（古代末） 白磁 目須輪、目須輪（古代後期） 須臾器 坏器3
1201中央土層3、4層 肥前系染付 丸瓶、横蓋、鉢子（面取り） 白磁 皿、桶（内面花文スタンプ、15cm） 陶器 瓶（底径8.5cm） 土師器 小皿（糸、中世） 瓦 丸瓦、丸瓦当、平瓦 瓦質土器 火鉢（脚にスタンプ）、火鉢（平鉢）、棧（円形穿孔）、板状大形品（堅質） 土師質土器 火地輪、棧（円形穿孔）、板状大形品	1201（人形出土土流） 9/8 肥前系染付 丸瓶「奉獻納」銘
1201中央土層5-6層 9/23 土師器 坏?皿（内面いぶし）、皿（同心円状被焼、空道具か） 土師質土器 火地輪、火鉢 瓦質土器 火鉢（脚に円穿孔）、火鉢（平鉢） 瓦 平瓦	1201西平下層?（～砂層） 9/3 陶器 得輪小皿（近世）、無輪陶器? 土師質土器 始結? 土師器 丸鉢（古代後期）、坏片
1201中央土層8層 9/23 肥前系染付 小瓶 陶器 無輪陶器片 土師質土器 小かめ 瓦 片	1201最下層?（2264上層?） 9/10 陶器 洗地成（9-18同9/23と接合か） 土師器 小皿（灯明皿）

表2 博多117次SX1201遺物台帳

1201中央土層0層 9/23 土師器 陶器 瓦	片 無胎陶器片 丸瓦頭	1201最下層 9/24 肥前系染付 陶器 青磁 土師器 瓦瓦十器 瓦	皿、椀? 襷輪小皿(灯火具)、鉄鉢鉢、無胎かゆ 同安皿(古代後期-)、皿頭平?(中世) 片 火鉢(平鉢) 丸瓦当、平瓦
1201中央土層10-13層 9/23 瓦瓦十器 瓦	風研? 平瓦	1201最下層(最底層) 9/24 肥前系染付 陶器 土師器 土師瓦十器 須恵器 瓦	丸小椀 鉄鉢鉢鉢、三彩鉢、鉄輪鉢(9-18層9/23と結合か) 小皿、坏a(赤)(中世-) 棧(円形穿孔) 罌 平瓦
1201中央土層層9-18層 9/23 須恵器 白磁 瓦瓦十器 土師器 金銅製品 陶器	罌 片(近世-) 片 片 釘 鉄輪鉢(軟質)	1201最上~下層一揃(人形共伴) 8/24 肥前系染付 陶器 白磁 土師瓦十器 土師器	丸鏡(2)、濠反柄(19c前半以降)、重ね皿、花鉢、鏡子 襷輪陶器 華瓶、燗反柄、紅皿(以上近世以降) 、瓦製鏡、V-型鏡(古代末-) 灯火具、火鉢? 小皿a(赤、中世)、皿(鉢形削り、中央燻し、近世)

※表中の略語は太宰府市の分類に基づく。?は可能性を示す。

表3 博多117次出土土人形觀察表

番号	遺物	位置・層	ジャンル	部位	顔面はか	高さ	幅	奥行	色調	PL	備考	
001	1201	最上~下層一揃	甕瓦	顔面	右側	9.5	5.2	6.7	褐色	001	目は中ノ子鼻	
002	1201	最上~下層一揃	甕瓦	顔面	右側	6.5	3.8	4.0	淡褐色	001	目は伏見系	
003	1201	最上~下層一揃	甕瓦	顔面	口周辺	5.1	4.3	3.8	淡褐色	001		
004	1201	最上~下層一揃	甕瓦	顔面	左側	5.5	2.6	2.3	褐色	001	目は伏見系	
005	1201	最上~下層一揃	甕瓦	顔面	右側	7.2	4.6	3.9	淡褐色	001	鼻あり	
006	1201	最上~下層一揃	甕瓦	顔面	左側	3.6	4.2	6.3	淡褐色	001	鼻あり	
007	1201	最上~下層一揃	甕瓦	顔面	左側?	5.4	3.0	8.3	淡褐色	001	眉間穿孔	
008	1201	最上~下層一揃	甕瓦	顔面	左側	5.3	8.1	5.1	淡褐色	001	鼻あり	
009	1201	最上~下層一揃	甕瓦	手	左側	14.5	9.0	2.5	藍色	002	金太郎?	
010	1201	最上~下層一揃	甕瓦	手	左掌	4.7	6.4	2.3	淡褐色	002	金太郎?	
011	1201	最上~下層一揃	甕瓦	手	右掌	4.2	3.4	2.1	淡褐色	002		
012	1201	最上~下層一揃	甕瓦	手	左掌	9.2	5.2	2.3	淡褐色	002	金太郎?	
013	1201	最上~下層一揃	甕瓦	手	右腕	6.7	5.5	1.9	淡褐色	002		
014	1201	最上~下層一揃	甕瓦	手	右腕?	5.3	8.5	2.8	淡褐色	002		
015	1201	最上~下層一揃	甕瓦	手	右腕?	10.5	6.3	3.1	淡褐色	002		
016	1201	最上~下層一揃	甕瓦	足	中央	9.8	13.0	4.9	淡褐色	003		
017	1201	西平~下層一揃	甕瓦	足	右側	9.6	7.1	2.1	褐色	003		
018	1201	最上~下層一揃	甕瓦	足	左足	5.3	8.6	3.4	褐色	003		
019	1201	最上~下層一揃	甕瓦	顔面	顔面	1.9	3.6	7.3	1.0	淡褐色	003	
020	1201	最上~下層一揃	甕瓦	顔面	顔面	下中央	4.1	7.2	1.5	褐色	003	
021	1201	最上~下層一揃	甕瓦	足	左足	5.1	8.3	3.0	淡褐色	003		
022	1201	最上~下層一揃	甕瓦	足	左足	3.8	5.0	1.2	褐色	003		
023	1201	最上~下層一揃	甕瓦	足	右足	3.7	5.3	2.5	褐色	003		
024	1201	最上~下層一揃	甕瓦	足	左足	3.7	6.1	1.7	褐色	003		
025	1201	最上~下層一揃	甕瓦	足	左足	3.0	9.0	2.6	淡褐色	003		
026	1201	西平~下層一揃	甕瓦	足	左足	2.6	4.8	5.2	淡褐色	004		
027	1201	最上~下層一揃	甕瓦	足	右足	7.0	6.1	6.0	淡褐色	004		
028	1201	最上~下層一揃	甕瓦	足	左足	4.9	6.0	2.0	白褐色	004		
029	1201	最上~下層一揃	甕瓦	足	左足	8.3	13.0	8.7	白褐色	004		
030	1201	最上~下層一揃	甕瓦	足	左足	5.6	7.0	5.0	褐色	004		
031	1201	最上~下層一揃	甕瓦	足	右足	8.3	4.7	1.3	淡褐色	005	「陶器」か	
032	1201	甕瓦	甕瓦	足	左足	8.1	4.7	2.0	白褐色	005	「陶器」か	
033	1201	最上~下層一揃	甕瓦	顔面	顔面	1.9	3.6	7.3	1.0	淡褐色	005	「陶器」か
034	1201	最上~下層一揃	甕瓦	顔面	顔面	3.4	7.4	2.5	白褐色	005	「加藤清正」か	
035	1201	最上~下層一揃	甕瓦	顔面	顔面	4.9	3.3	1.5	淡褐色	005	「加藤清正」か	
036	1201	最上~下層一揃	甕瓦	顔面	顔面	4.6	7.3	5.8	白褐色	005	「加藤清正」か	
037	1201	最上~下層一揃	甕瓦	顔面	顔面	6.6	2.3	1.8	白褐色	005	「加藤清正」か	
038	1201	最上~下層一揃	甕瓦	顔面	顔面	3.5	4.2	3.3	白褐色	005	「加藤清正」か	
039	1201	最上~下層一揃	甕瓦	顔面	顔面	6.4	5.8	3.0	淡褐色	006	顔面保存	
040	1201	最上~下層一揃	甕瓦	顔面	顔面	13.0	7.0	3.6	淡褐色	006	039と同じか	
041	1201	最上~下層一揃	甕瓦	顔面	顔面	9.0	6.0	8.0	淡褐色	006		

表3 博多117次出土土人形觀察表

942	1201	東上一下層一拵	赤塗	左肩	上縁	11.5	11.0	3.5	淡褐色	006	
943	1201	東上一下層一拵	大黒	大面	顔左	12.1	12.5	3.5	褐色	006	
944	1201	東上一下層一拵	大黒	大面	顔左?	9.8	8.7	2.8	淡褐色	006	
945	1201	東上一下層一拵	大黒	大面	顔左下	12.5	7.3	3.6	淡褐色	006	胡蝶模写
946	1201	東上一下層一拵	赤塗	深顔		18.8	12.8	3.5	淡褐色	007	志那、左側は脚
947	1201	東上一下層一拵	赤塗	斜顔		8.8	12.2	3.5	淡褐色	007	048と同型、右は首
948	1201	東上一下層一拵	赤塗	斜顔		8.5	10.2	1.6	淡褐色	007	047と同型、右は首
949	1201	東上一下層一拵	赤塗	横顔		11.4	7.0	1.8	淡褐色	007	050、051と同型、志那
950	1201	東上一下層一拵	赤塗	横顔		7.3	9.7	2.0	淡褐色	007	志那
951	1201	東上一下層一拵	赤塗	横顔		4.5	4.5	1.8	淡褐色	007	志那
952	1201	東上一下層一拵	赤塗?	斜顔		4.8	4.5	2.2	淡褐色	007	志那
953	1201	東上一下層一拵	赤塗?	斜顔		7.6	9.6	1.8	淡褐色	007	志那、手面造形か
954	1201	東上一下層一拵	赤塗	横顔射影入大		6.2	8.6	1.0	淡褐色	008	志那、手面造形か
955	1201	東上一下層一拵	赤塗	横顔射影入大		9.1	9.8	1.2	淡褐色	008	志那
956	1201	東上一下層一拵	赤塗	横顔射影入中		5.7	11.5	4.0	淡褐色	008	志那
957	1201	東上一下層一拵	赤塗	横顔射影入中		9.7	9.7	1.9	淡褐色	008	志那
958	1201	東上一下層一拵	赤塗	横顔射影入大		7.7	6.0	1.2	淡褐色	008	志那
959	1201	東上一下層一拵	赤塗	横顔射影入中		5.3	6.8	1.8	淡褐色	008	志那
960	1201	東上一下層一拵	赤塗	横顔射影入小		4.3	4.5	1.7	淡褐色	008	志那
961	1201	東上一下層一拵	赤塗	横顔射影入中		4.8	7.2	0.9	淡褐色	008	手面造形
962	1201	東上一下層一拵	赤塗	横顔射影入中		8.3	6.2	0.9	淡褐色	008	足ひれあり
963	1201	東上一下層一拵	赤塗	横顔なし		5.4	6.3	0.9	白褐色	008	入りあり、「金太郎」か
964	1201	東上一下層一拵	赤塗	横顔なし		5.5	9.0	1.4	白褐色	008	足ひれあり
965	1201	東上一下層一拵	赤塗	横顔なし		3.9	8.2	1.3	白褐色	008	
966	1201	東上一下層一拵	赤塗	横顔		5.3	6.0	1.7	淡褐色	009	067と同型
967	1201	東上一下層一拵	赤塗	横顔		4.8	5.5	1.4	淡褐色	009	066と同型
968	1201	東上一下層一拵	赤塗	横顔		10.0	9.5	1.4	褐色	009	
969	1201	東上一下層一拵	赤塗	横顔	足ひれ	8.6	9.2	4.5	淡褐色	009	志那
970	1201	東上一下層一拵	赤塗	横顔	足ひれ	9.0	6.6	4.0	淡褐色	009	
971	1201	東上一下層一拵	赤塗	横顔	足ひれ?	5.6	5.0	2.2	淡褐色	009	
972	1201	西上一下層一拵	赤塗	横顔		13.1	6.0	2.4	淡褐色	010	志那、073上部か
973	1201	西上一下層一拵	赤塗	横顔		10.8	5.8	5.2	淡褐色	010	志那、力士「海ノ年」か
974	1201	東上一下層一拵	赤塗	右胸		6.3	7.2	0.9	淡褐色	010	志那、右腕か
975	1201	東上一下層一拵	赤塗	左胸		8.8	5.5	1.1	淡褐色	010	志那、胸板は認め
976	1201	東上一下層一拵	赤塗	肩?		6.7	7.0	1.6	淡褐色	010	志那、右腕の裏部分か
977	1201	東上一下層一拵	赤塗	横顔		10.7	8.2	2.1	淡褐色	010	志那、髭老人の髪部分か
978	1201	東上一下層一拵	赤塗	袴	足打	8.8	7.9	4.4	淡褐色	010	志那、「福助」
979	1201	東上一下層一拵	赤塗	袴	穴肩	4.8	4.0	3.3	褐色	010	志那
980	1201	東上一下層一拵	赤塗	袴		8.0	9.2	3.3	淡褐色	010	志那
981	1201	東上一下層一拵	赤塗	横顔	袖ひし	6.5	7.4	1.7	白褐色	011	志那
982	1201	東上一下層一拵	赤塗	横顔	前ひし	7.4	8.4	1.9	淡褐色	011	志那
983	1201	東上一下層一拵	赤塗	袴		10.1	3.6	6.6	淡褐色	011	志那、腕先は「腕掛」か
984	1201	東上一下層一拵	赤塗	袴		14.8	11.0	5.3	淡褐色	011	志那、「髭」か
985	1201	東上一下層一拵	赤塗	袴		11.1	10.0	4.0	淡褐色	011	志那、「髭」か
986	1201	西上一下層一拵	赤塗	袴		11.3	9.4	5.1	白褐色	011	志那
987	1201	西上一下層一拵	赤塗	右手		4.6	5.4	2.3	淡褐色	012	志那
988	1201	西上一下層一拵	赤塗	左手		6.8	6.0	2.5	淡褐色	012	志那、写真上縁で「御持ち」か
989	1201	東上一下層一拵	赤塗	腰	右足	4.8	4.9	2.1	淡褐色	012	志那
990	1201	東上一下層一拵	赤塗	腰	腰?	3.5	9.1	2.2	淡褐色	012	志那
991	1201	東上一下層一拵	赤塗	腰	腰	2.9	5.4	0.9	淡褐色	012	志那
992	1201	東上一下層一拵	赤塗	腰	腰	3.3	5.3	3.1	褐色	012	志那
993	1201	東上一下層一拵	赤塗	腰	腰?	3.4	5.4	0.8	淡褐色	012	志那
994	1201	東上一下層一拵	赤塗	腰	腰	5.1	6.3	1.1	淡褐色	012	志那
995	1201	東上一下層一拵	赤塗	腰	腰	4.6	5.2	1.4	淡褐色	012	志那、096と同型
996	1201	東上一下層一拵	赤塗	腰	腰	6.3	7.1	2.3	淡褐色	012	志那、005と同型
997	1201	西上一下層一拵	赤塗	腰	腰?	4.2	5.0	1.2	淡褐色	012	志那
998	1201	東上一下層一拵	赤塗	腰	腰?	10.2	7.5	4.5	淡褐色	012	志那
999	1201	東上一下層一拵	赤塗	不明		5.0	6.1	3.2	淡褐色	013	志那
1000	1201	東上一下層一拵	赤塗	不明		10.3	9.5	6.4	白褐色	013	
101	1201	西上一下層一拵	赤塗	二重履	袴	3.9	4.1	1.3	淡褐色	013	志那
102	1201	西上一下層一拵	赤塗	三重履	袴付子	5.6	6.6	4.2	淡褐色	013	志那、顔は模写
103	1201	東上一下層一拵	赤塗	三重履	右履	2.5	8.5	5.0	淡褐色	013	志那、顔は模写
104	1201	東上一下層一拵	赤塗	六	前掛付	8.0	5.3	1.3	褐色	013	志那、足は黒
105	1201	東上一下層一拵	赤塗	不明		5.6	5.2	1.8	淡褐色	013	志那
106	1280	(上)中層	赤塗	首欠履		5.4	2.4	1.9	淡褐色	014	中央
107	1280	区律土	赤塗			7.5	3.8	3.0	淡褐色	014	胴部は門透身孔
108	1201	西上一下層一拵	赤塗	横顔		14.5	7.5	9.6	褐色	014	中くり込み
109	1201	東上一下層一拵	赤塗	横顔		4.7	3.7	2.8	褐色	014	笠の縁は「メダ」か
110	1280	区律土	赤塗			7.0	6.3	1.8	褐色	014	表面は滑ではない





1. 1区第1面全景 (北から)



3. 1区第2面全景 (南から)



2. 1区第1面全景 (南から)



4. 1区第2面全景 (北から)



5. 1区第3面検出状況 (西から)



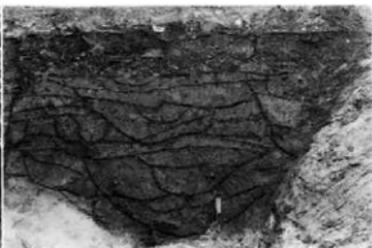
6. 1区第3面北半掘削状況 (北から)



7. 1区西壁土層北側 (東から)



8. 1区西壁土層中央 (南から)



9. 1区西壁土層南側 (東から)



10. II区第1面中央—南半状況(東から)



11. II区第1面全景(南から)



12. II区第1面北側状況(西から)



13. II区第2面全景(北から)



14. II区第2面全景(南から)



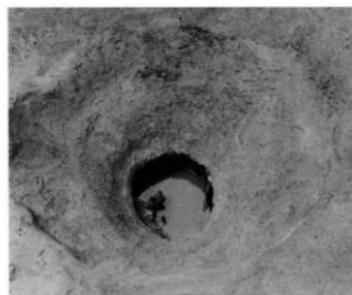
15. II区第2面中央部状況(東から)



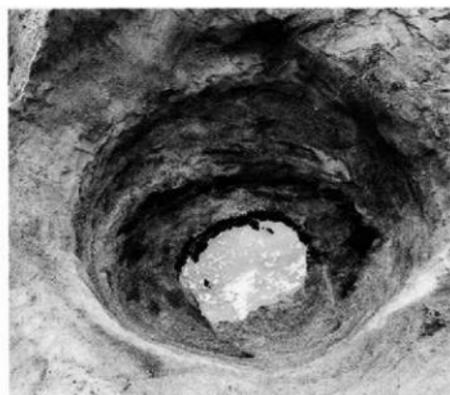
16. SE2002土層(東から)



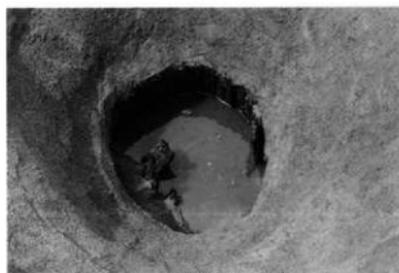
17. SE2002完掘状況(西から)



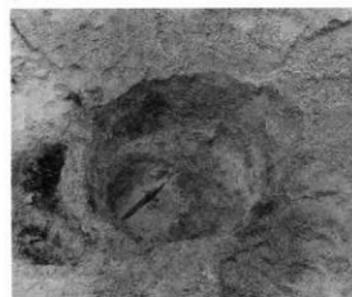
18. SE2006完掘状況(南から)



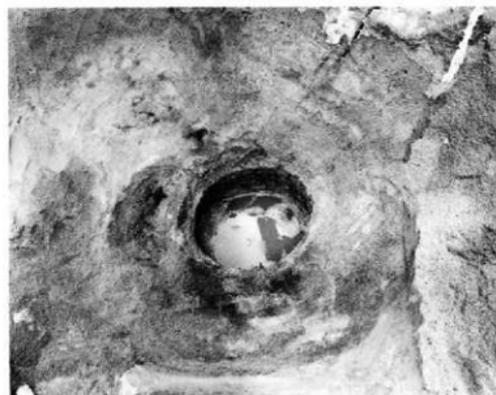
20. SE2009完掘状況(西から)



19. SE2006井戸枠出土状況(南から)



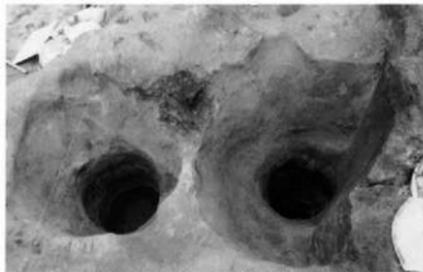
21. SE2011井戸枠下層小刀出土状況(北西から)



22. SE2011完掘状況(西から)



23. SE2011井戸枠出土状況(北から)



24. SE2407(左)・SE2406(右) 完掘状況(北から)



25. SD1050(SD2004上層)土層(東から)



26. SD2004土層(西から)



29. SK1038獣骨出土状況上面(西から)



27. SD2004完掘状況(奥は近世井戸)(東から)



30. SK1038獣骨出土状況(途中)(南から)



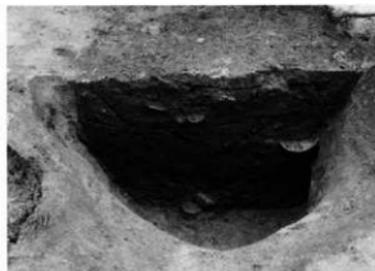
28. SD2204中央土層(西から)



31. SK1038下層獣骨出土状況（北から）



33. SK1024土層（北から）



32. SK1012土層（東から）※崩落前



34. SK1024シルト面出土状況・断ち割り土層状況（北から）



35. SX1201掘削状況（中央未掘、柱状基礎は攪乱）（北から）



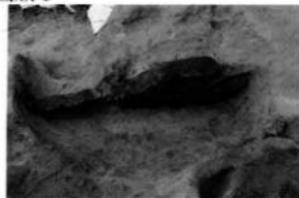
36. SX1201中央柱状土層（東から）



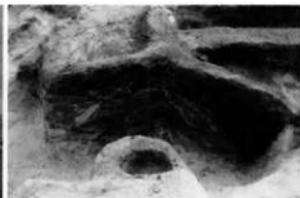
37. SK1352 (1219?) 完掘状況（北西から）



38. II区Lグリット砂丘面 (2面下) 遺構掘削状況（北西から）



39. SK2241土層 (西から)



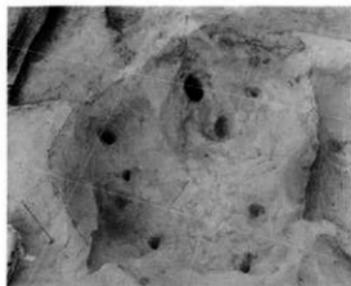
40. SK2219土層 (東から)



42. SK2232 (左)・SK2236 (右) 掘削状況 (西から)



41. SK2219完掘状況 (北から)



43. SK2236完掘状況 (西から)



44. SX2052出土状況 (東から)



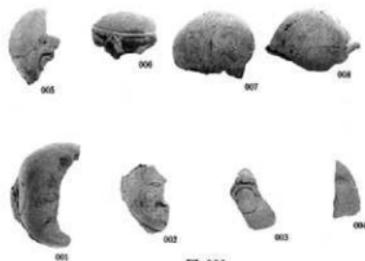
45. SP3010検出状況 (西から)



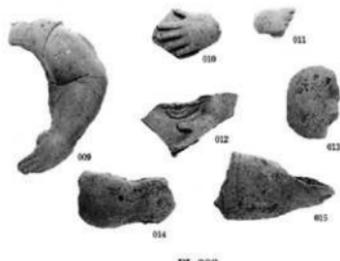
46. SC2231検出状況 (南から)



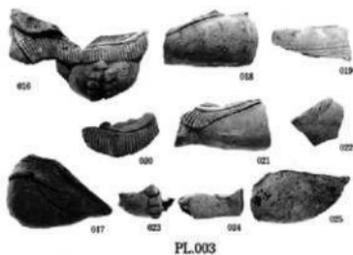
47. SC2231中央部出土状況 (南から)



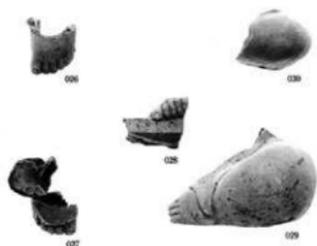
PL.001



PL.002



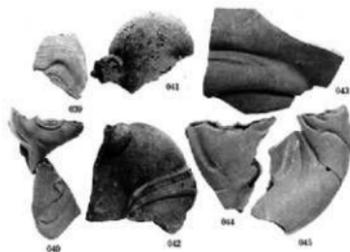
PL.003



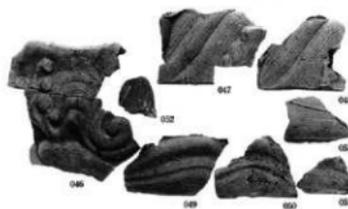
PL.004



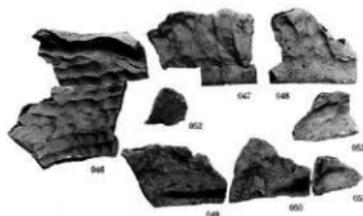
PL.005



PL.006

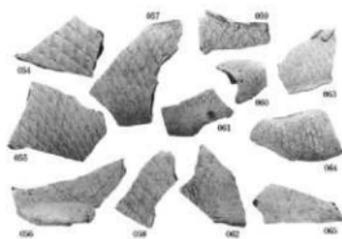


PL.007-1(表)

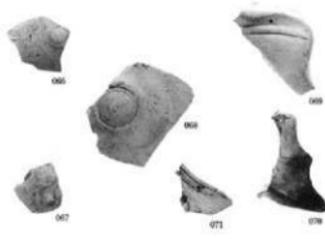


PL.007-2(裏)

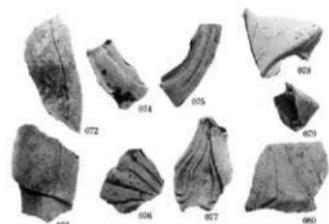
SK1201出土近世素焼人形 (1) ※P.62の表2に対証



PL.008



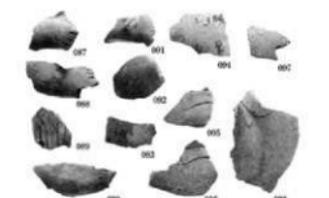
PL.009



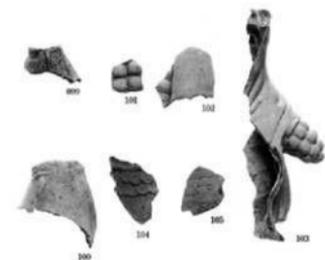
PL.010



PL.011



PL.012



PL.013



PL.014-1(表)



PL.014-2(裏)

SX1201出土五世素焼人形 (2) ※P.62の表2に対応

(→P.57から)の型は中ノ子家が継承しているが全容公開はなされず不明点が多いが、伝世している近世末頃とされる型や人形とSX1201出土の人形は若干クセが異なるという(中ノ子勝美・佳美の両氏より御教示)。一方で、基本的には流派は同じであり、「リズムにのった慣れた作品」というから、博多人形の生産拡大期の、本家家元の弟子や下請けの製作品が廃棄の主体であったということか。あるいは中ノ子家本家工房の他に、周囲に下請けや弟子の工房があったのかもしれないが、それを裏付ける資料も否定する資料もない。ただし破片接合がほとんどないので、別の場所で壊れてから片付けられ、部分的に廃棄された二次的ないし三次的な廃棄行為であることはいえる。また30cm以上の大型品がみられる(巻頭図版の「三番瓔」など)ことから近世末期の手工業の発展も読み取ることができようか。他についてはV章の山村信榮氏の観察・報告を参照されたい。

その他、二三の問題について記したい部分もあるが(中世土師器の編年、古式土師器の問題、遺構の変遷など)、遺構・遺物の報告記述の中で触れた部分が多く、まとまりがないがここで筆を置きたい。最後に、報告書作成に根気よく協力していただいた関係諸氏の皆様に心から感謝申し上げます。

遺跡調査番号	9919	遺跡略号	HKT-117	分布地図番号	049-0121
調査地地籍	福岡市博多区冷泉町83・84番地ほか		事前審査番号	10-2-285	
開発面積	800.5㎡	調査面積	365㎡	調査期間	1999年6月7日～9月27日

## 博 多 76

- 博多遺跡群第117次調査の概要  
 福岡市埋蔵文化財調査報告書第667集  
 2001年(平成13年)3月30日  
 発行 福岡市教育委員会  
 福岡市中央区天神1丁目8番1号  
 印刷 ぞつま印刷株式会社  
 福岡市博多区吉塚1丁目9番7号

